ナウシカの兄　R18

虫大臣マーク2

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全年齢でやっていた拙作のＲ１８リメイク。

全年齢版を読んで下さっていた読者の方々、申し訳ありません。

全年齢でやや行き過ぎた性描写をした可能性があったのであちらを削除し、良い機会だと思うことにしてエロメインで再構成しました。

オリ主がナウシカの兄として生まれて、風の谷のナウシカワールドの美女にがっつりエロするＳＳです。

エロメインですのであまり全年齢版の時のような勢いだけのコミカル描写は薄くなるか無くなると思うので、エロに興味ない方は読む価値が無いかもしれません。

折角のＲ１８なので原作漫画ばりのグロも入るかもしれません。

エロあり回にはタイトルに★つけます。

目次

メギドとナウシカ ★ ―― 1
メギド、ナウシカとやる ★ ―― 12
メギドの精神旅行 ―― 22
ユパの帰還 ★ ―― 33
メギドとラステル ―― 43
ラステル、覗く ★ ―― 57
メギドとラステル ★ ―― 72
クシャナ来訪 ―― 80
クシャナ、やられる ★ ―― 95
親衛隊の脳破壊　の後　三人よれば姦しい ★（微エロ） ―― 114

メギドとナウシカ　★

風の谷の族長ジルは１２人子をもうけたが、
その中で生きて育った子はたった２人だけだった。
それでも幸運と言えるだろう。
何せ、１人は男子で、しかも幼い頃から風使いとしての才能も容姿にも恵まれ、毒が満ちた今の世にあって非常に頑健な肉体を備えていた。
名をメギドといい、跡継ぎとして申し分ない麒麟児だった。
もう１人は女児で、こちらも成長するにつれてそれはもう美しい女になっていった。
名をナウシカといい、兄に負けず劣らずの天賦の才を持った子だ。
兄妹仲も良く、ジルは風の谷の将来を明るいものだと確信していたのだった。
谷の誰もが羨む美男美女で聡明かつ戦士の才までもったこの兄妹が通りを歩けば、風の谷の民達は老若男女問わずに慕う心を競い合うように表して王子と姫に見せるのだった。
メギドとナウシカは同年代で釣り合う者がいないのもあったが、それ以上にとにかく仲が良くて四六時中共にいた。
二人して腐海や蟲にまで愛情を持っているのもあってそれはもう仲が良かった。
メーヴェに二人乗りしミト爺やユパを撒いて二人だけで腐海に行ってしまうこともしょっちゅうだ。
だが大人も舌を巻く程強く腐海と蟲を理解する兄妹であるからと二人きりの腐海遊びも日常のこととして谷の者は皆受け入れていた。
しかし…。
「っう…んっ…ふっ、うぅ、ふぁ♡」
腐海の森で兄妹は秘密の遊びに興じているのは誰も知らない。
成熟し始めたナウシカの汚れなき体だが、清廉な乙女に似つかわしくない程女として豊かで蠱惑的な乳房は兄に好きなように揉まれていた。

二人がこのような関係になったのはつい先ほどだ。
メーヴェで腐海をゆったり飛んでいた時に、ヘビケラの尾がメーヴェの翼を掠めた。
その衝撃はすぐにメギドが立て直したが、よろけたナウシカは最近乳房同様に肉付きがよくなってきた尻をスパッツ越しに思い切り兄の腰に捻じり付けてしまった。
ナウシカは慕う兄の雄のモノを女になり始めていた乙女の花園で感じ取ってしまい「あっ!?」と自分でも出したことのない声で驚いてよろけた。
よろけて落ちそうになったナウシカを助けようとメギドが咄嗟に掴んだ所は大きくなり始めていた胸で、ナウシカは「っ♡」と声にならない声で初めて性感を得る。
同時に体が跳ねてしまってとうとうバランスを崩したメーヴェは緩やかに腐海の大地に墜落した。
蟲も潰していない。
二人共怪我はない。
メーヴェも無事で、しかも二人が遊覧していたこの区域は腐海の毒も比較的薄い。
メギドも妹が見せた女の反応に欲情をしていた。
ナウシカも兄を男として見ていた根底が今の刺激で露出した。
ナウシカにとって兄メギドは、自分だけの兄であると同時に自分を一番に理解してくれる1人の男性であるとも想い続けていたのだった。
性に最も興味を抱く年頃であった二人はもう止まらなかった。
そして今メギドの手はナウシカの巨乳を存分に背後から揉んでいるのだった。
「はっ♡…う、んん…お、お兄、様…っぅ、こ、こんなの…、兄妹で…ん、ん、ん…ダメっ♡…っです」
薄い青のナウシカの外行きの腐海装束の上からでも分かるナウシカの巨乳がぐにゅぐにゅとメギドの手の中で形を変えている。
口では止めろとナウシカは言うが、兄の手を止めようと添えたナウ

シカの手には子供のような力しか籠められていない。
「あっ、あぁ…お兄様…っ、…ん…お兄様ぁ…」
グリグリと兄の腰がナウシカのスパッツに押し付けられる。
怒張を始めていたメギドの陰茎と、綻び始めたナウシカの秘裂が布越しに擦り合う。
メギドが妹の襟元のボタンを毟るように外して、開いたそこから手をねじ込む。
(あっ)
ナウシカの背が少ししなった。
いつも彼女が腐海装束の下に来ている白いタンクトップの上から兄の手が胸を弄ぶ。
薄く鈍い淫らな電気を延々と送り込まれていた腐海装束越しの愛撫と違ってその感覚はよりダイレクトだ。
装束の下はいつも汗で蒸れている。
じめじめと乙女の汗で濡れるタンクトップ。
「んっ、んっ…んっ、ふぅ…ふぅ…ダメ…お兄様…」
瘴気マスクで籠もるナウシカの声は明らかに熱を持っていた。
マスクの下で半開きになって荒い口呼吸をするナウシカのベロが少しだらしなくぷりっとした唇から覗く。
ナウシカの女の本能が兄とのキスを求めていたが瘴気の中でマスクは外せない。
兄とファーストキスが出来ないのが、ナウシカは本能で不満に思う。
だが理性は未だに兄妹での禁忌を戒めてくる。
「お兄様…お兄様ぁ…やめて…んっ…ダメ…ふぁ…あっ…あっ、ぁあっ、あっ♡そこ…はぁぁぁ…摘ま、ないで…」
揉まれ続けた大きなナウシカの胸。その可憐な先端は今までの刺激で生まれて初めて固くなりつつあった。
そこにメギドがやわやわと指の腹で乳首を摘んだものだからナウシカはじくじくとした刺激が胸の先から背を通って腹の奥に響くのを感じる。

ナウシカの乳首が腐海装束の下で汗でべたつくタンクトップを持ち上げていた。
（胸の先が…変…♡じんじんして…自分で、触りたいって…思ってしまう）
ナウシカは自分でオナニーすらしたことがない。
豊かな体を持ちながらも、兄への恋慕を持ちながらもそれらをひた隠しにして押し殺していた。
それが兄に無理やり目覚めさせられた。
その時、兄が急にナウシカから離れる。
「え…？」
ナウシカは服の中を這っていた兄の手の温もりの消失に大きな喪失感と寂しさを覚えた。
しかし同時に兄が禁忌を思い留まってくれたのかとも、ほんの一欠片期待した。
メギドは「待っていろ」と短く言うと懐から筒を取り出し、そこからシューっと泡を噴射する。
泡は膨れて半透明の球になって兄妹を優しく包み込んでちょっとしたテントに早変わりだ。
メギドは、時折こうやって腐海に慣れ親しんだナウシカでさえ知らない腐海のテクニックを披露した。
「はぁ…はぁ……す、すごい…お兄様、一体どこでこんな技を」
兄に揉まれ摘まれ淫らな痺れにうなされる胸を押さえながら、ピンクに染まりつつある吐息も漏らしながらナウシカは兄の腐海生存術に驚嘆する。
兄はさらりと「森の人の技だ」と事も無げに答えたが、いったい何時何処でメギドが森の人と出会い教えを請う機会があったのか。
ナウシカには皆目見当もつかないが、只一つ言えることは兄は見知らぬ異国の技を知っているということだ。
兄が飛行帽とゴーグルとマスクをかなぐり捨てる。
この泡のテントの中には瘴気は入ってこないのだ。
それを悟ったナウシカも兄に習って煩わしいとばかりに頭を守っ

ていたそれらを捨てた。
「っ！お、お兄様……ん……ちゅっ、ん…んむぅ…ちゅっ、んんっ♡」
兄の端麗な顔が迫ってきてナウシカは一瞬戸惑ってからそれを受け入れた。
ナウシカのみずみずしい唇が兄の固い唇と触れ合う。
普段、物静かでクールな兄の情熱的な舌使いで妹の唇をこじ開けようとすると、ナウシカの閉じられていた無垢な門は侵入者をあっさりと迎え入れた。
「ふぁ…」
（ファーストキス…♡こんな、熱いだなんて…男の人の舌、が…お兄様の、ベロが…っ、んっ、ぅあ）
話に聞いていた異性とのキスはもっと軽く簡単な…唇を触れ合わせるだけのものと思っていたナウシカは戸惑う。
しかしベロとベロが触れ合い絡み合う感覚は甘美だった。
ベロが纏う唾も全く不快ではない。
寧ろ兄のものと思うとナウシカは積極的に兄の舌から唾液を吸い飲み干したい衝動に駆られる。
「お兄、さまぁ…んっ、んぁ…っ、んちゅう、っ！ぷぁ…はぁ…ん…ん…ちゅっ…おひぃ、しゃまぁ…れろぉ、ちゅっ、んぷぅ、ん、んあっ、きょうらいれ…こんな、らめ…♡」
口の外も中もナウシカは兄に蹂躙される。
ベロをベロでねとりと絡み取られて上手く喋れない。喋ろうとすると舌がさらに絡んでナウシカの頭の奥を痺れさせた。
メギドはナウシカをぎゅっと強く抱きしめ続け、ナウシカの後頭部を片手で掴み口と口を押し付ける。
呼吸も辛い程の深いキスが続いている間中、ナウシカのベロから理性を麻痺させる痺れがくる。
強く抱かれ兄の胸板に押し付けられるむにゅりと潰れる自分の乳房からも、乳首がぐにぐにと潰される感覚が伝わる。
ナウシカの理性は崩れつつある。
「あっ、んぁ…？きゃっ！」

唇が解放され、次の瞬間にナウシカは兄の逞しい腕に抱き上げられそのまま草むらに寝かされる。
ナウシカの赤くなっていた顔はさらに蒸気して真っ赤になった。
「お、お兄様…ダメです…これ以上は…。わ、私達…血が繋がった兄妹なのですよ…？」
ナウシカは紅潮した顔と荒い息を漏らしながら兄を必死に拒絶しようとした。
今ここで止まらなければ、そうしなければどこまでも自分が禁断の愛に溺れていってしまうという確信めいた予感があったからだ。
寝転されながらも白いスパッツに隠された肉付きの良い太ももはピタリと閉じられていたが、
メギドが閉じた太ももの隙間に鼻を突っ込んできて「あぁっ」とナウシカは悶えた。
すーはー…――
兄が蒸れたデルタで深呼吸をしている。
「やっ！お兄様っ…そ、そんなとこの臭い…嗅がないでぇ…！」
兄の頭を抑えながらナウシカは更に悶える。
（嗅がれているっ！お兄様に…！私のあそこの臭いを！あぁ…そんな…汗だっていっぱいかいてしまっているのに…！）
厚手のスパッツ越しでも兄の熱が伝わる。
メギドはスパッツの上からナウシカの閉じられた股間を吸い舐めている。
それがナウシカには分かった。
微量の淫らな刺激が、彼女自身、湯浴みや水浴びで丁寧に洗う時以外触れない場所から襲ってくる。
「はっ、あっ…んっ…ん……んっ、んっ……あぁ……いやぁ」
両手で兄の頭を抑えているがもはや形だけだ。
強張っていたナウシカの腰はだんだんと兄の舌に合わせて動き出している。
「ナウシカっ！」
「あ…メギドお兄、様…」

メギドの目がナウシカの瞳をギラギラと覗く。
その熱量が、果たして愛情からなのか欲望からなのかナウシカには分からなかったが、
きっと今自分も兄と同じ目をしていると思えた。
兄にそんな目で見られ、名を呼ばれ、求められたらもうナウシカは兄を拒めない。
「お兄様…だめ…」
言いつつ、ナウシカはスパッツを下ろしてくる兄にさほど抵抗しない。
大きな尻を無意識に持ち上げて兄が脱がすのをアシストさえしていた。
膝下まで脱がされた所でメギドは妹の膝を割って開こうとしたが、ナウシカは強い羞恥から初めて強く抵抗する。
「そこは…そこは、恥ずかしすぎて…本当に、か、堪忍して下さい…お兄様…そこは、ダメなの」
脱がされたスパッツの股布の内側は湿っていた。
薄い下着から滲み出た汗以外の体液で湿り、下着とスパッツを繋ぐ細い液の糸が引く。
ナウシカの顔はもうどうしようもない程真っ赤で、羞恥から涙まで流れる。
ナウシカには自分の秘所がおしっことは違う潤みを湛えているのが理解できた。
「見ないで…」
腕で顔を覆い隠し、もう片方の手で濡れた乙女の花園を隠す。
だが兄はナウシカの手ごと、その下に隠されたナウシカの淫裂を舐め回す。
「っ♡お、お兄ぃ…様ぁ…!あっ!♡そんなとこ…!な、舐める、なん、てぇ…!あぁっ♡」
指を舐めまくられ、指の隙間をこじ開けて滑ったベロがナウシカの秘所に下着越しに届いた。
汗と愛液で濡れて、唯でさえ薄い下着はさらに透けて生えつつある

陰毛すらうっすら見える。そんな薄い下着ごと、兄の舌は誰にも荒らされた事のない花園を荒らしていく。
（っ！さ、探ってる…！♡お兄様が…私のあそこを舐めて…♡イケない場所を…探しているっ♡）
「あっ、あっ、あっ！♡だめっ、お兄様、だめぇ…いや、いやぁ♡私…恥ずかしいっ！お兄様ぁ♡そこっ、汚い…からぁ」
ナウシカの腰が跳ねたが、それでもナウシカは必死に秘所を覆う手をどけなかった。
それがなくなれば、もうこの後の抵抗は濡れて下着の機能を失った布切れで、そこを突破されれば後は蕩けた処女膜だけが最後の門。
「あっ、だめっ、んっ、んっん～～っ！っ！んぅ！ぅあっ！♡あっ♡やだっ♡お兄様ぁ♡もっ…だ、めぇ！♡」
とうとう力の無くなったナウシカの手が兄に突破された。
両手はもう兄の頭に添えられるだけで、兄の髪の毛をわさわさと撫でるだけだ。
だがまだナウシカの太ももは閉じられていて、辛うじて兄の侵入を制限する。
舌が下着の上からナウシカの陰裂を押し込めば、「っっ!!♡」とナウシカは声にならない声を上げて背をしならせた。
「だ、めぇぇっ！♡お兄さ、まぁぁあぁっ！♡」
ナウシカの淫らな裂の上っかわに楚々として佇むぷくりとしたサーモンピンクの肉真珠。
まだ皮被りながら芯を持ちつつあったクリトリスに、下着越しで兄の舌に突っつかれた時、
「あっ!?♡っっ！♡あぁっ?!んっ、んぅ～～～っっ!!♡ふっ、ぐぅぅぅっ!!?♡ぐっ、あぁっ!?♡あっあっあっあああああっっっ!!?♡」
ナウシカは急速に襲ってくる生まれて初めての絶頂に困惑し、為す術もなく目の奥に無数の星を瞬かせてそれを貪った。
バチリっと目の奥で火花が弾け続けて、星々がぐるぐると回転する。

頭の奥、下っ腹の奥、手足の指の一本一本の先っぽまで何とも言えぬ甘美な痺れが襲って、ナウシカは全身を強張らせてその感覚を貪り続けた。
「はっ、はっ、はっ…!ん、ぅっ、ぐっ♡、うぅ…はっ、はっ、はぁ！はっ！ふぁ、あぁ…ふぅぅ、う♡……ん……ふぁ♡」
兄の頭から毛を毟るのかと言うほど握っていた両手。
ピーンと張っていた両脚。
やがて深い深い、そしてだらしない溜息と共に手足もだらけて、全身を弛緩させてナウシカは心地よい気怠い余韻に浸る。
「あっ…」
虚ろなナウシカの視界に、兄の怒張したペニスが映った。
痛々しい程に屹立し、不気味に、だが力強くビクンビクンと脈動して跳ねている。
（かわいそう…♡）
兄の熱り立ったそれを何とかしてあげたいとナウシカは思い、そしてあの人生で初めて見たグロテスクな男の象徴をナウシカは愛しく思う。
兄以外があれを見せればナウシカは不浄で醜い化け物としか思えなかっただろうが、あれが兄のモノなのだと思うと強く愛しさを感じた。
「おにい、さま…♡」
兄が濡れきった下着に手をかけてもナウシカは、もう抵抗を少しもしなかった。
メギドの興奮した鼻息がナウシカの耳には聞こえた。
兄妹は、いよいよ結ばれて一線を越える。
そう互いが思った時だった。
ハッとした顔でメギドが、釘付けになっていたナウシカの股間から目をそらして顔を上げる。
「お、お兄様？」
一体何だろう。もしや自分の女の場所が、兄のお気に召さなかったのだろうか。

ひょっとして、やはり匂いが嫌だったのだろうか。迎え入れる気になったのに、ここで兄に拒絶されるなんて女として辛すぎる。
きっと今ここで兄に拒絶されればナウシカは二度とセックスをしようとは試みないだろう。
それだけのトラウマになる。
しかし違った。
「ナウシカ！地響きだ！王蟲が走っている！」
「えっ!?」
情事に、兄に夢中になりすぎていたナウシカには気付けなかった王蟲の気配に兄は気付いた。
脱がした妹の服を手早く着せてやり、互いの顔に瘴気マスクをぱぱっと付ける。
メギドは性の余韻にまだ腰が砕けている妹を抱えると泡のテントを突き破って、メーヴェの所まで十数メルテ程の距離をなんと一回の跳躍で到着してしまった。
「お、お兄様、すごい」
「妹と愛し合う事を邪魔された怒りかな？ははは」
少し悔しそうな笑顔はナウシカを安心させる。
（よ、よかった…お兄様に、女として拒絶されたわけじゃなかった）
兄の腰に手を回ししっかり掴まるナウシカは、
（…そう思うということは…あそこまで、許してしまったということは…私は、兄を…男として愛しているんだわ）
兄の背に頬を擦りつけしっかりと兄の匂いを吸い込みながらメギドへの異性愛を自覚した。
飛び立っていくメーヴェ。
さっきまで兄妹で禁断の遊戯に耽っていた草むらは、その数分後には王蟲の巨体で薙がれて爆発したように霧散した。
眼下を走り去る王蟲の目は赤い。
「王蟲の攻撃色…誰かが蟲を怒らせたんだ」
「…お兄様、どうするの？」
「追うさ。蟲でも人でも、助けられるかもしれない」

そう言った兄の顔はいつもの、ナウシカの大好きな爽やかな表情に見えたがナウシカには少しの違いが分かる。
兄もまだ自分への欲情を残している。
あの怒張した男のモノをズボンの下に無理やり押し込んでいる。
（…今頃は…お兄様のあれが…わ、私の…中に…）
ごくりとナウシカの喉が鳴った。
「もう…王蟲ったら…」
生まれて初めてナウシカは、王蟲へ少しだけ悪態のような口をきいていた。
そして、王蟲をよりにもよってこのタイミングで怒らせた何者かへは、あからさまな怒りの感情を抱くのだった。

メギド、ナウシカとやる　★

王蟲が怒っていた理由は、流離う旅人が腐海でやらかしてしまったからだった。
こういう愚かな旅人に遭遇する事や、弁えている旅人でも不運に遭って追われている場面に遭遇する事は年に数度はある。
だからメギドとナウシカの対処もなれたものだった。
ストロボ光弾と鏑弾、そして蟲笛で王蟲を鎮めると、愚かな旅人に注意を与えていつも通りに別れた。
帰途につく兄妹だったが、
（あっ）
まだ足腰が怪しいナウシカは兄の背中に被さるようにして兄にしがみついていて、気付いた。
太陽に照らされ生じた影…兄の腰の部分が屹立している。
（やっぱり…お兄様もまだ…）
少し前の、本番寸前の情事を思い浮かべる。
兄の雄の証が苦しそうに脈動していたのが鮮明に脳裏に浮かぶ。
ナウシカはメーヴェで飛ぶ兄の耳元に後ろから囁いた。
「ねぇ…お兄様……ここ、辛い？」
「ナウシカ!?」
囁きながら、ナウシカの手は背後から兄の股間にするする伸びた。
大胆な事をしていると自覚し、顔は真っ赤で…兄から顔が見えないのが救いだ。
「書物で…男女の睦言は、知っています。男の人は……その、一度こうなったら出さないとお辛いのでしょう？だから――」
「うっ」
ナウシカがグローブを嵌めたまま、兄のズボンに手を侵入させる。
さっき自分がそうされたように、ズボンの内側で兄の性器を弄くりだした。
撫でて擦ってやると、唯でさえ勃起の余韻を残して肥大していたメギドのペニスはあっという間に妹の処女を散らす寸前の時の勢いを

取り戻した。
「ナウシカ、や、やめるんだ。メーヴェの操縦が」
「あら？谷一番の風使いのお兄様なら大丈夫よ」
赤い顔をしながらくすりとナウシカは笑う。
少し楽しくなってきていた。
だが、内心はおっかなびっくりで、不慣れさが怒張を扱く手付きに思い切り出ている。
その下手さが逆にメギドの男心を刺激する。
蕩けた妹の処女マンコを目前に無念の中断を味合わさせれていたメギドは、妹の可憐なピンクの割れ目を思い出しつつ、ナウシカのグローブに2ストロークもされればもう我慢できなかった。
「ぐっ」と息を殺しつつズボンの内で妹のグローブに射精していた。
「あっ！」
ナウシカも兄が熱い精液を吐き出したのを察した。
厚手の生地越しに熱を感じる。
ずるぅっと兄の精液の糸を引いてナウシカはズボンから手を抜くと、そのまま吸い寄せられるように手を己の顔に近づけた。
すんすんと鼻を鳴らす。
（――すごい匂い）
瘴気マスクをしていても分かる程、兄の男の匂いは濃厚だった。
嗅ぐ度ナウシカの脳の奥が痺れる。
マスクなど外してこのまま兄の液へ舌を伸ばしたいという衝動が湧き上がっていた。
「…♡」
うっとりしつつ、熱に浮かされながらナウシカはまた兄のズボンへ腕を突っ込む。ゆっくりと。
「まだ…硬い」
「ナ、ナウシカ…これ以上は危ない」
「だめ。お兄様だって……さっき、あんなに嫌がる妹をイジメたもの」
悪戯な笑みを浮かべて、ナウシカはまた兄のペニスをゆったりと扱くとメギドのイチモツは直ぐに復活し隆起する。

「ほら、いいの…お兄様。我慢なさらないで。ナウシカの手に…いっぱい出してくださいな」
妹に竿を扱かれる背徳感に酔いながら、メギドはナウシカの言葉に甘えてしこたま彼女の手の中に精を吐いた。
それでも、ふらつきながらもメーヴェを墜落させず、無事帰還したメギドは流石絶賛されるだけの風使いである。
帰宅した兄妹は、城にメーヴェをつけると城オジ達への挨拶もそこそこに自分で腐海の毒を焼くと、匂いを嗅がれてたまるかと一目散に湯浴みへ突っ走っていったのだった。

◆

城の物陰…畑からも民家からも見えない死角で美少女が膝立ちでいる。
彼女の目の前には男が立っていた。
女は男の股間に顔を埋めて口元からピチャピチャと音を立てていた。
「んっ…ぐぼっ、じゅぼ…んぷぁ…、はぁ、はぁ…ん…んちゅ…ぐぼっ、じゅるっ、じゅるっ」
風の谷一番の美少女、ナウシカ姫が兄の股間に慣れない奉仕をしている。
谷の誰にも知られるわけにはいかない姫の奉仕。
もし見れば、男ならば途端に股間を熱り立たせ、女ならば王子の…男の色香ともいえる艶めかしさ漂う表情に胎の奥を疼かせたろう。
谷一番に美しい姫たる妹が己のものを慣れない手付きで一心にしゃぶる様を、メギドは目を細めて薄く笑って眺めていた。
ナウシカの頭を撫でれば、今の動きが褒められたのかと思うのかナウシカは丹念に亀頭に舌を這わす。
「…れろ…ん、ん……じゅるっ、んっ、んぁ…れろ…じゅるるる…、ん

…ふぅ♡……お兄様、こ、こうでいいの？」
恐る恐る聞いてくるナウシカに、メギドは笑って頭を撫でればナウシカは首を撫でられたトリウマのように手に擦り寄る。
ぎこちなくく、赤い顔で一生懸命にちんぽを舐める汚れなき姫へ、褒美とばかりにメギドはしゃがむ妹の股間を爪先で優しく捏ねた。
「あぅっ!?♡」
ナウシカが片目を歪めて背を反る。
びっくりしたように思わず兄のペニスから手も口も離して、兄の悪戯を止めようと太ももを閉じた。
だが、もう兄の爪先はそこに触れている。
「あっ…あぅ…ぅっ、っ、〜〜っ！や、め……って…はっ、あっ、あっ、ん…ん…ひっ！♡そこ…っ」
メギドは器用に外履き越しに爪先を動かしてぐにぐにと妹の秘所をスパッツ越しに撫でて、ゆっくりと溝を上下に行き来する度にナウシカの腰は腑抜けていく。
「ナウシカ…手と口が止まっているよ」
「はぅ…ぅぅ……んん…んぅ、んっ…だ、だって……あっ、あっ、あっ…やめて、お兄様……私、これじゃ…でき、ない…」
「さぁ頑張るんだ…」
兄がいつものように微笑んでいる。
（あぁ…お兄様…私をイジメて、楽しんでいる…）
そう思うとナウシカの胸はキュンとするのだ。
「頑張らないと…ここに兄のモノを挿入れてしまうかもしれない」
「あ…だ、だめ…それだけは…」
微笑んだメギドはナウシカを抱えて立たせるとそのまま壁に両手を付かせる。
自然とナウシカは尻を兄へ突き出す格好となり、メギドは妹のスパッツをゆっくりと摺り下げる。
「あ…！お兄様っ！だ、だめ…こんな…誰かに見られたら――――ひゃぅ！♡」
妹の可憐なピンクの割れ目を背後からメギドは舐めた。

下着まで脱がされ、露わになった割れ目を兄のベロが這う。
（っっ！お、お兄様に！私の…恥ずかしい所、全部見られている！ほ、本当に…あぁ…こんなの…どうしよう♡膜まで…見られてっ…私もう、お嫁にいけません、お兄様ぁ♡）
愛しい人の滑った舌が、最も恥ずかしく大切な場所を舐めている事実にナウシカは脳の芯まで羞恥で痺れさせた。
壁に手を付いてスパッツも下着も刷り下げられ剥き出しになった白い尻を突き出し、
「ん…んっ、んっ、んっっ！んっ～～～っっ!!はぁっ、はぁっ、はっ…あ〝っ！うっ…っ～～!!♡」
兄に舐められる度に尻肉を揺らしてあられもない声で、それを押し殺そうとしても押し殺しきれず悶えるナウシカ。
谷の男の誰も味わえない絶景とさえずりをメギドは堪能している。
ナウシカの処女膣の奥から愛液が蕩けだして理性が屈服しつつあるのを物語る。
兄はナウシカの濡れそぼったサーモンピンクに怒張を突き入れたそうにしているが、ナウシカが嫌といえば挿入しない。
だが、そんな風に愛されていてはナウシカの理性が再び限界に近づくのは当たり前だ。
メギドは妹から懇願するのを待っていた。
「どうするナウシカ？」
兄が熱い欲望を湛えた瞳で妹を見ている。
メギドは、〝この聖女のような妹からちんぽを懇願させたい〟と思うのだ。
腐海で、普通の兄妹には戻れぬ行為をしてからメギドの枷も無くなっていた。
メギドは妹へ絶頂間近の快楽を与えては解放し、そしてまた与え寸止めを繰り返しナウシカの理性を巧みに、そして確実に追い詰めていく。
「おっ、おにい、さま…っ！ああっ！あっ！だ、めっ！あああっ♡こんなの、私…！もうっ…！」

兄が背後から覆いかぶさり上着を捲くるとプルンッと同年代の女子以上に豊かで綺麗で青さを残した乳房がまろびでる。
既にピンッとそそり勃っていた乳首を捏ねられ、クリトリスの皮を剥かれ撫でられ、淫裂には兄がペニスを擦る付ける。
兄の怒張が割れ目に擦りつけられ、竿の腹でクリトリスの皮が捲られるとナウシカは喉を仰け反らした。
そこで「処女を兄にくれるか？」と問われてナウシカは瞳の奥を蕩けさせながらコクコクと頷いてしまった。
「きょ、兄妹、で…はぁ、はぁ…子作りは…イケない、ことよ…お兄様…んっ、ふぁっ！んぁっ♡」
「しかし今ナウシカは私を受け入れた」
「あっ…そ、それ、はぁ…あぁ、でも、でも…兄妹で…これをしては…っ、こ、子供が…出来てしまいます♡」
「私の子を生んでくれるんだろう？」
兄がにこりと笑って、そこでナウシカは体だけでなく心も陥落した。
「あっ……は、はい」
大好きな兄の笑顔で甘美な背徳の誘いをされてしまえばナウシカは断れない。
――にゅる…ズ、ズズ…つぷ…
尻を掴まれ、そそり勃つ兄の先端が処女の淫裂をなぞって割り開く。
それだけで甘い刺激にナウシカは慄いた。
「メギド兄様…せめて、あの…お兄様の…顔を見ながら…愛してください」
ナウシカは頬を染めてそう懇願するとメギドは妹の腰を掴んで優しくひっくり返してやる。
「〜〜〜ッ！」
仰向けに転がされ、太ももを割り開かれて潤んだ割れ目を白日の下に晒されてナウシカは顔を両手で覆った。
恥じらいの気持ちが爆発して死んでしまいそうだとナウシカは茹

で上がった思考で思う。
「綺麗だ、ナウシカ」
兄にそう言われるのだけが唯一の救い。
「行くよ」と声を掛けられてナウシカは秘所を襲うであろう衝撃を覚悟して、口の中で端を噛みしめる。
――ずぷ、ちゅぷ…じゅぶ…
初めて男のモノを迎え入れる乙女の証は融けてぬかるみ、清廉な姫はあっさりと処女膜を陥落させた。
「あっ、あっ…ああっ♡い、痛っ…く、ない…？ぁっ、あっ、ああ…熱、いぃ…お兄様…お兄様ぁ…♡」
ぬぷりと結合部が卑猥な音をたてる。
（痛いって…聞いていたのに……最初に少し、鋭い痛みがあっただけで……もう、痛くない…♡）
覚悟を決めたのに痛みはすぐに引いて、代わりにじくじくとした疼きが兄に突き入れられた割れ目からする。
「お、兄…様…♡ハァ…ハァ…ん…私達…しちゃい、ました…ね♡」
ナウシカはメギドの顔を両手でそっと掴み微笑んだ。
禁忌の道に散々迷ったが、繋がった今どうしようもない程の幸福感と充足感がナウシカの心を満たす。
「っうぁ♡」
ぐりぐりと兄のチンポがナウシカの開通したばかりの狭いマンコを馴染ませるように動く。
メギドの愛撫で感じ、解れていた事もあってナウシカの処女膣はすぐに兄のモノを痛み無く完全に受け入れ始める。
「動くぞ」
メギドが言うとナウシカはコクンと頷く。
――ずぶっ、ずっ、じゅぶっ、ぐちゅっ
「うっ、うっ、んっ、あっ、うっ、うっ…っ、ぅぐ…あっ、ふぅ～、ん～っ、ふっ、ふっ、んっ」
兄の優しいストロークがナウシカの未踏のマンコを拓いていく。
メギドが動く度、ナウシカはくぐもった声で喘いだ。

大きな声を出せば、大変な状態を皆に見られてしまう。
それを思うだけでナウシカは背徳感で背を痺れさす。
「っ♡うっ、んっ、んっ、あっ…あっ…うっ…んぁっ、んっ、んんっ♡ふぁ、あっ、あっ」
――じゅぶっ、ずっ、ずっ、ずっ
淫らな音がナウシカの耳に飛び込んでくる。
（この音…わたし、が…出している……あぁ♡）
ナウシカは潔癖症だった。
それは精神的なものだった。
男との交合いなど、自然の中で生きる動植物は生命を育む貴きものに見えたが人間のそれは汚れに見えていた。
しかし兄との行為を想像するだけでナウシカの若いみずみずしい肉体は真逆の反応を示した。
「はっ、はっ、はっ、ああっ…あっ、あっ、ああっ、んっ♡んん♡お、兄…さまぁ…♡」
生まれて初めて胎内の奥を掻き混ぜられる感覚にナウシカは酔う。
初めての性交ですでにナウシカは快楽を得ているのを彼女は自覚してしまい、そして更に羞恥が襲ってくるのだ。
それがナウシカの快楽を高める。
「あっ♡わたしっ♡わたし…初めてなのに…こんなの♡こんなのぉ…♡いやぁあぁ…♡」
完全にナウシカはセックスで感じてしまっていた。
数分前まで人間の交合いに汚れを感じていた聖なる蟲の処女姫は、兄に貫かれて娼婦のように腰を動かしさえしている。
「あっ、あっ！あっ！はぁっ、ああっ！んっ、んっ、んん～～～っっ！♡」
「ナウシカ…皆にばれるよ？」
「っ！あっ、で、でもぉ…だって、だって…わたし♡どうすれば…！♡おにいさまぁ…！んっ!?ちゅるっ、ちゅぶっ、っ！っ！…っ！～～っ!!♡」
あえぎ声を我慢できない妹の口を兄が塞いだ。

塞ぎながら口内を舌で蹂躙してやると、ナウシカはくぐもりつつ仰け反り、腰を跳ねさせて手足をメギドの背に回して全身で絡みつく。
――じゅっ！じゅぼっ！ずろぉ！ぱんっ！ぱんっ！じゅっ！ぱんっ！
「～～～～～っっっっ!!!♡っ！♡んん～～っ!?♡おっ！♡っ！♡っっっっ!!♡」
ナウシカがもうセックスでいっちょ前に感じ、肉棒を受け入れ、そして口まで塞いだからにはもうメギドは容赦しない。
妹の融けたマンコの上っかわを重点的になぞるように腰を打ち付けて妹を追い込めば、ナウシカは目を白黒させて半ば酸欠になりつつ激しく悶える。
数分前まで処女だった少女にしていいストロークではなかったが、それをナウシカの肉体は受け入れられた。
――ぱんっ！じゅるっ！ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！じゅぼっ！ぱんっ！ぐじゅっ！
「っっっ！♡んっ、ぷぁっ!?おにいっさま――んむぅぅっ！♡ん～～～っっっ！♡っっっっっ!!♡っっっっっ！♡んんん～～っっっ!!?!!♡」
鼻でうまく息が出来ないナウシカは酸素を求めて兄の口付けの拘束から逃れようとし、すぐにまた兄のベロに捕えられて口を塞がれる。
濡れて解れたマンコが穿たれる。
ナウシカ自身知らぬ気持ちの良い所を探られ、チンコでぞりぞりと擦られる。
知りたくもなかった自分のマンコの弱点が次々に剥き出しにされてナウシカは目の奥に星を瞬かせた。
初めて襲ってくる圧倒的な淫らな波。
空気が足りない。理性が崩壊していく。ベロが蹂躙される。男を知らなかったマンコに怒張を突き入れられまくりオスに貪られる。
――じゅぶぶぅぅっっっ！ずんっ!!びゅるるるるっ！
「っっっっっっ!!!?♡♡～～～～～～っっっっっっ!!!!!♡♡♡」
とっくに限界だった処女マンコの奥に兄の熱いチンポが突き刺さ

り、兄に無理やり目覚めさせられた清らかな子宮に子種が撒き散らされて、徹底的に汚す。
その瞬間にナウシカは手足を一際強く兄に絡めて絶頂した。爪が兄の背を裂傷させ、兄の腰をナウシカの脚がホールドし本能で射精を逃さない。
生まれて初めて男と交尾し、女の一番大切な最奥でザーメンをごくごくと飲み込んでいた。
（お…にい、さ、ま…♡♡あ、ああ…熱、い――――）
ぐるんとナウシカの意識が暗転する。
妹の身で兄の精を胎内で受ける禁断の快楽にナウシカの脳はショートして、肩を大きく上下させ荒く色っぽい呼吸をしながら意識を手放した。
――ごぼり♡
だらしなく開いたナウシカの太ももの付け根から、ナウシカが女になった証の血と、それを塗りつぶす大量の愛液と精液の混ざったものが垂れ流れてくる。
清らかな乙女を穢しきったこの証拠風景はこの世で唯一人…メギドだけが味わえるものだった。

メギドの精神旅行

兄妹が秘密の関係を持ったまま数年が経つ。
その後も年頃の兄妹は肌を重ねる事を自重できるはずもなく、色を覚えた二人は猿のように盛りあった。
初めてのセックス以後、主に自重できないのはナウシカだ。
性的な汚れを厭う気質すらあった蟲愛づる姫は、「兄との色事は汚れではなく次代の生命を紡ぐ神聖な行為」と都合よく解釈して積極的になった。
しかし、初潮も済ませ子を為せる身体となったのに、兄に毎夜のように女の最奥に精を注がれても未だ子は出来ない。
「お兄様。私…子をなせぬ体なのでしょうか…」
とうとう思い詰めて兄メギドに不安気に愚痴る。
メギドは驚いた。
「お前、もう子が欲しいのか」
「はい、当然です。私…お兄様との赤子を早くこの手に抱きたい」
「しかし腹が大きくなればもう谷の者を誤魔化せないよ？父も母も卒倒してしまうかもな。ははは」
「それは…」
少しナウシカは言い淀む。
数年前、大病に伏した母はメギドが三日三晩寝ずに様々な腐海の葉や蟲の皮、臓腑等を煎じて混ぜて調合した秘薬で命を永らえた。
誰もが母は助からぬと思っていたのに、メギドは見事に死の世界に片足を踏み込んでいた母を連れ戻した。
また、精魂込めてチコの実も品種改良し、唯でさえ素晴らしい栄養価と効能を持っていたチコの実を爆発的に進化させ、それを毎日煎じて母に呑ませて健康を回復させていったのだ。
少しずつ順調に回復し、母本人も周りの者もようやく安心して笑顔をみせるようになった今、確かに余計な心配はかけたくない。
メギドが品種改良したチコの実の効果は絶大で、今では谷の者全員が干して粉末に砕いたものを少しずつ食している。

腐海の毒で日に日に体が硬化し弱っていく老人達の肉体は若い頃のように自在に手足を動かせるようになり、また若い者達では出生率が上がって生まれる子も健康な赤ん坊が劇的に多くなった。

チコの実は、今では谷の者以外に薬効を知られてはいけない秘中の秘の幻の薬になっている。

大量栽培し他国に輸出するほどチコの実は生産出来ておらず、他国が知ればこぞって手に入れようとするのは目に見えていて軍を派遣してでも入手と独占を望むだろう。

メギドの調合した秘薬などはもってのほか。

チコの実を万能薬とし、瀕死の者すら治癒する秘薬をこしらえたメギド自身はもう大変な扱いだ。

唯でさえ谷の者に慕われていた王子だったが今では度を越した慕われようで崇拝の域にまでいっている。

しかもメギドがやらかした事はそれで終わらない。

メギドが風の谷に齎した恩恵は秘薬やチコの実の改良だけではなかった。

エフタル時代かそれ以前に造られたと思われる古代機械を、工房都市ペジテからユパが手に入れてきた残骸から復元、改良して畑仕事を補助する農耕機械としたのだ。

ガンシップやメーヴェなど航空機の心臓であるエンジンに関してもメギドは驚くべき奇跡の業を披露した。

一度エンジンが壊れれば、地中を掘り古代文明時代の地層から新たに出土する動くエンジンを大枚はたいて輸入するか、他のガンシップから奪ったものを修理したりするしかないのが常識だ。

しかしメギドは、農耕機械の時と同じようにペジテから入手した残骸――谷で一番の知恵者である大ババやユパでさえ何にも使えぬガラクタと断じた物――を繋ぎ合わせ、足りぬパーツは鉄くずをハンマーで叩き熱して曲げ新造し…なんとエンジンを自力で作り上げてしたまったのだ。

これは古代工業大国エフタルが失われた時以来の快挙だった。

超大国であるトルメキアや土鬼諸侯連合でさえ出来ていないのだ。

奇跡としか言えぬ数々の御業を風の谷に齎した風の和子のカリスマは凄まじいまでの領域になったのは想像に難くない。
しかしそれだけに風の谷の者達はメギドの所業が他国に知られるのを恐れた。
どれだけメギドが懇願しても、ジルもユパも決してメギドを旅に出さぬほどだ。
また、２４歳にもなるのに未だ独身で嫁取りも上手く行っていないのはこれらが原因でもある。
メギドと交合う事は谷の女は誰もが望む。
だが結婚し妻となってメギドの子を孕むのは、谷の女達は誰もが躊躇してしまうのだ。
「現人神の妻となり、神の子の母親となる重荷には耐えられない」と谷の女は皆口を揃えて言う。
とにかく…そういったメギドの御業のお陰で助かった母に心労をかけるのは良くない。
子を授かるには時期が悪いというのは分かる事でナウシカも納得できるが、それはそれとしてこれだけ肌を重ねて妊娠しないのはいずれメギドとの子が欲しいナウシカには死活問題だった。
暗い顔をしているナウシカにメギドは微笑みかける。
「大丈夫だ、ナウシカ。子は天からの授かりもの…運が悪ければそのようなもの。お前の体が子を生めぬ訳ではないのは兄が保証する」
「……ありがとう、お兄様。気休めでも嬉しい」
「気休めではない。生めぬ体の者に限らず、男も女も遺伝疾患を持つ者はＤＮＡが放つ特有の波長…それがある種のフェロモンとして私の目に――」
「でぃーえぬえー…？」
ナウシカが首をかしげると、メギドはまた微笑んで言葉を止めた。
「いや、止めよう…気にしないでくれ。……変なことを言ってしまったな。…ちょっと、お前の兄はおかしい奴なのだ」
兄が自嘲気味にそう言うとナウシカはまるで自分の事のように怒って兄の言葉を否定にかかる。

「そんなことない！お兄様がそう言うなら……良くは分からないけれど、そういうのが分かる何かが視えるというなら…私は信じます」
「……ありがとう。ならば、お前の体は全く問題無いというのも信じるな？」
「はい！」
言い切ったナウシカの顔は明るかった。
それだけ兄への愛と信頼が絶大だということでもあった。
兄が何の淀みもなくそうだと言い切ったのならナウシカはそれを信じるだけだ。
実を言うとメギドは肉体操作で自分の精子の生成を抑えているので妊娠出来ないのだが、何故そんな事をしているのか、出来るのかはナウシカには言わない。
将来の禍根としない為、一番に妊娠されるのは困るというのが誰にも語らざるメギドの本音だ。
メギドは一番に孕ませるのはとある大国の第４皇女と決めている。
「…ナウシカはいくつだったかな」
「１５になりました」
「…ならば、きっと…焦らずとももうすぐ妊娠できる。その時は私の子を生んでくれ」
（１５か…ならば後１年で全て動き出す。もうすぐか…）
「はい、メギド兄様…お約束します」
ナウシカは安心したように兄の胸に飛び込み頬ずりする。
メギドはそれを優しく受け止めて妹の頭を撫でてやるが、彼の目はひどく遠くを見つめていた。

◆

「やぁ、来たな。我が半身よ」
「…今日も良い夜だね、ミラルパ」

夢の中…精神世界で二人は夜な夜な密会を繰り返している。
片や黒いドロドロとした粘液が無理やりに人型を形作っているような者…ミラルパ。
片や白い不定形の発光体…メギド。
二人は精神世界を彷徨っている時に、偶然に精神を交差さえ邂逅したのだ。
そのファーストコンタクトは今の仲の良さからは想像もできないぐらいに荒み、恐ろしいものだった。
初めて遭った時、土鬼の神聖皇帝ミラルパは刺すような灼熱と極寒の憎悪を纏って独りでずっと地べたに手を伸ばし何かを探していた。
独りで何かを必死に探し求め、しかしそれは決して見つからず彼は暗闇を延々と独りで彷徨い続けるのだ。
明敏な己の意図を理解しない愚かな民衆。
進歩を否定しいつまでも錆びついた過去の土着信仰に頼り切る愚劣な民衆。
愚鈍で愚昧で無知蒙昧…か弱く強欲で自分勝手…だからこそ自分が導き守ってやらねばならぬ愛しき民共。
そして軽薄で愚かで欲深い己の兄、ナムリス。
彼らはなんと愚かで悲しいのだろうとミラルパは常々思う。
こんな愚かな者達を、自分は２０年間も言葉を尽くし言って聞かせやってみせて慈愛で導こうとしたのか。
こんなことでは何百年、何千年経っても民衆は賢くなれない。
名君であり賢帝である自分がいなくなればこの愚かな民衆を導いてやれない。圧倒的に時間が足りない。自分の不老不死は不完全だ。いつ何が起きるか分からない。
昔の己こそ愚かだったとミラルパは反省し、そしてもっと早く迅速に民が叡智に目覚めるように拙速な手段をとることにした。
そうしてからは民を導くのは実にスムーズだ。
愚かな民衆は力で導いてやるのが一番だ……兄もそうだ。
あの愚かで愛しい実兄は力を信奉しているから、だから弟の自分が力を見せれば自分が拓いた道を歩んでくれるだろう。

己が拓き続ける道を征くことこそ民と兄には幸せの道。
栄光の道。
だが同時にそれは孤独な修羅の道だった。
ミラルパ独りが先頭を歩き、自分の身を呈して定かでない未来という暗闇を切り裂いて突き進む道。
いつしかミラルパという男は摩耗し、擦り切れて、魂は憔悴した。
ミラルパはいつも全てを独りで背負って、この荒廃した世界で土鬼を栄光へ導こうとその術を模索していた。
寝ても覚めても考えるのは土鬼の国の、世界の行く末。
(無理だ！この世界はもう緩やかな死に向かっている！墓所の博士共が齎す全てがそれを確信させるのだ！)
(いや、大丈夫だ。人類の英知はここで終わりはしない！私が、このミラルパがいれば世界はより良く変えられる…絶対にだ！)
(愚かな民衆！私の考えを、思いを察せぬ馬鹿共は死に果てよ)
(弱き民…私が守ってやらねば彼らはどうなる)
(私だけが…この世界から人々を守り導ける。その為なら私はどんな手も使おう)
「わしは…唯一不可侵の神聖皇弟ミラルパである。我が意は絶対…我が言葉は理」
愛と憎悪が長い年月でミラルパの魂にこびりつき、彼の魂はいつしか暗く冷たい刺すような熱に染まっていた。
もう他者の愛も言葉もミラルパには届かず、ただ己の言葉だけを信奉する冷たき賢帝と成り果てていた。
今日も、例え寝入っても彼は精神世界で独り全てを背負って暗闇を這いずり回る。
そこに光は来た。
前触れも無く、彼はミラルパの心に当たり前のように佇んでいた。
「やぁ」
ごく自然に、光は暗闇に近づいて天気の話をするかのような気軽さで話しかけてくる。
ミラルパは光に目が眩む。

その光を見ていると、炎に飛び込む蛾のように吸い込まれそうだ。
自分の身が焼かれて死ぬのを分かっていてもその衝動が湧き上がってくる。
ミラルパは恐れ、怒った。
「…λτυ！」
神聖語で叫び、威嚇する。
光よ近付くなと。
形を持たぬ光の塊のそいつが確かに微笑んだのがミラルパには理解る。
「ομαεηαναιμονοδα！」
身に纏う暗闇を膨張させ光を拒む。
まるで体を大きく見せて大敵を欺く弱き蟲のように。
「…怖くないよ」
光は笑いながら暗闇に言った。
その言葉はひどく優しく、ミラルパの冷たい心に問答無用で染み渡ってくる。それがミラルパには余計怖く恐ろしい。
「ναζεωατασηινοφυμεναιρυ…！」
生まれた時からミラルパに備わる選ばれし者の資質…超常の力。
下らぬ異を唱える愚か者を処刑する時とは違い、ミラルパは最大限の力で光へ念動を叩き込む。
――フフフ
光は笑っていた。
ミラルパの念動は手応えもなく光を通り過ぎて闇の虚空に消えて霧散する。
「λτυωαραυκ？κισαμα!!」
もう一度。
今度はもっと沢山。
ありったけの念動力をこそぎ集めて無数の黒光弾を作り出して光目掛けて撃つ。
雨霰と光を消し去ろうと黒い弾丸でそいつを塗り潰していく。
――フフフ

また光は笑うと、ミラルパの放った黒い雨を全て掻き消した。
「…っ!!」
ミラルパは怯えた。
そして、この光は自分が抱く未来への恐怖そのものかとも思えてきた時だった。
「会いたかった」
光はそう言って、暗闇である自分に手を伸ばしていた。
「何も怯える必要はない…私達は一つ。君と一緒なら、この世界を諦めずに済む。さあ…おいで」
おいで、と光がもう一度言った。
その染み入ってくる言霊はミラルパの頭をくらくらと麻痺させるようだ。甘美でさえあった。
「私はメギド」
ドロドロとした暗い粘液は、光に吸い寄せられるように震えながら腕を伸ばしていた。
ミラルパの口が自然と開いていく。
「わ、私は……私は…」
「ミラルパ」
「そう、そうだ…私は、ミラルパ……何故、お前は私を知っている」
「君をずっと前から知っていたからだ。会いたかったよ、ミラルパ」
光は、メギドはミラルパをずっと前から知っていた。
何故かミラルパも…その光をずっと前から知っていたような気がした。
それは不思議なことだったが当たり前のような事にも思えた。
その夜、ミラルパは失った魂の半身に出会ったような心地よい懐かしさに沈み、暖かい温もりに抱かれて目を閉じた。
光と出遭った夢を終えると、ミラルパは実に数十年ぶりに何にも悩まされぬ静かな眠りに包まれるのだった。

◆

メギドは精神世界を彷徨う。
ミラルパがそうであったように、メギドもまた捜し物があった。
メギドとミラルパが邂逅したのは、確かに偶然なのだが極めて必然に近い偶然だ。
捜し物とミラルパはとても近い場にいるのだから。
その捜し物は、いつも見失いやすい。
自立した意識を持っているものの、人工的に造られたそいつは自我が薄い。或いは無い。
だから夢を見てくれない。
メギドはいつも夢さえ見ぬ薄い意識の光を探し当てなければならなかった。
これは中々の重労働である。
見つからぬ夜さえある。
しかしやる価値はあった。
どうやら今日は当たりの日らしい。
「……マタ、あなた、カ」
薄い薄い微かな光が一つ目の瞼をうっすら開いて、メギドを眠たそうに見つめる。
「おはよう。今日は夢を見ているのか」
「あなたガ接シテ来ルヨウニナッテ、私ニのいずガ生マレテシマッタ。夢ハのいず…ＢＵＧダ。私ハＢＵＧニ汚染サレテイル。君トイウＢＵＧニ」
「それは良いことだ。君が自我に目覚めてくれればこの世界に愛着を持ってくれるだろうから」
「私ハ主カラ世界再生ヲ託サレテイル。コノ世界ニ愛着ヲ持ツ必要ハナイ…何故ナラコノ世界ハヤガテ壊レルカラダ…ソウイウ風ニ、世界ハ設計サレテイル」
「それを止めたいと思っている」
「ソレハ不可能ダ」

「直接会えばきっと君も心変わりしてくれるさ」
「ソレハ不可能ダ」
「旧人類の言うことは聞かないといけないだろう？君は」
「旧人類ハ…私ノ主達ハ滅ビタ。私ハ主ガ残シタ遺志ヲ全ウスル。ソノ為ダケノ存在」
創造主のプログラムを自分の言葉のように繰り返すだけだったコイツが、随分と自己主張をし始めたものだとメギドは笑う。
良い兆候と言えた。
「まぁいい。今はまだ君を説得はできないのは分かっているから」
「マタ、あなたハ私ヲ無理矢理、手籠ニスル」
「お前…人聞きが悪いぞ？」
「ＤＡＴＡヘノ不正ＡＣＣＥＳＳ感知……ホラ、ヤッパリダ」
「私は馬鹿だからな…君の知識を見せてもらって…カンニングさ。ははは」
「…好キニ、シロ。……私ハ、眠イ…モウ、眠ル、ゾ…――――」
生まれたての自我はまだまだ拙く、か弱い。
メギドの目の前でプログラムに飲まれて揺蕩い消えていった。
メギドも慌ててプログラムの前から姿を隠す。こいつらに見つかれば浄化の光（防御プログラム）が相容れぬ敵性精神を砕こうとしてくる。
そしてプログラムの監視の目を掻い潜りながらメギドはこそこそとＡＩの精神の迷宮を歩いていく。
「……さぁ、今日こそ新世界の再調整の方法を発見できるかな？毒を全て浄化されちゃ困るんだ」
旧人類が残した知恵の遺産…〝墓所〟。それらを制御する中枢の有機的超高度Ａ（ヒ）Ｉ（ド）（ラ）は、発達し過ぎたが故に人の意識にも似た構造を持つ。
足りないのは自我とそれに伴う感情だけだ。
だから超常の力で精神跳躍（ダイブ）を使いこなすメギドは遺跡の頭脳（主）に侵入できるのだった。
勿論、同じく超常の力を使いこなすミラルパには真似できない事だ。

メギドがこれを出来るのは墓所の主がどういう存在かを理解しているのが大きい。
理解せぬことには物事を正しく掴めないのは精神跳躍でも同じであった。
「しかし…データを閲覧するのも楽じゃない」
ハァ…とため息をつく。
墓所の主の頭脳を覗くのは広大な図書館を彷徨って一冊一冊本を手にとって探す行為に等しい。
ただ盗み見る行為ではあるが、これにはメギドの精神を大分疲労させなければ到底出来ない事なのだ。
それにメギドの目当ては現世界の保持。
エンジンの組み立てや治療薬の知識はそのついでに過ぎない。
「この世界を壊させない為とはいえ…ミラルパがここを正しく認識できれば手伝って貰えるのになぁ…。あいつ、きっと地頭良いからさ」
独り言を漏らしながら、今日もメギドは無限の図書館を漁る。
メギドもまた世界を壊させない為に独り足掻く者である。

ユパの帰還　★

ユパ・ミラルダが長い旅から戻ってきた。
王蟲に追われる旅人をいつものように助けた風の谷の兄妹は、追われる者の正体がユパだと知った時はとても驚き、そして喜んだ。
道中、ユパは蟲に人が攫われたと思って銃を使って蟲を追い払うと実は蟲に攫われていたのは子キツネリスで…それ故に王蟲が怒って追われていたのだ。
誰もが無事だったから笑い事にできるそんなアクシデントはあったが平穏な帰還と言える。
ユパが助けたキツネリスと戯れるナウシカを、メギドとユパは微笑みながら眺めていた。
ユパはちらりとメギドを見る。
「…鏑弾も光弾も使わず、蟲の声真似だけで怒る王蟲を鎮めるとは…相変わらずのようだなメギド」
「先生の教えが良いからです」
「私は蟲声など教えておらんぞ…あんな真似はお前しか出来まい。末恐ろしい奴だ」
「私の基本を作ったのは幼い頃に厳しく仕込んだユパ様ですよ？私が恐ろしくなったら責任の一端は先生にもあるという事でしょう」
「はっはっは…こやつ、言うようになった」
ユパとメギドは師と弟子だ。
ナウシカもユパの教えを受けてはいたがメギド程深い薫陶を受けてはいなかった。
メギドが１５の年を越えたあたりからはユパは純粋な剣術で５本に３本、一本を取られるようになり、今ではもうメギドに一本も入れられない。
未だ腐海辺境一の剣士と謳われ国内外に最強の名を轟かすユパ・ミラルダであるが、風の谷を出ること許されぬ王子こそが…己が鍛え上げた麒麟児こそが真の最強の剣士だとユパは内心で誇っていた。
「人に懐かぬキツネリスがナウシカにはめろめろだな…すっかり懐か

れたじゃないか。名をつけてあげたらどうだ」
　キツネリスに指先を噛まれる洗礼を越えて早くも信頼を築きつつあるナウシカとキツネリスを見てメギドが提案すると妹はにこりと笑った。
「うん。お兄様、この子どんな名がいいかしら」
「思うがままにつけてやればいい。きっとその名がこの子にとって真の名になる」
　ナウシカは「うーん…」と首を少し傾げて考える素振り。
「お兄様と一緒に決めたい」
「…なら、いくつか案を言ってあげるから選ぶか？」
「はい！そうします」
　ナウシカが微笑んで、メギドは思いつくままにつらつらと単語をあげていった。
「…テト、オーマ、ラムダ……マキ、クラリス、セーラ……ショクパ、ンマン……オトキ…」
「すごい！ちょうど私もテトって名はどうかって…考えていたの！やっぱりお兄様とは通じ合っているのね！」
　ナウシカはぱぁっと笑って嬉しそうにメギドを見てくる。
　好きな人と同じことを考えた…たったこれだけで心ときめくお年頃らしい。
「ではテトだね」
「はい！この子はテト…ふふっ、ぴったり」
　ナウシカは即決した。
　メギドが内心で、後半にあげた適当な名前達を選ばなくて良かった…と心底ホッとしていたのは知る由もない。
　ナウシカの肩で寛ぐ子キツネリスも、その名が当然自分のだとでも言うように満足気に小さい声で吠えている。
「テト、よろしくね」
　ナウシカが鳥の羽のように両腕を広げると、「キュ」とまた小さく鳴いたテトがまるで橋を渡るようにナウシカの腕を行き来する。
　人に懐かぬキツネリスは、もうすっかりナウシカを慕っているらし

かった。
　メギドが眺めていると、妹の腕や肩を器用に駆け回っていたテトがピタッと動きを止めてメギドを見る。
　目が合った。
「あら?·テト!·」
　テトがナウシカの胸のたわわな弾力を使ってメギドへ跳ねると、そのままメギドの首元に抱きつく。
「いてて」
　テトは小さな爪でメギドの首にしがみつき這い上がるとそのままメギドの頭の上でピョンピョンと跳ねる。
「まぁテトったら。お兄様のそこ、居心地がいいのかしら?·」
「まいったな」
　笑い合う兄妹を眺めているユパだが、その和やかな光景が示す事に驚いている。
(兄妹揃って…人に懐かぬ筈のキツネリスがあんなに懐いている…。なんという風の子らだ)
　驚くべきことだった。
　そんな風に思われているとは露知らず仲睦まじく戯れる二人と一匹。
「ねぇお兄様…昔…王蟲の幼蟲を一緒に飼っていたの、覚えている?·」
　ナウシカがおずおずと聞けばメギドは当たり前だと明朗に返した。
「私がパパで、お前がママ…だったな。名前も付けた……たしか――」
「グソクム・シャ」
　兄妹の声がはもり、二人は互いの顔も見て笑う。
　ちなみにこのネーミングセンスは兄メギドによる。酷いものだった。
　メギドとしてはグソクムでワンテンポ置かず、そのまま一息にグソクムシャと言って欲しかったがナウシカが音を切る場所を勘違いして定着してしまったのだ。
「あの時は大変だったな」
「覚えていて…くれたのね、お兄様…ふふっ!·テトとこうしていると、

またあの時みたい」
「私達はテトのパパとママか」
「うん！」
　メギドがふざけて言うとナウシカは心底嬉しそうに、兄の頭の上からまた跳んで戻ってきたテトを抱いてメギドの胸に擦り寄る。
「ねぇお兄様？」
「うん？」
「あの時の王蟲…無事に大人になったかな？」
「王蟲が大人になるには永い年月がかかる。木々と同じで、まだまだあいつも子供だ。精神年齢で言えばそれこそこのテトと同い年ぐらいかもな……あはは、テト、お前には同い年のお兄さんがいるんだぞ」
「ふふふ…」
　テトのもふもふした首の毛を撫でる兄を優しい目で見るナウシカだが、言外に驚嘆を隠していた。
　誰も詳しくは知らない王蟲の生態。
　それをメギドは事も無げに、常識のようにさらりと答える。
　ナウシカの兄、メギドという人はいつもこんな調子であった。
　他者から見れば奇跡的な知識、技術、技、力…そういうものを些末な事と思っている節があるのだ。
　その浮世離れした感覚のズレは、ある意味で謙遜的であり…ある意味で無頓着だとナウシカには思える。
　だがそこがまたナウシカからみると愛しいのだった。

――

　剣士ユパの帰還を祝う宴の後、族長ジルもミト爺も…母も大ババも多くの者達は皆酔っ払って寝こける夜となる。
　夜の蒸し暑さは、風の谷に常に吹く清らかな風が和らげてくれて谷はいつも快適だ。
　汗一つかかず安らかに眠れる。

この兄妹を除いて、であるが。
ナウシカの部屋に衣服が散らばっていた。普段室内で着るゆるりとした薄水色のドレスと白いズボン、そして谷の女がつける民族帽…それらと男物の衣服が重なるように雑多に転がる。
「っ♡んっ！ふっ、ふぅ！んっ！んっ、んっ！ふあぁ！♡ね…お兄様…グソクムと、テトに…ふぁ、んっ、ん♡弟か♡妹…、あっ、あっ、作って…あげ、たいです♡」
ナウシカの部屋には女の艶ある声と、液体が絡む卑猥な音と、そして男と女の体液の匂いに満ちていた。
窓から射す月夜の薄明かりが、ナウシカのいつものベッドに寝転がる男の上で跳ねる白い尻肉を照らす。
――ギシッ、ギシッ、ギィ、ギッ、ギシッ
ナウシカのベッドが軋み音を立てる。
抑えめの嬌声を上げて、必死に腰を振っているのは普段は性的な事など微塵も感じさせない谷の姫。
汗で濡れて光る風の美姫の裸身が月光に照らされて妖しい色香を放っていた。
「はっ、はっ、あっ♡ああっ、あっ！あっ！お、にいっ…さ、まぁっ！あっ！」
――ばちゅっ、ぱんっ、ばちゅっ、ずっ、ぱんっ、ぱんっ、ばちゅっ
寝そべる兄の逞しい胸に両手を当てて支え、真っ赤な顔で恥じらいつつ腰を動かすナウシカ。
しかし恥じらう感情を懐きそういう顔をしているのに、体はもう兄との情事に溺れている。
何度も兄の怒張を咥えたというのに、まだまだ生娘のようにサーモンピンクのマンコはたっぷり濡れてナウシカの腰の動きを滑らかにしてくれる。
締め付け具合もやはり生娘同様。
「ふっ、ふっ、ふっ、んっ…んっ…！んんっ！♡はぁ、はぁ、はっ、あっ、はっ、はっ、あっ、ぐぅぅ…うっ、うっ♡」
ナウシカの顔が快楽に負けている。

頬は紅く、細く端麗な眉が苦しそうに歪み、目を細め…ぷっくらした唇は半開きで必死に新鮮な酸素を求めていた。
「あぐっ!?♡」
メギドの腰がナウシカの抽挿に合わせて上へ突き上げると、ナウシカはたまらず大きな声を漏らして顎を反らした。
「だめじゃないかナウシカ。皆が起きてしまう」
分かっててメギドはナウシカをイジメるのだ。
「あっ…も、もうしわけ、ありません…おにぃ、さま♡はぁ、はぁ、はぁ…ん…」
「さぁ、声を我慢して…しかし気持ちの良い所を探してそこに当たるように自由に動いてごらん」
騎乗位の度、ナウシカは恥ずかしがって動きが固くなる。
常に騎乗位初心者になってしまうナウシカは、だからこうやっていつもメギドに手ほどきされて、そして翻弄される。
「あっ…は、恥ずかしい…お兄様…。こんな交わり方…私には…あぁ♡」
そう言いつつナウシカの腰がおずおずとまた動きだす。
男の、兄の裸の上で腰をうねらせ尻肉を揺らす。
ナウシカが自分で腹側のやや浅い所に兄のチンポを擦りつけると、「っ♡」とさらに目を細めたナウシカは集中的に自分でそこをイジメだした。
「っぅ!んっ、んっ♡ふぁ♡あぁぁ…♡っ、っぁ♡」
ナウシカの尻が上下する度、巨乳も揺れる。
清楚な妹が、汗だくになりつつ卑猥な体つきになってきた胸と尻をゆらして美貌の顔に前髪を貼り付けて淫れる。
――ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぶぅゅゅゅ♡、じゅっ、ぐちゅるっ♡
兄のペニスを根本までズッポリ咥えた薄い陰毛に守られるナウシカのマンコは、トリスやペジテの高級娼婦のマンコよりも女の色香を放っているに違いない。
その淫らに花開いた陰唇が白く濁った本気汁を兄のペニスに纏わりつける。

ナウシカは自分の弱点を兄に曝け出しながら、兄の熱い肉棒を使って自分で執拗に擦って己を快楽でイジメ続けた。
「ああっ♡あっ、あっ、あっ、あ〝っ、あ〝っ、あ〝っ♡あ〝あ〝っ、んんっ、ふぁあああっ♡」
喘ぎ声がまた大きくなった。
このままでは感覚に優れるユパ辺りに気付かれてしまう。
メギドはナウシカの腕を引っ張ると、「あんっ♡」と驚きながらナウシカは兄の胸板にべちゃりと突っ伏した。
巨乳がつぶれて汗がべたりと跳ねて垂れる。
メギドの意図を察したかどうかは分からないが、ナウシカは愛しい人の顔が側にきたから本能的にベロをあーんと伸ばした。
ナウシカの濡れた舌がちろちろと何かを求めている。
「おねだりか。甘えん坊だなナウシカは」
「おひぃひゃまぁ♡」
あーんと口を開けてつつベロを伸ばすナウシカ。
メギドはじゅるると、ぷりっとして美味そうな妹の舌を口に吸った。
「んひゃっ、んあっ、あむ、じゅるっ、ちゅるるっ♡んじゅっ♡ちゅ♡じゅるるる♡」
唇を貪り合い、舌を吸い合い、唾液を交換する。
妹が声を出せなくなったのを切っ掛けに兄がいつものように腰の動きを激しくしだす。
――ずんっ！
「〜〜〜〜〜〜っっっ!!!♡」
（きた…！♡お兄様の…、私を本気でえっちにさせる時のぉ…♡）
谷で愛し合う時、兄妹である二人は自然と声を抑えてのセックスとなる。
ナウシカは喘ぎ声を我慢せずに思うがまま嬌声を上げてセックスをしたことがないのは仕方のない事だった。
それに兄曰く、「お前は感じやすくてする時の声が大きい」との事だから、兄が妹にトドメをさすときはいつもこうやってキスで声を塞

ぐ。
口を塞がれ激しいピストンを受ける時は、ナウシカがトドメをさされる時なのだと彼女自身学習し肉体も覚えてしまう。
「っっ！～～～っ！♡んんっ♡んんんん～～～ッ!!?♡っっ?!?♡」
――ぐじゅっ！じゅっ！ぱんっ！ぱんっ！ずっぼっ！じゅぼっ！ずぼっ！
（乳首っ♡おっぱいの先っぽも、おにいさまに潰されてる…♡おにいさまの胸板に乳首こりこりされてるぅ…♡はぁ♡おにいさまぁぁぁ♡）
ナウシカの視界が涙と快楽で歪んで白く塗り潰れていく。
メギドが突き上げ、ナウシカの尻が揺れる。
（べろ♡べろもおにいさまに食べられてる♡はずかしい♡はずかしい♡私の全部…おにいさまに食られる♡）
舌を啜られ引き伸ばされ、唾も飲まれてしまう。
大きなおっぱいの先端でコリコリと勃起した乳首は胸板でひしゃげられ転がされる。
肉襞は割り開かれ、子宮口まで道のりを兄の肉棒で抉られ擦られる。
マンコの中の弱点全てを抉り擦るような兄のチンポが、聖女ナウシカを一匹の雌に変えていく。
――じゅぼっ！ぱんっ！じゅぼっ！ぱんっ！じゅぼっ！ぱんっ！じゅぼっ！ぱんっ！
「っひぃ！♡あああああっ！♡んっ、んぅ！お?!っ、んじゅ、んちゅうぅ♡ぢゅるっ♡じゅるるるっ♡っっ！♡～～～～～～～～っっっっ!!?!?♡♡」
激しく突き上げられ一瞬、兄の口付けから解放されたナウシカの口から漏れ聞こえた嬌声は、風の谷の姫が発したとは思えない淫蕩にふける淫売の声そのもの。
「酷い声だ。妹よ…お前はこんなスケベな声を漏らして…あんな大きくて低俗で下劣な声…きっと皆に聞こえたな。でも他の誰もお前だと気付かないだろうね…あんな下品な声だもの。お前は雌豚のよう

だ」
「っ♡♡♡っっ！♡～～～～ッ！♡っっっっ!!!!!♡♡」
（ひどいっ、おにいさまぁ♡めすぶただなんて…♡ナウシカを、いじめて…あぁ、おにいさまぁ♡おにいさま♡おにいさま♡愛してるの♡ナウシカに種付して♡ナウシカを孕ませて♡ナウシカのえっちな、女の一番大切な奥に、おにいさまのあっつい精液流し込んでくださいっ♡ああ、おにいさま♡ナウシカを、めすぶたいじめて♡）
　声に出せないのを良い事にナウシカは被虐的な淫蕩思考で脳を満たし、そして皆にバレてしまったかもしれないとも思うとナウシカの脳と腹の奥がまた疼き痺れ熱を持つ。
　メギドが超常的な力で遮音し、しかもナウシカの心を読んでいる等と今のナウシカには思いもよらぬ事。
「知っているかナウシカ。お前のようにイジメられたがりのスケベな女の事をMというんだ。M女とは、つまりどうしようもなく淫らでスケベでイジメられて喜ぶエロい女ということだ。お前のことだね、ナウシカ」
　メギドが腰を突き上げる。
　耳を塞ぎたくなるような卑猥な粘液の音がナウシカの秘所から響いて、ナウシカは自分が兄に犯されるように突き上げられ言葉でも責められ…そんな行為で性的快感を得ている己を知ってしまった。
　――ぐちゅっ！じゅぼっ！ぱんっ！
「っっっ!!♡んっ♡っっんんん～～～！♡」
　――ずんっ！びゅるっ！びゅるるるうるるるぅ!!!
「んんんんんんん～～～～～～っっっっ!!!?♡っっっうっっっっうっっっうっっっ!!?!!?♡♡♡」
　ナウシカは兄の灼熱の精液が自分の最奥に放たれたのを感じ、体中を強張らせ痙攣して思考が焼ききれた。
　気を失い、全身の筋肉を弛緩させて兄の胸の上で全てを晒した。
　――ずるぉぉぉっ、ぶぼっ、ぬぼっ、ぶびっ
　メギドのイチモツが、ナウシカのサーモンピンクのマンコからゆっくり抜かれると、無意識ながら「おっ♡」と声を漏らすナウシカの腰

がまた跳ねて、そして兄の大量のザーメンと妹の白濁スケベ汁がどろりと零れ落ちる。

最愛の兄の裸身をベッドとして、ナウシカは股間から白濁液を垂らしながら深い眠りに入っていた。

メギドとラステル

メギドの記憶とは多少違ったが、トルメキアより風の谷に書簡が届いた。今までダラダラと続いていた国境の小競り合いではない…大規模な戦争が勃発するのだ。

『古き盟約に従いｘｘの月、ｘｘの日までにペジテに参集せよ。同盟の怨敵土鬼を共に駆逐する栄誉に参加し武功をあげるべし。また、老年の族長ジルは軍役を免除する。代わりに後継者メギドに初陣の名誉を授ける』

細部を省くとこのようなものだった。

トルメキアよりヴ王の紋章の刻印が刻まれた書簡が来た時点で谷の主だった者が族長の大部屋に集められていた。

族長のジル、その妻、王子メギド、姫のナウシカ、大ババ様に城オジ五人衆…リーダーのミト爺、風見番のゴル、のんびり屋ニガ、剽軽な腰痛爺ギックリ、頑固者ムズ。そして剣士ユパ。皆が重苦しい顔で顔を突き合わせている。

族長ジルは「やはり」と力無く呟き皆に大まかに書状の内容を説明してやると、皆ざわめいて、母は言葉もなく嘆き、ナウシカは激昂した。

「戦争にお兄様を差し出せというの!?」

悲壮な顔で怒る娘に、城オジ達も同調する。

「そうじゃそうじゃ！若様はこの谷の宝！ジル様のお跡継ぎ！なぜ戦争なんかに差し出さにゃならん！」

ミト爺が真っ先にナウシカと同じような怒りを示すと他のオジ達が口々に怒号を上げてヴ王の名を罵るのだった。

だが騒ぐオジらへ、齢１００歳を越える老婆が盲(めしい)た目を開いて「黙らぬか、坊主ども！」と一喝すれば城オジ達は肩を竦めて停止した。

場が収まったのを感じ、ゆっくりと大ババが口を開く。

「……お主らの気持ちはよぉ分かる……しかし、これは３００年も昔から続くエフタルよりの盟約。また、ここでヴ王の召集命令を蹴ってはトルメキアが土鬼よりも先にこの風の谷を飲み込むじゃろう。短

気を起こしてはならん」
　大ババの助言はこの谷に住む者、皆が当てにする。一理有り過ぎる大ババの言葉に城オジは黙った。ナウシカもだ。
　ジルとて本心はメギドを派遣したくない。
　行くならば頼りになる後継者にも恵まれ、いつ死んでも惜しくはない自分…ジルが危険な戦場に赴くべきで、その為の覚悟も準備も常々していた。
　幸い、腐海の瘴気で動きづらくなっていた体も、息子の薬や改良されたチコの実のお陰で溌剌としているのだ。
　そこらの若い者には負けないつもりだった。
　だがヴ王はわざわざ戦場経験の無い若きメギドを指名した。
「これも定めだ。年々激化する小競り合いをお前も知っているだろう。ヴ王は老いた私の戦働きでは満足出来ぬのだろう…どこからか、メギドの噂を聞いたのかもしれんな…」
「お兄様が…戦争に……！戦争に、とられる！あぁ…！」
　ナウシカは両手で顔を覆って泣き崩れた。
　肩のテトが心配そうにナウシカの頬を舐めて慰めるが、今のナウシカはそれに気付け無い程の悲しみようだった。
　見かねた母が「…耐えるのよ、ナウシカ」と優しく抱きとめて母娘は二人して嘆く。
　そうやってジルもナウシカも、皆が騒ぐ中でメギドとユパは静かだ。
　ユパが言う。
「メギド、今の世…戦は男の定めだ。覚悟はできておるのだな」
「はい、先生。寧ろ、男として生まれたからには一度は戦場に立ちたいと望んでおりました」
「よく言うた。それでこそジルの子だ」
　静かながら力強い肯定にユパは満足そうに頷く。
　ジルも、必死に何かを堪えるような素振りで息子に歩み寄ると、腰にいつも差していた王蟲の皮より削り出した小刀をメギドの手に握らせる。

「長年、戦場でわしの命を救ってくれた相棒だ。この日より……ガンシップの武装と共にお主に譲ろう」
すっかり己より背が高くなった偉丈夫たる息子を感慨深く見つめる。
ジルもまた若き頃は勇者となってヴ王の傍らでガンシップを駆り戦場を飛び回った武辺者。
戦に赴く息子へは様々な感情が入り混じった感慨深さを抱いているのだ。
戦争に息子を盗られたくない一方で、戦場で華を咲かせて来いとも思ってしまうのは風の谷の戦士の性かもしれない。
小刀を受け取り、強い瞳で父の目を見返すメギドの肩を抱いてから、ジルは部屋の皆を見渡して宣言した。
「メギドの出立は、3日後とする。それまでに皆、メギドと別れを惜しむがよい」
ナウシカはただただ涙に濡れた悲壮な顔で兄を見ていた。

――

その日はもう夜も更けていた事もあって、谷の者への通達はしなかった。明朝は大騒ぎとなるだろう。
今、大部屋にいる者だけで控えめの宴をし、これより3日の間は風の王子との別れを惜しむのだ。
ユパの帰還の大宴会がつい数日前…そして続けざまにメギドの出征。
平穏な風の谷に嵐が吹き荒れるているようだ。
夜も大分過ぎてもうすぐ夜明けという時分……もうメギドとナウシカ以外は酒席で静かに寝息をたてている。
皆が寝ているのを良いことにナウシカは兄の隣まで行くと、そこでメギドの逞しい肩にしなだれかかった。
しかし兄メギドは耳をすませて外の風の音をずっと聞いているら

しいのがナウシカには分かった。
「…お兄様、どうなさったの？」
メギドはまた遠くを見ていた。
隣りにいるナウシカを見てはいない。
その様子は、まるで兄が戦にとられてどこか遠くに永久に去ってしまうことを表しているのではないかとナウシカを不安にさせる。
「明日かと思っていたが……風は今ざわめいている。ならばエイガなのか……しかし土鬼はいる。ヴ王からの召集命令もゲンサクのはずだ……これは、混ざっているのか」
「え？」
兄が時折、小さく漏らす不思議な独り言。
メギドがこういう事を言う時は、今は分からずとも後々考えると未来の先読みをしているような事がある。
それをナウシカは小さい頃から知っていた。
（お兄様は運命を視たんだわ！未来（予知）を語っている…！）
次に兄が何を呟くか…ナウシカはどんな小さな声だろうと聞き取ろうと耳をすました。
「ナウシカ、行くぞ！蟲の声が聞こえる！」
「蟲…!?起きて、皆！」
立ち上がるとあっという間に走り去る兄を慌てて追おうとし、ナウシカは一旦止まって部屋の皆を大声で起こす。
ユパが胡座をかいたまま静かに瞑っていた目を開いた。
「どうした、ナウシカ！」
「お兄様が外に蟲が来ていると！ユパ様、皆をお願いします！」
「蟲が谷まで…!?お前達はどうする！」
「私はお兄様と共に！」
城の天辺まで駆け上がるとすでにメギドがメーヴェを起動させている。
「ナウシカ！メーヴェに乗れ。私がカタパルトを引いて飛び乗る！」
「はい！」
ナウシカが一飛びに白い機械凧に飛び乗ると同時にメギドが木製

のカタパルトの枷を蹴って外す。
水素エンジンが青白いスラスター光を漏らして唸りを上げる。メギドが早業でナウシカに被さるように飛び乗ると、解き放たれたメーヴェが夜明けの強い風に乗って急上昇していった。
「右の空だ！光が見えるな!?ナウシカ！」
「見えた！」
ナウシカが舵をきるとメーヴェは荒れる風に逆らうこと無く見事に気流にのって風を手繰る。
雲間の遥か向こう、月明かりとも星星の瞬きとも異なる微かな光。
兄が指摘してくれなければ気付くのにまだまだ時間を要しただろう。
「操縦は任せるぞ」
「お兄様はどうなさるの？」
メギドが手信号で光源への接近を要求すると、メーヴェはぐんっと翼を傾けた。
ナウシカの目が驚愕に見開く。
「あれは…ペジテのフリッグ!?あぁ!?蟲が…！」
隣国の工房都市ペジテの飛行船がおびただしい数の蟲に襲われている。
銃声と、マズルフラッシュが見えるあたりもう船内にも多数の蟲が侵入しているらしい。
「地蟲があんなに取り付いて…腐海に降りて蟲を殺したんだわ…！でも…お兄様、見て！船の中は女子供でいっぱい！」
「ペジテから逃げてきたんだ。ナウシカ、よし…ここでいい。お前は外から船の誘導を試してくれ。地蟲が舵を覆っている…あれをまずはどけてやらないとフリッグは回頭できない。任せたぞ」
「お兄様は…!?」
「私は…――――こうする！」
「っ!?お兄様!!」
フリッグに近づいた瞬間、メギドはメーヴェの桿を手放すと、身一つで空に堕ちていった。

「お兄様!!」
思わず追おうとしたナウシカだが、堕ちながらもじっとナウシカの目を見てくるメギドと視線が交差すると意を決する。
メーヴェを回頭させて舵面方向に流れて行くのを見たメギドは安心したように笑った。
笑うと、高速の気流の中でぐるりと身を捻ってぐんぐん迫るフリッグの艦首に、上手いこと地蟲を避けドウッと四つん這いで着地する。蟲だらけのキャノピー越しにギョッと驚くペジテの人々は何事か良く理解出来ていない。
超人的身のこなし…という言葉で片付くわけもないこの動きは、勿論、超常の力を存分に活用しての事だ。
『蟲達よ!人間のこの船は…このメギドが貰い受ける!』
極めて強力な精神感応で蟲達の脳髄に直接意志を叩き込むと、蟲の大群はギクンッと痺れたように動きを止めた。
『腐海に帰るんだ!!ここにはもう…お前達の仲間を殺した奴はいない!死んだ!』
小波が大波に打ち消されるように、メギドは思念の膨大な波で蟲達の〝仲間を殺された〟という無念と復讐を、既に果たしたのだと思い込ませ満足させていく。
蟲の動きが鈍っていくのが、取り付かれていたフリッグの船員達にも分かる。
「蟲の動きが鈍った…!?今のうちに殺せ!」
船内で銃を持った男が叫んだが、その瞬間に彼は全身が感電したかのような衝撃を受けて昏倒する。
メギドは船内の人間達にも念話を送り込みだした。
蟲と人、同時に数百の生命への精神感応を実行できる…恐るべき事だった。
『蟲は今引き上げさせる…手を出してはいけない。蟲をこれ以上殺したら私でももう抑えられない』
頭に響いてくる声に船内の数少ない武装兵は混乱するが、それでも目の前にいる地蟲へ恐怖から銃の引き金をひこうと指をかけた。

その時だ。
「やめなさい！皆、銃をおろして！この声の御方に従いましょう！」
ペジテ王家の紋を刻んだ民族帽を被り、シンプルながら質の良さが見て取れる赤いドレスを来た品のある黒髪の少女が声高に男らを止めた。
どこかナウシカに似た雰囲気を持つ美しい少女だ。
「しかしラステル様！この怪しげな声はきっと、あのキャノピーに取り付いた奴からだ！あんな事出来るのは人間じゃない！蟲が我らを惑わしているに違いありません！」
「蟲が私達を殺すならこんな真似をせずとも、もう殺せます！早く銃を下ろして！」
眼前に鈍った地蟲が歯を鳴らしている。
地蟲の複眼が男の瞳をジッと見ている。
ラステルは、この船内で誰よりも落ち着き払い男達を見て微笑んで見せる。
「大丈夫…あの方の声が信じられないというなら私を信じなさい」
「ラ、ラステル様」
男達が冷や汗と脂汗を顔面中に滲ませながら、しかし銃をゆっくりと下ろしていく。
それを見届けたかのように地蟲達がゆっくりと後退りをし…ゆっくりゆっくりと、一匹また一匹と船の壁面に空いた穴から這い出ていく。
フリッグ船の周りを、獲物を駆るタカのようにぐるぐる周っていた羽蟲達は船内から飛び出てくる地蟲を宙で受け取り、ある蟲は背に乗せ、ある蟲は口に咥えて段々とフリッグ船から離れていった。
「ひ、退いていく…！蟲が退いていくぞ！」
「すごい…こんな事が…」
「蟲を一度殺せば…どちらかが死に絶えるまで攻撃を止めない蟲達が…嘘みたいだ」
「や、やった！舵面が回復した！舵がきくぞ！右に回頭させろ！」
「よし！フリッグを立て直す…面舵いっぱい！」

風の谷の里の名の由来ともなっている長大な谷の崖に向かっていたフリッグは重たい船体をどうにか傾けると、ようやく安定した軌道を取り戻す。
かに見えたが機首が下を向いている。上方修正しきれていないのを見てとったメギドは、蟲が開けた穴目掛けて再度跳躍すると、凄まじい風圧等物ともせずスルリと穴に身を捩じ込んだ。
「うわっ!?キャノピーに張り付いてた男がっ!!」
「入ってくる!」
男達が慌てて銃を構える。しかし…。
「やめて!その御方に私達は救われたのよ!」
またラステルが男達を叱りつける。
「私は風の谷のメギド!敵ではない!」
庇ってもらって嬉しいし、何より元気に動き回っているラステルと出会えて感無量であるが今はそれどころではない。
折角助けられそうなのにこのままでは墜落は免れない。
メギドはパイロットに発破をかける。
「操舵手!どうした、もっと機首を上げろ!前に来てくれたメーヴェ…白い凧を追うんだ!」
舵面に残っていた地蟲も光弾と蟲笛で剥がしたナウシカが、メーヴェを操り前方に回ってきていた。
腐海を通ったと思しきこの船をそのまま風の谷に着陸させるわけにはいかないのだ。
この船が助かりそうなのは何よりだが兄妹はどうにかフリッグを谷の外へ誘導したい。でなければ谷が菌で汚染されてしまう。
「や、やっているよ!でも蟲に食い荒らされて…フラップが死んでいるみたいなんだ…!こ、これじゃあ無理だ!」
「そんな…」
見守るラステルが顔を蒼白にする。
回頭は出来ても機首が持ち上がらないのなら自分達の運命は決まったようなものだ。
ラステルはペジテの王族の姫…いつでも命を張って矢面に立つ覚

悟だけはしていたが、この船にはペジテ市から逃亡してきた女子供が満載なのだ。
幼子達がこのまま墜落して燃えて死ぬ運命を想像すると心が張り裂けそうだったが、苦痛なく一瞬で皆で死ねると思えばそれが唯一の救いかもしれない。
ペジテの姫がそれ以上に気の毒に思うのが目の前にいる闖入者だった。
突然、やってきて…自分達の頭に語りかけてきた不思議な声の持ち主…どうやら蟲もこの男メギドが追い払ってくれたのだとラステルには分かった。
自分達の救世主が、このまま自分達に巻き込まれて死んでしまうのは実にしのびない。
「あの!メギド様…あなたは早くこの船から逃げて!ここまで来れたのなら…出ることも出来るのではありませんか!?お早く!…それと、この石を持って…どうか私の兄アスベルに!」
ラステルは侵入者の裾を掴んで引っ張りながら男へ、窓際まで連れて行こうとしたがそれは彼自身に遮られる。
「大丈夫だよ、ラステル…少し私は無防備になる。おかしな事をするが、さっきみたいに彼らが私を撃とうとしたら抑えておいてくれ…。途中で撃たれたら浮かせられないからな」
「えっ」
ラステルはどきりとした。
彼が自分の名を知っているのにも驚いたし姫である自分を呼び捨てにしてくるのも新鮮な驚きがあった。
自分を呼び捨てる異性など父か、兄のアスベルだけだ。
しかも、なにやらこの侵入者である命の恩人は、会ったばかりの自分を妙に信頼してくれていると感じる。
「くそ、高度がドンドン下がる!」
「あがれっ!あがってくれ!!!」
二名の操舵手が必死にスイッチを入れたり切ったり操縦桿を引いたり…あの手この手を試すが地面がどんどん近づいてくる。

機首前をちらちらと跳んでいた白い凧を操る者も、なにやら必死にこちらを見て叫んでいた。
（この人…いったい、何をするの？）
船内の誰もが墜落と死を予感していた。
しかし、不思議とラステルの心からはその恐怖が消えていた。
目の前の男の、掴んだ腕から不思議な感覚が流れ込んでくる。
「……っ!!!」
男が声も無く歯を食いしばり両腕を交差させる。
腕を掴んでいたラステルも、離せばいいのに「あっ」と声をあげて彼に引っ張られる。
その拍子に船体が揺れる。
「きゃっ」
ラステルは思わず手近にあったモノ…つまりメギドの腰にしがみついてしまった。
（あ…わ、私ったら、なんてはしたない）
見知らぬ、逞しい…よく見れば美丈夫の異性に抱きつくなどペジテの姫に在るまじき行為だ。
墜落するかどうかの瀬戸際でこんな事で頬を赤らめるラステルの心胆は肝が据わっている。
しかしそれも、何故かこの男の側にいるとひどく安心するからだった。
今も男は歯を食いしばって両腕を交差さえ強く、ひたすら強く全身に力を入れている。
強く瞑った目の周りにも余りに力んだが故か、血管のスジが浮かび上がっている程だ。
「ぐっ！ぬうぅぅぅぅぅッッ!!」
――ピキッ、ビキッ、ビキキッ
男が力を更に漲らせると、彼の全身の血のスジが浮き上がり…激しい血流がスジを紅く光らせているようで、まるで戦の血化粧を全身に刻んだかのようだ。
しかも彼の体が淡い白光を放っているようにラステルには見えて、

彼がこの世の者であるか自信が無くなる程の神秘をラステルの目に焼き付ける。
しかしその状態が余りに異常なのは彼女の目にも明らかだった。
「や、やめて！それ以上…その力は、使ってはいけません！」
これは噂に聞く超常の力という奴ではなかろうかとラステルも察する。
土鬼の皇帝も持っているという不可思議な力だが、こうして直に見るのはペジテの姫も初めての事だ。
だがラステルには彼が危険な状態にあるのではと見えて仕方ない。
その時、操縦席で男が叫んだ。
「浮いた!!」
「機首が持ち上がったぞ!!降下速度も急減速……!?イケる！イケるぞ!!これなら胴体着陸できる！ハハッ！助かるぞぉ!!」
浮かれて叫ぶ男達の顔には笑顔があった。
後部の格納庫や客席にすし詰め状態の女子供達も歓声をあげている。
（…！こ、この方が、浮かせているんだ!!）
ラステルは察し、そして彼にしがみついて止める。
「だめっ！もうっ…いいですから!!船は浮きました！あとは、このまま不時着できます!!もういいの！」
「っっっっっ!!!!」
メギドの食いしばった口から漏れた血飛沫がラステルにかかり、それでもラステルはメギドに抱きついて必死に彼を制止した。
同時に、
――ドンッ!!
とけたたましい音がして船体が砕けそうな程激しく揺れて、女子供達の悲鳴があちこちからあがった。
だが墜落ではない。
激しい揺れだが、船体内部がシェイカーになる程でなく胴体着陸は無事成功したと言えるだろう。
（…っ！か、神様！）

轟音をたてて船がどこまでも砂を滑る。
メギドを守るようにラステルは抱きつき続け…やがて激しい振動は収まった。
一瞬、全てが静寂に包まれる。
皆が、自分が生きているのが不思議だとでも言うように互いを見て、やがて皆破顔した。
「……は、はは…生きてる…俺達、生きてるぞー!!」
「あぁ…!ありがとう、ありがとう…風の谷が近いお陰だ……風の神が俺達の船を救ってくれた!」
「わぁぁぁー!お母さーーん!!」
「わ、私達…助かったんだわ!おぉ、神様…私達をお守りくださった…!あ、ありがとうございます!」
「よしよし…泣かないで…、う、うぅ…助かった…この子も私も…本当に助かった…」
皆、怪我をしている。
腕を抑え苦しんでいる子もいる。
しかし死者はいない。
これは奇跡だった。
ラステルは少し唖然として、ホッと安堵し、自分の国の民の子らが無事と知って涙が溢れてくる。
しかしすぐにハッとなって膝上に抱える男を豊かな胸に掻き抱く。
「しっかり…!しっかりして下さい!お願い…目を開けて…!こ、これであなたに死なれたら…!」
男は目を瞑ってピクリともしない。
呼吸もしていないようにラステルには感じられる。
『そういう時は人工呼吸だ…』
誰かに言われ、ラステルは涙を浮かべながら聞き返した。
「人工呼吸とは…唇を合わせて息を吹き込む、アレですか!?」
『そう、アレ』
「わかりました!こ、こうですね!」
ラステルに迷いはない。

彼は不思議な力で自分達を救ってくれたのだと彼女は確信している。
王家の姫が初めての口吻を捧げる事ぐらい安いものだとラステルは思う。
「ん…ちゅ、じゅる……」
『そうそう、たっぷりベロを奥まで突っ込んで』
「んちゅ…ふぁい……こ、こう、でふね」
『そしてベロで唾液を送り込み』
「は、はい！ちゅぶ…じゅっ、じゅぶっ…」
一旦口を離し、垂れる髪を掻き上げて耳にかけるラステル。
元気に返事をし指示通りに人工呼吸を再開した。
『おお…そのままそのまま。いいね、もっと舌を絡ませて。舌を吸う』
「んっ、んっ…ちゅっ、ちゅうぅぅっ、じゅるっ、じゅぶっ、じゅぼっ、ぢゅるっぢゅるるるう」
言われた通りやり続けるラステルだが、やがて舌先からビリビリとした不思議な痺れが襲ってくる事に気付く。
（…ん…な、なに？この痺れ…。あっ……なんか、熱い…？）
整った鼻から必死に酸素を吸い集め、男を救おうと必死にマウストゥーマウスを続けるが…。
「あ、あの…ラステル様？」
「っ!?ひゃ、ひゃい!!」
後ろから老婆に声をかけられビクンッと肩を跳ねさせた。
急いで離した口からはツゥーーっと銀の糸が倒れた男の口に繋がる。
「…？お顔が赤いですぞ？どこかお加減が？…ま、まさか今の着陸でお怪我などを!?」
老婆は心配そうに顔を覗き込むと、ラステルは慌てて口元を袖で拭った。
老婆がおやっ？という顔をしてラステルの膝に眠る男を見る。
「おお、その方も無事だったのですね！良かった…その御人が船に飛び込んできてから…事態は好転しましたからなぁ。きっと、その御人

は噂に聞く超常の力を持っているのではないでしょうか」
「そ、そのようですね。土鬼の皇帝も持つというその力で私達を救ってくれたのを私は見ました…！だから、だから何としてもお助けしないと…！」
「…しかし今はそっと寝かせておいた方がよいのでは」
「え…？寝て、いますか？」
「はい、ほら…ゆっくり上下してますじゃ」
落ち着いて良く見ると男の胸はゆっくりと上下している。
鼻元に耳を近づけると確かにスーッと呼吸していた。
「あ、あはは！良かったです！呼吸はなさっていたんですね！よかった！」
誰が寝ているだけの彼に人工呼吸しろと言ったのだ、と一瞬ラステルは思ったが…きっと自分が頑張って人工呼吸をしたから彼は呼吸を無事取り戻したのだと思うことにした。
はぁーと、ようやく安堵の溜息をつき、ラステルは膝上で寝息をたてる男の頭を、手持ち無沙汰なのかサラサラと撫でだしていた。
そしてもう片方の手で、服の内側で乳房の谷間に埋もれていた〝石〟を確認する。
（…良かった。失くしていない。どうにかして…アスベルに渡さないと）
その時、
「おーーーい!!」
遠くから声が聞こえた。
ラステル達が見れば、そこには必死に掛けてくる青い腐海装束の人。
ラステルはゆっくりと、大きく手を振って返事を返すのだった。

ラステル、覗く　★

ペジテ残党救出は大事だった。
盟主である大国トルメキアは、古き盟約で結ばれたペジテを問答無用で滅ぼした事が判明した。
ヴ王は野心家であるが暗君ではなく、味方には相応に報酬も振る舞う太っ腹さも持つ剛毅な王で、この裏切りは全く不可解だったがラステルの話を聞く内その謎は氷解する。
ペジテで巨神兵が発掘された。
それも化石ではない…傷一つ無い超硬質セラミックの骨と胎盤（黒い箱）を持つ完全な雛形でだ。
どれだけ箝口令を布いても各地に潜むトルメキアの間者には伝わってしまい、そしてヴ王の耳に届けば王の判断は迅速だった。
勅命を受けた第４皇女クシャナの軍に瞬く間にペジテは滅ぼされたが、トルメキア最大の狙いである巨神兵の起動キーである〝秘石〟だけは守り抜き、こうして避難できた女子供と共にここまで逃げてきた…これが顛末であった。
事の大きさと剰りの厄介さに族長ジルも、ユパもナウシカも絶句するが、一人メギドだけは涼しい顔をしている。
これはメギドがとある事情（転生）により前もって知っていたからなのだが、他の者から見ればとてつもない豪胆で冷静な者と見えたのは仕方がない。
とにかく、非常に長い時間をかけて厄介な議題に対しての会議は行われた。
とにかくも荒廃した時代であり世界だ。
こういった時に助けの手を差し伸べるだけの良識と余裕が風の谷にはあったのがペジテの難民達にとっては幸運だ。
１００人以上の難民が突然流入する事になり族長ジルも大ババも困惑したが、幸いにして風の谷はメギドが齎した恩恵によって潜在的な国力をめきめきと伸ばしていて今の時代の小国にしては多少の余力がある。

ラステルが言うにはペジテの復興は半ば絶望的…あるいは数十年単位でかかる長期戦となるだろうとの事で、ラステルを始め生存者達は深く頭を下げて谷の住人としてくれと懇願した。
「子供らは将来の働き手となってくれるであろう。若い女も、谷の男に嫁げば我が谷の一員…いずれ子も生まれよう。しかし…老婆達は、な」
当初、族長ジルは５００人程度の小国に血縁も無く労働力もそこまで期待できない老人の受け入れには少しの難色を示した。
しかしラステルに「あの老人達は工房都市で培った機械関連の知識がある」と説得され、また助けた張本人である王子メギドが受け入れに賛成した事から態度をすぐに軟化させた。
どうも最初から受けて入れてやるつもりだったらしい。
もともとメギドの健康改革と農業改革のお陰で、風の谷はそこまでカツカツというわけではないのだ。
メギド出立まで後２日と少しという、谷の誰もがしんみりとしてしまいそうなこの時期に降って湧いた〝ペジテ残党受け入れ〟という大事件の忙しさは、谷の人々から王子を失う寂しさを忘れさせてくれる。
メギドもメギドで、
「ペジテの方達がいてくれれば、私の作ったエンジンを乗せるガンシップも造れるかもしれません」
等と言って幼い少年のように屈託なく笑って、ガンシップを一から造れることに明らかにワクワクしていた。
なんでもゴーストと名付けた赤い鏃のようなガンシップを作るのだとか。
ジルもナウシカも、珍しいものを見たと微笑み、ラステルもそんな風にペジテの住人を受け入れてくれたメギドをありがたく思う。
そもそも、メギドがいなければラステル自身も他の者も、ペジテ人は皆生きてはいまい。
ラステルは風の谷の人々と…何よりメギドに対して計り知れない恩義を感じていた。

「あ…メギド様」
だから谷で顔を合わせればラステルはメギドに対して頬をやや赤らめたはにかんだ笑顔を見せるのだ。
「やぁラステル姫。この家の住心地はどうだろうか。…風の谷もここ数年は人口が増えているんだ。子沢山の若夫婦が別邸で使ったりしていて、空き家が少なくて申し訳ない」
メギドは様子を見に来てくれたらしい。
話すメギドの唇を見ていると、ラステルはあの時の人工呼吸を思い出してまた頬を赤くする。
(…後で聞いたら、人工呼吸って全くやり方が違った……!は、恥ずかしい…あんな事してしまって…)
緊急事態でラステルも気が動転していた。
冷静になって思い出してみればあれはどう考えてもキスだ。
ラステルとて王家の女であるから多少は女中や文献で性知識は仕入れていた。
しかしそれも夫となる殿方に肌を晒す、とかキスをする、とかで後は全部殿方にお任せすれば大丈夫!という非常にざっくりしたものでしかない。
(気を失ったメギド様に…あ、あんなことして……わ、私…もうお嫁に行けないわ…どうしよう)
でも、口吻をした時…ベロを絡ませた時…舌から今までの短い人生では経験したことのない妖しげな感覚が舌先から全身にジワリと広がったのはラステルは自覚していた。
メギドを見ていると、あの時の感覚と気恥ずかしさが蘇ってしまい頬がポッと火照る。
そんな乙女の恥じらいを知ってか知らずかメギドは爽やかに話しかけ続けている。
「今、男手を使って家をどんどん作っているからもう少し待っていて欲しい。直に、ペジテの女王と姫に相応しい屋敷も用意する」
「い、いえ、いいのです!私と母など…もう亡国の王族ですから。王家の血筋だと胸を張ってもその国がないのでは唯の道化ですわ。私は

…この谷で一女として一生懸命働いて生きていきたいのです」
「ははは。まぁまだそう決めつけないでよろしいでしょう。まだ兄君のアスベル殿の消息も掴めぬし、この後どう生きるか…身の振り方はゆっくりお決めになればいい」
「はい。ありがとうございます。母共々ご厄介になります」
ぺこりとラステルが頭を下げれば、ラステルの母もベッドから身を持ち上げて頭を下げた。
ラステルの母…ペジテの女王は命は拾ったが落下時の怪我で身を休めている日々だ。
メギドは微笑んで女王に寝ているよう促すと、もう一度ラステルを見る。
「ラステル姫…この秘石…本当に私が持っていても？」
「はい、どうかお願いします。兄よりも貴方が持っていた方が…その秘石を守れると思うのです。その御力で船ごと私達を…文字通りお救い下さったメギド様ならば…」
「…」
「メギド様が、その秘石をどうなさるのか…判断はお任せします。メギド様が〝トルメキアに渡すべし〟とお考えなら、私は異論を挟みません」
メギドの首かかるネックレス。その装飾は紛うことなき秘石である。巨神兵の魂が強化ガラス細工の小さなケースに入ってメギドの首にある。
ガラスケースを指で転がすと玻璃が七色に光る。秘石を封ずるケースにもペジテの工芸技術の高さが随所に光っていた。
「途方も無い厄介事を押し付けたと…そういう自覚はございます。既に故郷も滅んだ身…財も何も無く、世界を揺るがす恐ろしい物を押し付けて……何を差し上げればこの風の谷に、メギド様に報いる事が出来るのでしょう」
ラステルも、女王も、小さな屋敷に所狭しと動き回っていたペジテの女官達もうつむいた。
実際、彼女らにこの大問題に対処する力は無いのは自他共に認める

所だ。
だから、混乱の中でラステルが秘石を持ち出せたものの…逃げ延びた筈のペジテ王家最後の男子アスベルの判断を仰ぎたいと、秘石を彼に渡そうとしていたのだろう。
だが命懸けで、世界を再び火の七日間に沈めはすまいと秘石を野心家の手に渡るのを防いだのは確かだった。
メギドは微笑む。
「そうですね…ならば、貴方をお礼に貰い受けようかな」
「え？」
周りの女官も、背後に横たわる女王もギョッとした顔をするが、すぐに「名案かもしれない」という顔になる。
咳き込みながら女王が口を開く。
「ゴホッゴホッ、メギド様…それは、本当にその気なら、こんなにありがたい話はありません。見ての通り、美しい姫です。自慢の娘です。既に国滅びようとも、ペジテ王家の血筋が貴方様の…風の谷の王家に入るのは決して悪い事ではないと――ゴホッ」
ここで風の谷王家の者と婚姻関係になれれば、これからの事も大いにやり易くなるに違いなかった。
トルメキアにペジテ残党が引き渡される可能性も減る。
娘を見ているとラステル自身、命の恩人であり、また美丈夫でもあるメギドを一目見た時から気になっているのは母の目から見ても一目瞭然だった。娘の女としての幸せ的にも悪い話ではないと女王は思う。
「姫として教育はしっかりしてまいりました。ペジテ人として、機械の知識も技術もございます。体も瘴気に毒されておらず元気なややこが生める、若い娘です。どうかメギド様…この娘を末永く……！」
「お、お母様！変なことを仰らないで…。私などを嫁取りなど…メギド様に失礼です。それに、メギド様は…きっと冗談で仰っただけで――」
ラステルの頬がまた赤くなってアワアワとしだしていた。
メギドは笑う。

「そうですか。母君の許しも出たなら、いずれ用意ができ次第貴方を迎えに来ますよ、ラステル姫」
「ええ!?」
ボッとラステルの美しい鼻筋から首元までが真っ赤になる。
「ははは、何…今直ぐというわけじゃありません。私は明後日にはちょっと出陣でして。生きて帰ったら貴方を妻に迎え入れたい。…あ、事前に言っておきますが…正室はもう決まっているので…」
「そ、それは…メギド様も王家の御方で、私も王家の女…妻一人で終わるとは思っておりませんのでご安心を……って、え?あ、あの…メギド様が、御出征?」
ラステルの顔が強張った。
いきなり色々と話が進んで理解が遅れている。
「ええ。アスベル殿もきっと出陣の予定が会ったのでしょう?私もなのですよ…他にもやらねばならぬ事があるので今日はこれで失礼します。では」
太陽の傾き具合を見てメギドはさっさとラステル達が逗留する家を後にしてしまう。
「あ…」
去っていくメギドの背に、ラステルは思わず手を伸ばすが控えめな彼女は彼を止める事が出来なかった。
「メギド様も…トルメキアに…」
彼の服を掴みたがったラステルの指が虚しく宙を彷徨う。
風の谷の人々は良い人達だ。
それは分かっている。
しかし、最大の恩人であり、所詮他人の集団で厄介事を持ち込んだペジテ一党を迎え入れるよう谷の者達を強く説得してくれたのはメギドなのだ。
現状、後ろ盾とも言えるメギドが谷からいなくなる…しかも明日の命定かでない大戦争に盗られる。
これはペジテの人々を強く不安にさせる。
「メギド様…」

既にラステルは多くのことで、出会ったばかりの風の王子に依存し始めてしまっていた。

――

―

昼夜交代で谷の男達は住居の建設に勤しんでくれていた。
ペジテの女達で怪我も無く無事な者、動ける者はこうした男達の世話に励む。
すでにペジテ女と風の谷の男とで良い雰囲気になっている者もいた。
明日何に襲われるか分からぬこんな時代で、寿命の短い者が多い世であるからじっくりと恋を育てるよりも「これぞ！」と思った異性とさっさと結婚する事は多い。
数ヶ月後には風の谷の男とペジテ女との婚姻ラッシュが始まるだろう。
トンカチやのこぎりの音響く夜中、ラステルはひっそりと風の谷の中心地…王家の者が住む背の高い城へとこそこそとやってきていた。
陽も沈み、勝手知らぬ異国の地でも今はラステル一人で出歩けた。
建設ラッシュで彷徨く者は男女問わず多く、また、メギドが夜中でも街を照らす街路灯なる物を設置してあるから足元も安全だ。
ラステルは農作業の合間に建設に勤しんでくれる男達の為に、ペジテの女達と一緒に手料理を作った。
その殆どは当然、作業している男達に皆と一緒に配って回ったが、ラステルは是非メギドにも…と思ってこうしてバスケットに入れて差し入れにやってきたのだった。
別にこそこそする必要はないが、少し気恥ずかしさを覚えてラステルは自然と人目を避けて歩いていた。
「おお、ラステル様でしたな。風の谷はどうです？」
見張り番についている城オジににこやかに声をかけられて「とっても素敵なところです」と返せば、

「もう陽も沈みましたぞ。女性一人出歩いちゃいかんですな。誰か共をつけましょうか？」
　親切心からそう言ってくれるのだった。ラステルはにこやかに首を振る。
「いいえ、大丈夫です。これをメギド様にお届けしたらすぐ帰りますから」
「おっ、そういつぁ…ああいい匂いだ。ん～～～なるほど…これは、メギド様も罪作りな御方じゃなぁ！」
「あ…そ、その…そういうのではないですから」
「ワッハハハ！そういう事にしときますわい！ささっ、どうぞ。メギド様は先程、庭を見て廻っておいででしたぞ」
「ありがとう」
　石造りの橋を越えれば塔のような城の入り口だ。
　広間の階段を登っていくと、中程で外へ出る扉がありそこを開け放てば大きく突き出したベランダがある。
　そこは土が敷き詰められ木々が茂る城の庭だった。
　ラステルは道すがらすれ違う女房衆達にもたおやかに挨拶を繰り返し、ペジテの姫の生まれの良さを無意識に振りまく。
「まぁまぁ、まるで姫様をもっとおしとやかにしたよう」
「ペジテの姫はさすがに風の谷の田舎よりも洗練されてるわぁ…でも、私達の姫様も負けてないけれどね…ふふっ」
　風の谷の女房衆の社交辞令やお世辞に笑顔で感謝しつつラステルは階段を登っていけば、目当ての扉を見つけてゆっくり開ける。
「…メギド様…いらっしゃいますか？ラステルです」
　石の床から土の地面に城内で切り替わるのは面白いと思いつつラステルは土の感触を楽しんだ。
　丁寧に剪定され行き届いた手入れの草木を感心して観賞し歩いていると、やがてラステルの耳に声らしきものが飛び込んでくる。
（…今のは、声？でも…何か苦しそうな…）
　鳥か獣が唸っているのだろうか。怪我でもしているのかも。
　驚かせない方が良い…そう思い慎重に歩を進めるラステル。

「っ!!」
そして声の方に近づけば驚きのあまり息を止めた。
咄嗟に草むらに身を潜める。
「っっ――ふっ、ぅ、っ――――んっ、んっ――っ、っ――――っ、っっっ!」
草むらの隙間から、ペジテの姫君はその刺激的な光景を食い入るように見てしまう。
女性がメギドに組み敷かれ、草むらに埋もれて腰を打ち付けられていた。
――ぐちゅっ、ぶちゅっ、ぐぼっ、ぐちゅっ
聞いたこともない粘液質な水音。しかし本能でとても淫らでエッチな音だとラステルは分かった。
思わず耳を塞ぎたくなる…そう思ったのにラステルは必死に聞き耳を立ててしまうのだ。興味を掻き立てられる音だった。
―ごくり
ラステルが唾を飲み、隠れながら息を殺して震える足でまた少しその光景に近づく。
生々しい声と臭いがはっきりとしてくる。
「ふ、うっ!♡ん、っ、っっ!♡〜〜っ、ふぁぁ、あっ、んっ♡」
「…っ!」
(あ、れは…あれは……ひょ、ひょっとして…夫婦の……っ、閨事…?)
ゴクッともう一度ラステルは唾を飲み込んだ。
息を殺しているのはラステルだけではない。
メギドに組み伏せられている女性もだ。
ラステルは彼女に見覚えがあった。青い腐海装束に身を包んだ美しい、同年代の少女。しかし、その人物は――。
(え…?えっ!?た、たしか…あの方は…ナウシカさん…?えっ?メギド様と、兄妹の…はず)
まだじっくりと話したことはないが、救助の時には真っ先に駆けつけてきてくれた。(ナウシカがいの一番に助けたのは疲労から昏倒していたメギドだったが)

とても美しい妹君だったとラステルは振り返る。
すらりと長い手足。
女性として豊満な体。
明るい素敵な笑顔と優しく透き通った声。
あの時は、「あぁ兄のメギド様と仲が良いのだ。私とアスベルよりも仲が良いかも」と微笑ましく思っただけであったが…。
（ま、まさか…メギド様とナウシカさんが…こんな関係だったなんて）
ナウシカの透き通った声が、得も言われぬ色香を含みながら、息苦しそうに口から漏れている。
白く綺麗な肌が剥き出しになった長い足がメギドの腰に絡まっている。
腕も胴に絡まりギュッと必死に抱きつく。
唇は呼吸を求めて時折離れるが、深い口吻を先程から繰り返していた。
ラステルが知っているキスではない。
あれはメギドに披露してしまった人工呼吸時の…舌先が痺れる妖しいキスだ。
（ナウシカさん…気持ちよさそう…？あのキスを繰り返していている…。きっと、あの感覚…あれが、ナウシカさんも…欲しいんだ）
――ぐちゅっ、ぱんっ、ぱんっ、ぐちゅっ、じゅぶっ、ぱんっ、ぱんっ、
「っ！♡ひっ、ぃ、いィ…、お…にい、さ、ま…♡あっ、あっ、ん…っ、っ♡っ、～～っ！♡ぅ…ふぁ♡おにいさまの…赤ちゃん、孕ませて♡ナウシカは…戦争から、おにいさまが帰るって…ん♡信じております♡けれどぉ♡でも、行ってしまわれる前に…♡おにいさまの♡子種…仕込んでください♡んっ♡んっ♡っっ！♡ふぁ♡」
メギドの腰がナウシカのぱっくり開いた股に打ち付けられる。
卑猥な水音が耳からラステルを犯している。
卑猥な光景が目からラステルを犯している。
メギドと人工呼吸をして得た感覚…あれをもっといっぱい、もっと大きくしたもの…それをナウシカは得ているのだろうかとラステル

は思った。
（…やっぱり、あの感覚は……〝キモチイイ〟んだ……）
情事を覗き見ながら、ラステルもメギドとのキスの感覚を思い出す。
いつの間にかカラカラになった喉と口内を潤そうと、ラステルは唾の湿り気を得るためベロを動かした…その時だ。
「っ！♡」
口内を滑る舌がジンジンと痺れ、その痺れはジワリと喉奥から背筋、下っ腹まで広がっていく。
（い、今の!?何!?…んっ、今の…まるで、あの時メギド様と…舌を絡ませて時のような…）
――ぐぽっ、じゅぶっ、ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ
「ふっ、ふっ、んっ、ぐぅ、あっ、あっ、っ、っ♡っ！」
（あぁ、ナウシカさん…あんな、エッチな顔と声……ごくり……メギド様の、股間の……す、すごい…♡あっ…濡れて、テカテカして…っ♡ナウシカさんの所も…あんな濡れてる…メギド様の…お、おちんちんと…液の糸で）
生まれて初めて見る男の滾る肉棒。
自分にもある女の秘所だが、ナウシカはその秘所であの大きな肉棒をずっぽり受け入れている。
清楚に見えたあのナウシカが、あの肉棒が突き入れられる度見せる苦しそうな、しかし蕩けた顔を見れば…きっとアレは気持ちが良くて幸せなのだろうと察せた。
「…メギド、様…」
あの時の感覚を頼りに、ラステルは自分の唇を指でなぞる。ビリっと唇が痺れるようにくすぐったい。くすぐった過ぎる。
（…♡ふぁ…唇…くすぐったいけど…きもちいい…）
くすぐったいのを我慢し何度も撫でるとジンジンとした感覚がみるみる大きくなってきた。
メギドとのキスをずっと思考で繰り返し、目の前の情事を…メギドの腰使いと、たまに結合部から見える滑った肉棒を網膜に焼き付けな

がら、唇からチロリと見え始めた舌先も指で弄る。
「っ…ん♡」
ラステルは舌を自分の細く白い指でちょこんと摘んでくりくり撫で擦ると、メギドとのキスの映像が脳内でより鮮明になっていく。
―ピンッ
「ん…♡あ…なに?おっぱいの…先が」
身を捩った時に胸先からも、ベロに負けぬぐらいの痺れが背筋を駆け登る。
「…なに、これ……私の、乳首が…♡」
同年代の少女らより豊満に成長している乳房の先が、服を持ち上げている。
ナウシカにも負けず劣らずの実りは男達から見れば垂涎物だ。
ラステルのその清楚でありながらも大きな胸が、淫らに乳首を固くさせていた。
身を捩る度襲ってくる妖しい痺れにラステルは酔いしれる。
きっとこれは王家の姫がしていい事ではない。エッチな事なのだ。お母様に言われた、〝みだら〟なことなのだ。
この感覚に負けちゃいけない。
ラステルはそう思っても、この妖しい痺れに身を委ねてしまいたかった。
「はぁ…はぁ…♡ここ…♡おっぱいの先っぽ…コリコリされてるナウシカさん…あんな幸せそう♡」
ラステルの指が、赤いドレスの上から見ても分かる、大きなおっぱいの固くなった先端に恐る恐る近付く。
「っ!?♡」
ビクンッとラステルの腰が跳ねた。
草むらに隠れているので身を低くしていて良かった。でなければガクガクと笑う膝では踏ん張り利かず転んでいただろう。
(あぅ♡な、なに、いまの!すごい…なんか…あっ♡か、勝手に♡はぁぁ♡あっ♡乳首コリコリ♡すると…色んなとこ、動いちゃう♡)
――コリコリコリコリ…くにくにくにくに…くにゅくにゅく

にゅくにゅ、コリコリコリコリコリ
「っ♡っっ♡んっっっっ♡ん♡ん♡～～～～～っっっっ♡♡っ♡」
――びくんっ、ぴくんっ、ぴくっ、ぴくっ
メギドの情事を1秒たりとも見逃すまいとしつつもラステルは自分の乳首をこねるのを辞められない。
寧ろメギドの腰使いを見つつ乳首をイジメると、味わった事のないキモチ良さと幸せがラステルの脳の奥に染み込む。
ラステルは乳首弄りに夢中だった。
生まれて初めてのオナニーに夢中になっていた。
（はっ、はぁ、はぁっ♡メギドさま♡メギドさま♡あっ♡ちくび♡きもちいぃ♡）
――くにゅくにゅくにゅくにゅ、さすさすさすさす、コリコリコリコリ
「っぅ♡あぅ♡っっ♡ふっ、ふっ、ふっ、ふっ♡っっ♡」
――じわぁ
（あ…おまたが…なに、いまの…♡わ、わたし…ひょっとして、この年で…お漏らし…？そんな…）
股間が、割れ目が熱い。ラステルは自分の割れ目が潤ったのを感じる。
小さなころ、お漏らしをしてしまった時のような…自分の割れ目が濡れる感覚。
（…確認、しないと）
だがラステルは単純なお漏らしではないと本能で理解している。
目の前の濃厚な情事を見れば分かる。
何故なら、メギドの肉棒を抜き入れされているナウシカの割れ目はあんなにも濡れている。
（確認するだけ……確認するだけ、だから♡）
――ぐちゅっ
「んっっっっ!?ふっ、ふぁぁぁぁっっ!!?♡」
白いズボンにゆっくりと侵入させ、下着の縁をなぞり、恐る恐る下着の上から割れ目に指をなぞった。

その瞬間、唇をイジメるよりも、乳首をイジメるよりも大きく鋭い妖しい痺れがラステルの背を走った。
覗き見の最中なのに、つい大きめの声が漏れたと慌てて口を抑えるも、ラステルは乳首と割れ目をイジメる自分の指を止める事ができない。
――クチュクチュクチュクチュクチュ、くぷっ、クチュクチュ
――コリコリコリコリ、くにゅくにゅくにゅくにゅ、コリコリコリコリ
「っっっ!!♡はっ、ぁぁ♡ん!ん!♡んん!♡～～～～～っっっ!♡んっ!♡ふっ♡ふっ♡んんん～～っ!♡」
初めてのオナニーに清楚な処女姫はのめり込んだ。
大きなおっぱいの先はもうビンビンに勃起し、それを自分の可憐な指で捏ね撫で擦り優しく捻る。
楚々とした割れ目を何度も執拗になぞり、小さな狭い穴に指先を浅く出し入れし、乳首のように固くなりだしている割れ目の上っかわにぽつんといた濡れ光る肉真珠を皮の上からくにゅりと先端をさする。
「～～～～っっ!♡っっ♡あっ!♡あっ♡♡ああぅ♡んん♡」
ラステルは怯える子犬のように背を丸める。初めて襲ってくる大きな快楽の波を予感し、怖くなって怯える。だが、快楽に魅せられたラステルは指を止めることが出来なかった。
ペジテの男達を魅了した清楚で美しい顔が、だらしなく快楽に歪んで、ぷっくりとした健康的な唇からは薄っすらと涎すら垂らしている。
まともな男ならばこの顔を見ただけで勃起する。そういう淫乱な顔で、ラステルは自分のエロい体をイジメていた。
(…!く、る!何か、くる!きちゃう!あぁ、だめ、だめっ、これ…だめっ!あぁぁ、ペジテの、姫なのに…こんなの、えっちなの、だめ…なのにぃ♡ぁぁぁ、め、めぎど、さまぁ♡)
ラステルの思考を快楽の白い大波が塗り潰し飲み込みだした。
初めての絶頂はもうすぐ目の前。
ラステルの足の指先がきゅうぅぅっと丸まった。

その時だった。
「やぁラステル」
「っっ!!?」
がさりと草むらを掻き分けて、メギドがにこやかにラステルを見下ろしていた。
「え!?あっ♡!なん、で♡気付いて…♡あっ、だ…めっ♡だめっ♡見ないで♡めぎどさま♡っ♡見ちゃ♡だめっ♡わたし、わたしっ♡」
「なんてスケベな姫なんだ。私が貰い受けようとしたペジテのおしとやかなお姫様はこんなに淫らな人だったんだね」
ニコニコと、いつもと変わらぬ爽やかな笑顔で言ってくるメギドにラステルの心は乱れる。こんな惨めで卑猥な姿を見せたくない。なのにラステルはもう襲ってくる絶頂を止められない。
「あっ♡ご、ごめんな、さい♡わたし、こんなっ♡あっ♡だめぇ♡だめっ♡も…だ、めぇぇぇぇぇぇぇぇ♡あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あっ!?♡♡♡」
ラステルは人生初のオナニー姿と絶頂顔をメギドに晒しまくる。
顔だけでなく全身も羞恥と興奮で真っ赤に染めて、汗だくになって、眉根を寄せて、目を快楽に細めて、唇をだらしなく半開きにし、手足を強張らせて背をしならせて、解れ蕩けたスジから白くとろりとした愛液を漏らす。
(見ら、れた…見られてしまった……♡あぁ、私…もう、お嫁になんて、いけない…♡)
快楽の余韻とメギドに見られたショックで、荒く短い呼吸を繰り返して茫然自失する美しきペジテの姫。
それらの衝撃が大きかったせいと、生まれて初めてのオナニーと絶頂の疲れもあってラステルはそのまま意識を暗転させた。
「うーん…まだフリッグ持ち上げた疲れが残ってるんだが…」
ナウシカとラステルを誰にもバレずにどう戻すか…メギドはまた超常の力を湯水のように使うのを決意したのであった。

メギドとラステル　★

ナウシカの意識を精神感応でより深い眠りに導く。
そして念動で温い湯をスライムのように妹に纏わり付かせれば、精液と愛液と汗で汚れたナウシカを綺麗にするのは朝飯前だ。
そして城内で働く者達の意識の隙間を縫えば、彼らの意識外で誰にも気取られぬよう行動できる。
「さて…」
妹は小綺麗にして自室に寝かせた。今頃テトとぐっすり夢の中だ。
そしてラステルは同じ要領でメギドの自室に連れ込んだ。チラリと、未だに紅潮し汗に濡れて色香滲むラステルを見る。
「ラステル…ラステル…、目を開けて、ラステル」
「ん…」
ラステルは優しく起こされて、薄く目を開けてメギドをぼんやり見上げた。
「メギドさま……っ！あっ！」
とても淫卑な夢を見た。口にするのも憚られる夢。
ラステルはとっさにベッドの上の掛け毛布を類って己の体を隠す。
胸の鼓動はうるさいくらいにドキドキと高鳴っていた。
「な、なぜメギド様がここに！」
「なぜって？ははは…ここは私の部屋だ」
「え!?」
「ラステル姫…ペジテのお姫様は、随分と……淫乱でイケナイ悪い姫だ」
耳元に近づいてそう言われ、ラステルは首までカァーっと真っ赤になる。
「な、な!?なんで私が…い、淫乱なのです！」
「言われたいのか？」
「そ、それ、は…いえ、あんなのは…夢です！そう、夢で…あの…だから、も、もう夜も遅いし私…帰りますから…！」
「私とナウシカのセックスを覗き見たね」

「っ！」
　メギドを押しのけベッドから立ち上がろうとしたラステルが固まった。
（…！う、うそ…やっぱり、あれは夢じゃない…の？ほ、本当に…メギド様は妹のナウシカさんと）
「そうだよ。私とナウシカは愛し合っている。もうじき、正式に娶って孕ませるつもりだ」
　メギドの顔がラステルにずいっと近づいた。「あっ」と小さく叫んでラステルはベッドに倒れる。
　メギドの手がラステルの頬を撫でた。
「きょ、兄妹で…そんな、不浄なこと――」
「王家だ。そういう事もあるさ。ペジテだって、歴史を紐解けば一例や二例じゃきかないだろう？近親婚は」
「…それは」
「それに、そんな事を糾弾してる場合ではないよ、ラステル。君はイケナイ事を覗き見以外にもう一つした」
「っ！い、いや…言わないで、メギド様…」
　ラステルの顔は火が出そうな程紅潮した。
　ドレスのスカートを捲られ、白いズボンの中にメギドの手が遠慮なく侵入する。
「あっ!?なっ！なにを――ひゃぅ！♡」
　――くちゅ
　あっという間に下着まで辿り着かれ、他人に触れせてはいけない姫の秘められた花園が踏みにじられた。
　ラステルの初心マンコは既に濡れて解れていた。
「一人であんなに必死にオナニーして、可哀想に……もうこんなにエッチなマンコがとろとろで…男が欲しいって泣いているじゃないか」
　――クチュクチュクチュクチュクチュ
　メギドの指が下着の上からラステルの割れ目をぐぷりと押し込んで撫でる。

「あっ？♡あっ！♡あっあっぁっあっ、あっ♡だ、めっ♡あっ、あっ、ひっ、うぅぅ♡」
　下着は既に透けてしまう程濡れていた。乙女の溝もまだ人生初オナニーの余韻で蕩けている。
「だめっ、メギド、様っ！♡ひぃ♡あっんっんっふあぁぁぁ～～っ♡あっ♡あぁぁぁ…っ♡そんな、とこぉ♡だめですぅ♡んっ♡んぅぅ♡」
　――クチュクチュクチュクチュ
「あああ♡ひんっ♡いや…あっ！♡あっ！♡あああ♡そこ…そこぉ…んっ、うぅぅ、いや…こんなの♡知らないいぃぃ♡っっ♡」
　――くぷっ、くちゅっ、くちゅくちゅくちゅ、つぷつぷつぷ
　男の指が濡れた下着を押し込み、ペジテの姫の濡れた割れ目に下着を突き入れてくる。その度、割れ目から卑猥な音が漏れてラステルの耳を犯す。
「いやぁ…、こんなの…♡こんなことぉ♡ま、まだ…私達…め、めおとに♡なってないのにぃぃ♡あっ♡い、いけませんわ♡あぁぁぁっ♡」
　メギドの手がラステルの豊満な胸にも侵攻してくる。
　むにゅりと、男の手で形を変えられ、根本から優しく絞り上げるように揉まれる。
「あっ、はぁぁ、ん…♡お、おっぱい…そんな風に、しては…♡」
　ラステルの巨乳が柔く絞り上げられる。じわりとした刺激が揉まれる度に広がって、胸の先端に絞り上げられる度にその刺激が乳首を伝わる。
　――ぴく…ぴくん……ぷくぅ
「ああ…♡だめ…見ないで♡」
　オナニーでまだ疼きを芯に残していた乳首はそれだけであっさり勃たされてしまう。
　ラステルは勃起し服を持ち上げた乳房の先端を腕で隠そうとするも簡単にメギドに阻止される。そしてメギドの口が服の上からその突起に吸い付いた。
「っっ！♡ひゃっ、んっ♡んんんんっ!!♡あぁっ！だめっ、だめ、だ

めぇぇ♡あっ！♡ちゅううって♡しないでぇぇっ♡」
ラステルは仰け反って、ベッドの上で悶えた。
男の片手が下着の中にいつの間にか侵入し、薄い陰毛に愛液を塗り拡げながら割れ目を執拗にイジメる。
男の片手が大きな乳房を揉み同時に指でも乳首の先端を服の上から擦る。
男の口が逆の乳房に吸い付いて乳首を更に勃起させようと吸い上げ、舌で転がし、歯で甘噛む。
「あああっ！♡あっ！んっ！♡んんっ！♡んっ！♡んぅ、あぁあああぁあっっ♡♡」
——くちゅくちゅくちゅ、つぷつぷつぷつぷ、ぐちゅっぐちゅっぐちゅっ
——コリコリコリコリ、もにゅっ、もにゅうぅぅぅ、コリコリコリコリ
——ちゅうううっ、じゅじゅぞっ、じゅるるるっ、くにゅっこりっくりくりっ、ぐにゅぐにゅっ
「ひっ！♡ひぃ♡ああっ♡うあぁっあっ！♡っぅあ！♡あぅ！♡ああっ！♡」
あっという間に絶頂の波がラステルを押し潰そうとする。
しかしここでメギドはパッと全ての愛撫を止めた。
「——あ…？♡あ、ぁぁ…ハァ、ハァ、ハァ…ん、ぐ♡…ハァ、ハァ、ハァ…♡ひ、ん……ふぅ、ハァ、はぁ…♡な、んで…♡」
——ひくっ、ひくんっ♡
ラステルの、スジとしか言えなかった控えめな処女マンコは自ら口を開き、濡れきった極上のピンクの肉襞をひくつかせてメギドの指をぱくぅっと咥えている。
全身を汗で滑らせ、髪も服も濡れて肌に吸い付いていて女の体の線を見せつけてオスを誘惑する。
清楚な美しき処女姫ラステルの瞳は、オスを求めて熱く蕩けた目でメギドを虚ろに見つめていた。
「欲しいか？ラステル」

「っ♡そ、それ…はぁ…♡」
湿ったズボンをずるずると下ろされるラステル。股間の所は特に湿り気が強かった。
形だけの力なき抵抗をしていたが、ぷりんっとした尻を少し持ち上げてズボンの脱がされるのを無意識に手伝ってしまう。
「あ…♡」
メギドが肉棒を見せつけていた。
ラステルの視線が釘付けとなる。
(ナウシカさんとの…あの時に見た…メギド様の…♡はぁぁ…♡あ、あんな…なの？♡間近で見ると…あんな凄いなんて♡)
――ぐちゅんっ！
「っんあっ!?♡ひっ…だ、だめ…です♡メギドさまぁ…♡割れ目…それで、くちゅくちゅ、しないでぇ♡」
熱い肉棒の腹が濡れそぼる初心陰唇を擦る。
――ずりゅうううううう、ぐちゅっ、ずりゅうううううう、ぐじゅうう
「っ!!!♡♡はっ！♡ひぃ♡いっっっ♡♡あっ♡あっ♡そこっっっ!!♡そこぉっ！♡こすらないでえええええええっっっ!!?♡♡」
皮被りのクリトリスが肉棒の腹に潰され擦られて、ぷりゅっと包茎クリの皮が剥かれてしまうとラステルは脚を宙に投げ出してピーンと張って仰け反った。
一瞬で甘イキさせられ、その瞬間、処女膜の奥から白く濁った本気汁を控えめに吹いてメギドのペニスを彩った。
「ひっ、いっ♡はっ♡はっ♡はっ♡ん…♡うっ、うぅぅ、ん…♡ゆ、ゆる、して…♡メギドさま…♡も、ぅ…♡」
やめてください。その言葉がラステルは紡げなかった。
乙女の体は全身でメギドを求めている。若い肉体は性に完全に目覚めて、王家の姫は無責任な婚前の子作りを子宮の奥底から求めていた。
ナウシカがされていたような事を自分もされたい。
ナウシカのように、女の花園から愛する男の白い濁り液を無様に垂

れ流したい。
ラステルは雌の本能でそう願い、疼いていた。
「こ、このまま…♡子作り♡してしまうなんて…♡はぁ、はぁ、はぁ♡そんなの、いけませんわ♡メギドさま…♡」
処女が自分から尻に手を回して、誰にも手を付けられていない肉色の襞を指で見せつけた。目の前のオス…メギドにだけに。
メギドはにやりと微笑んで蕩けきった処女マンコに滾るペニスをゆっくり挿入れる。
融けて解れた処女マンコを味わうように、ゆっくりとだ。
――じゅぶっ♡じゅぶぅぅぅぅぅ♡
「あっ♡あっ、ぁっ、あっ♡は、はいって…♡くるぅ♡いけないのに…♡わたし、姫なのに…♡結婚前に…あっ♡子作り、許しちゃうなんて♡」
ラステルが「あっっっ！♡」と一際鋭く、しかし蕩けた声を出した時、処女膜は肉棒に突き破られた。
乙女の身に、乙女でなくなった痛みが一瞬駆け巡るがその痛みは次の瞬間にはもう、それを上回る淫らな痺れに塗り潰される。
「ひぁっ！♡あああっ！♡あっっぃぃぃぃ♡熱い、ですぅ♡あっ♡あっ♡メギド、さまぁ♡ああっ♡だめっ♡あああっ♡そんなっ♡突いちゃ♡だめぇぇ♡」
――ぐぽっ、ぱんっ、ぶちゅっ、ぱんっ、じゅぢゅっ、はんっ
メギドの肉棒がラステルの、つい数秒前まで処女だったマンコに無遠慮に抜き差しされる。
ラステルはすでに激しいチンコの出し入れで感じていた。
マンコから卑猥な音と淫液を飛び散らせ、白濁本気汁を垂れさせ、メギドのペニスに塗りたくりながら背をしならせて細い顎を仰け反る。
「ああっ！♡あんっ♡あんっ！♡あっ♡あっ！♡だめっ♡だめっ♡ああっ！♡きもち、イィっ！♡ああっ！♡」
――ぱんっ、ぶじゅっ、ぱんっ、じゅぼっ、ぱんっ、ぐぢゅうぅ
ラステルの脚はしどけなく開きオスが侵入しやすいように自らし

ていた。
もう清楚なペジテの姫はいない。
快楽に瞳の光は塗り潰されて、娼婦のような嬌声をあげてメギドに組み敷かれていた。
「ひぃいっ♡ひっ♡ああっ！♡あ〝あ〝っ!?♡」
気持ち良い所全部を男の肉棒がぞりぞりと抉りあげていく。
「こんなっっ！♡わ、わらひ♡初めてだったのに♡あっ！♡処女だったのにっ！♡あっ、あああああっ♡きもちいいっ♡メギドさまっ♡きもちいいっですぅ♡」
長い黒髪を振り乱し、背を反らし、メギドの背に両手を回し爪を立てて必死にしがみつくラステル。
脚は指先でシーツを掴んで、筋を痛めてしまうのではないかという程突っ張っていた。
――ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！ぐじゅっ！ぱんっ！ぼちゅっ！ぱんっ！
「ああっ！♡あ〝あ〝あ〝っ!!♡あ〝ーーっ！♡あ〝ぁぁっ、あ〝あ〝っ！♡わた、しっ！♡また、あっ、白く…！♡あ〝っ！♡目の奥、ぱちぱちって♡っ！♡っっっ!?♡」
メギドとナウシカの情事を覗き見て得たオナニーの絶頂。
それを軽く上回る大きな快楽が、絶頂の大波が清楚な姫の全部を飲み込んでいった。
「そういう時はイクって言うんだよ、ラステル…言ってごらん。もっと気持ちよくなれる」
悪魔の囁きにラステルは必死に頷いて、涙を湛えた薄目でメギドの顔を見た。涙と快楽でもうまともに見えていないが、それでもメギドの顔を見ただけで、ここにきて更に心がときめいた。
「っっっ!!!?♡♡いっっっくっっ！♡イキます！♡わたしっ♡メギドさまっ♡イクっ♡イクっ♡イクぅ♡イっクぅぅ♡イクっイクイクイクっっ！♡あ〝あ〝あ〝あ〝っっっ!!!!!♡♡♡」
教えられたまま、メスの降伏（幸福）宣言をメギドに晒してラステルはオナニーとは比にならない本気絶頂を初セックスで貪っていた。

同時にメギドの熱い精液が、未使用の処女子宮をどぷどぷと満たしていくのをラステルは感じる。
（っっっ！♡あ…あつい…♡おなか、奥ぅ…♡あ、あ…あ♡メギドさまの、こだね…♡わたしの、膣内（なか）に…まかれちゃった…♡）
世の中、男女の色恋沙汰の本が無数にあるわけだとラステルは悟る。
ラステルは、愛しい人との睦み合い…セックスが、子作りがこんなにも気持ちイイなら人は恋に夢中になり愛を説くのは必然だと思った。
この夜、ペジテの姫は大人になったのだった。

クシャナ来訪

クシャナは困惑し驚愕していた。
ただの辺境の片田舎。
そう思っていたが、コルベットで空から谷里を見下ろせば、主だった道にはランプの街路灯が設置されていた。
（…！ガス体を微電池で輝かせるガス灯だと!?王都トラスにもあれだけ整備されたものはそう無いというのに、こんな田舎で！）
クシャナだけでなく、親衛隊の面々も窓から眼下を覗きしきりに指差しをして驚きの声を小さく漏らしていた。
「クシャナ殿下…！あれを…」
「む…？」
「畑を…機械がゆっくりと進んでいます…！あれは、耕しているのではないですか!?」
親衛隊の一人に示された方を見れば、確かに畑の上をトリウマ無しの馬車がゆっくりと進んでおり、馬車が通り過ぎ後は畑の土が掘り返されているように見えた。
クシャナの切れ長の瞳が大きくなった。
「…！こ、これが風の谷…！規模は我がトルメキアの辺境都市にすら遠く及ばぬ。しかし、これ程生きた古代技術が充実した町はかつて見たことがない…！」
少し前に滅ぼした工房都市ペジテは、５００年間地中を掘り進めエンジンや古代技術を活用する最先端の技術力を保持した都市国家だったが、それでも私生活で機械の恩恵を預かるのは王家と一部の上流階級…工房士ぐらいだ。
農人達までが機械で田畑を耕すなど聞いたことが無い。
当然、大国トルメキアの王都トラスでもそんな光景は見たことが無い。
なのに辺境の片田舎の風の谷では、農人達は皆機械に跨って田畑を耕している。
それを思った時、クシャナはゾッとした。

風の谷が小規模ながら非常に充実した古代技術を有していた事もだが、なによりも…トルメキアが方方に放っている間者はペジテが秘匿した巨神兵と秘石の情報さえ掴んでみせたのに、この風の谷がこうまで古代技術を保有し、使いこなしている等という情報は一切掴めていなかったからだ。

トルメキアの間者を秘密裏に始末する術…或いは間者の目を掻い潜る術がこの風の谷にはあるという事だ。

(…風の谷は、ただの田舎の小国ではない！何か…何か秘密がある…！)

ペジテの巨神兵にも負けぬ秘密の香りを、クシャナの鋭利な鼻は感じ取る。

そして、心に差していた魔が急速に膨れ上がり強固になってくるのも同時に感じた。

元々密かに決心していた事だ。

その秘密事は、クシャナの親衛隊も、直々に鍛え上げた第3軍の幹部将校も知っている。恐らく一兵卒までも。

〝巨神兵の力を我が者にし、王国を奪った父王と兄皇子達に断罪を。正統王家の血を引く母殿下の心を害した簒奪の毒蛇に正義の鉄槌を〟

(この風の谷と、ペジテの巨神兵があれば…トルメキア転覆…決して不可能ではない！)

クシャナは、兜上部に展開していた鉄仮面(フェイスガード)を下ろして美貌を隠すと、親衛隊達と蟲使い達に着陸に備えるよう通達する。

重コルベットは、風の谷の塔から発せられる〝検疫せよ〟の発光信号を当然のように無視すると、そのまま谷の合間の開けた田畑目掛けてぐんぐん高度を下げた。

そして重コルベットが風の谷の東…畑の上に無遠慮に強行着陸する。

風の谷に前触れも無く不躾に来訪したというのに風の谷の反応は静かだった。

この時期は種蒔きも終えたばかり。そんな畑に強行着陸すれば普

通は大騒ぎになってがなり立てるだろうに、それが無い。
だが無視されたという訳ではないらしい。
完全に無視されてはトルメキアの第４皇女と親衛隊の権威が型無しだ…とクシャナは少しホッとした。
こちら目掛けて十数人の男が駆け寄ってくるのが分かった。
後部ハッチから堂々と降りてきたクシャナ。
だが、それにしても谷の者らの反応に不気味なものを覚える。
（…気持ちの良い風……良い土地だ。しかし検疫要請を無視し、しかも畑に降りたというのにこの静けさ。…この谷の者達は感情が無いのか？）
種蒔きを終えたばかりの土地に検疫無しに着陸するというのは、つまり腐海の毒を畑に持ち込むかも知れないという事だ。土地を汚される等、宣戦布告に等しい凶行であるとクシャナも理解している。
なのに、目の前まで来た風の谷の男達は、怒鳴るでも無くただ静かにクシャナと親衛隊の前に立っていた。
ぼそぼそとヒゲ豊かな逞しい男達が、先頭の若い偉丈夫に耳打ちしている。
「私は風の谷のジルの子、メギド。コルベットの紋章を見るにトルメキア王家親衛隊の方々と見受けるが、蟲使いまで伴ってこの谷に何ようか」
「我らは偉大なるヴ王の命により、ペジテの謀反人を追ってきた。蟲使いはコマンドとして、我が軍に編入された兵である。この谷の探索を認めよ！」
クシャナはちらりと、彼らの背後の谷の者らの動きを見る。
青い腐海装束を纏った少女に率いられた、火炎放射器を背負った１００人以上の者が、コルベットが持ち込んだ腐海の胞子への対策に動き出しているようだった。
（…迅速過ぎる。予測していたのか……）
クシャナが仮面の下からメギドをジッと見る。
メギドは、まるで仮面の下の視線を分かっているかのように真っ直ぐクシャナの目を見返してきた。

「探索は……しないで宜しいでしょう」
「なに？それはこちらが決める事……貴殿は早く我らの探索を認め、そこをどけばよい」
「謀反かどうか…では、ペジテの姫に聞きましょう」
「っ!?な、なに!?」
クシャナが意表を突かれた。
メギドの背後、屈強な城オジ達の輪の中から一人の娘が現れる。クシャナも少しだけ見知っている、ペジテで取り逃がした女であった。
「ラ、ラステル姫！」
驚くクシャナに、ペジテの姫は煮えたぎる感情を秘めた目を向ける。
「一瞥以来…ご無沙汰しております、クシャナ殿下。ペジテを滅ぼした折…御挨拶もせず御前を去った事、お許しください」
「…っ！」
白々しいまでのラステルの丁寧な物言いが、逆にラステルの秘めた怒りを物語っている。
クシャナも、そして親衛隊の面々も少しの動揺を露呈してしまう。
（やはりラステルを生きて保護していたのか、メギド。しかし…こやつ、何のつもりだ…!?ラステルをこちらに引き渡すつもりなのか…？）
「メギド殿…これはこれは助かる。既に謀反人を捕えてこちらに引き渡してくれるのだな。おい、引き取れ」
クシャナが兜の仮面を上げて美麗な素顔を晒し、心の籠もっていない謝礼をする。指を鳴らせば親衛隊がメギドの側まで行き…ラステルへ手を伸ばそうという時、メギドが親衛隊の腕を掴んだ。
「こやつ！」と振り払おうとした親衛隊だったが、突然、ぐるりとその場で一回転して頭を打って「むっ、う」と唸って昏倒してしまった。
「…！」
クシャナが眼を見張る。
（今の動きは一体何だ！重装甲を着た親衛隊が、あんなにあっさりと…片手で投げ飛ばされただと！）

メギドは笑った。
「辺境一の剣士ユパ・ミラルダ直伝の体術ですよ。…ラステル姫は私の妻になる予定の女だ。無体は止めて頂きたいな」
「豪胆か愚かか…謀反人を妻とするか！」
「謀反人ではない。そうだよね？ラステル」
「はい」
「ほら、本人もこう言っている」
「ふざけるなっ！」
クシャナの怒りを汲んで、親衛隊の一人が叫びながら抜刀し、メギドに迫る。
「親衛隊に手をあげ、姫殿下を愚弄するふざけた態度！許せん！一騎打――――」
そして迫った所で、バチリッと誰の目にも分かる放電現象のようなものの直撃を受けてガクリと膝から倒れて突っ伏した。
それを見て、蟲使い達も、使われる蟲も怯え、それ以上メギドに近づくのを止めた。「森の人と同じだ」等と小声でヒソヒソ言い合って、腰が引けている。
（チッ…役立たずめらが。所詮、捜し物の為に組み入れただけの連中だ…仕方あるまい）
蟲使いらに内心で悪態をついて、クシャナは目の前の男を睨みつける。
しかしメギドは全く相争うような態度を見せず、相変わらず薄ら笑いを浮かべてクシャナの仮面の下の瞳を見つめるだけだった。
「ラステルに拘る必要はない。お探しの物は、既に私が受け取った」
首からかけ、服の下に仕舞っていた秘石のネックレスを見せつける。
「それは…！」
クシャナの背後で親衛隊がざわめいた。
「…ならばその秘石、私に寄越せ」
クシャナが要求すれば、メギドは愉快そうに微笑んだ。
「条件次第では考えよう」

「条件？条件だと？…メギド、お前が私に条件をつけられるのか？我がトルメキアと、お前の風の谷…国力差を考えればそのような口の利き方は出来ぬはず」
「フフ…。そう思っていないのではないか、クシャナ殿は？」
「なに？」
「空から見ただろう？ここ風の谷の様子を…どう思った？」
「…」
　クシャナは少し言葉に詰まる。
「大国トルメキアの白き魔女ともあろう者が初めて知っただろう？自国の属国にすぎぬ風の谷が、ここまで繁栄しているなんて。ただの田舎だと思っていた…そうだろう？」
「……そうか。貴様が間者を始末していたというわけか」
「まさか。始末した等と人聞きの悪い。私は説得しただけさ」
「説得…？フッ…成程…あの怪しき技であろう。超常の力…聞いたことはある」
　クシャナが自嘲気味に微笑んだ。とんでもないダークホースがいたものだ、と。
「この谷の機械の数々…これもお前か」
「ああ」
「どういう人間だ、貴様」
「知りたいなら…これも条件次第だ」
　またも抜刀仕掛けた親衛隊をクシャナが抑える。勝てぬと知っても不躾な態度の男に挑もうとするのは、さすが音に聞こえた親衛隊である。忠誠心は並みではない。
　クシャナは部下達を抑え、そして蟲使い達をコルベットに退がらせると、メギドを見て微笑んだ。
「あくまで私と対等のつもりか。……よかろう、条件を言え」
「私の妻になってもらいたい」
　待ってましたとばかりにメギドは笑顔で言った。
　その笑顔は今までのような、どこか無感情で底知れぬ笑みではなく、屈託のない自然な笑顔だ。

クシャナは一瞬キョトンとした顔になり、そして段々と吹き出しそうになる。怒りが湧き上がるよりも、面白いという感情が強い。
「…っ。く、くく…私を妻に？」
親衛隊がまたまた抜刀しかけたが、クシャナがまた制する。
「トルメキアの第４皇女を…白き魔女を妻に娶るというのか？風の谷如き小国の王子が？」
「悪い話じゃないだろう。私と秘石が手に入る」
「ククク…結納の品は秘石か…。フフフ…アハハハハ、なるほど、そう思えば悪くない」
冷笑を浮かべて鋭い目をメギドへ向ける。だが向けられたメギドは至って真面目な顔でそれを受け止めた。
「他にも、結納はあるんだ」
「…ふむ。なんだ？申してみよ」
「生きてここから帰れる。つまり貴方達の命」
「…っ」
クシャナの片目が細まる。
「そちらが調査した通り、私はペジテのフリッグを無事に着陸させ１００人以上のペジテ人を救助した。今、この谷に移住を決意したその者達がいる。私が許可を出せば君達を皆殺して良いとも言ってある」
これはメギドの嘘だ。殺してはならないと厳命してある。
ペジテ残党の女子供達の中には、父、夫、兄弟、子供らをペジテ防衛戦で殺された者ばかりであるが、風の谷に移住する条件としてトルメキアへの復讐は二の次にする事を言い含めていた。
ここでトルメキアへの、クシャナへの復讐をしつこく声高に言う者あれば、逆にその者こそメギドに追放か、あるいはそれに等しい処分を受けるだろう。
復讐よりも、この風の谷にペジテの香り（命脈）を残し、そして風の谷の為に身を粉にして働く…今は風の谷に受け入れられる事が最優先であると、ラステルもその点は承知していた。
しかしペジテ市民が復讐を二の次にする覚悟をしている等知らぬクシャナは、メギドの恫喝を中々恐ろしいと考える。

復讐者１００人をけしかけられれば、クシャナと親衛隊と言えど死ぬしかない。
「…そのような事をすれば本国が黙っておらんぞ。メギド…この風の谷を第２のペジテにする覚悟があるのかな？」
「クシャナを殺したくはない。しかし、ここで貴方が〝うん〟と言わねば…私も行き着く所まで行き着こうと思う」
「どこまで行こうというのか」
「巨神兵を我が物にし、土鬼と結んでトルメキアを滅ぼそうと思う」
白き魔女の瞳が大きくなった。
親衛隊達も大きく驚いたのが、兜の上からでも分かる。
メギドは優しく微笑んだ。
「実は、私には予知夢の類の力もある」
「予知夢…」
有り得ぬ、と一笑に付す事がクシャナにはもう出来ない。
メギドは、親衛隊に触れること無く、微動だにせず彼らを倒してしまった。１人目は凄まじい体術で浮かせて転がしたのだろうが、２人目は明らかに違う。超常の力だ。
「だから、今回の事も予期して事前に色々とこっそり動いていた」
メギドの言葉で、クシャナは合点がいく。突然やってきた自分達への対応が余りに落ち着いていたのもそういう事らしい。
「随分、細かに予知したものだ。私がコルベットで風の谷に乗り付ける等という細々とした予知夢を視たのか？お前は…。普通はこういう予知夢は大雑把な未来を視ると相場が決まっているものだが」
「それだけ私の力が優れていると思って貰いたい」
自信過剰というわけでもなく、ただ事実としてそうだと淡々と告げるメギドにクシャナも唸り、そして薄く笑う。
「…その並外れた超常の力、そして掌中の秘石……なるほど。打倒トルメキア…不可能ではなさそうだな。先の言葉からすると土鬼にも渡りをつけているのだろうな」
にこりとメギドは笑って、首を横に振るでもなく頷く事もしない。
メギドの後ろに、じっと黙って立ち事の成り行きを見守っていたラ

ステルが、つけ添えるように呟いた。
「メギド様は、蟲に襲われ墜落するフリッグを…その御力で浮き上がらせ、蟲を言葉だけで追い払いました。そのメギド様が守る風の谷…ペジテのようにはいかない」
呟くようであったが力強い。ラステル姫のその言葉はクシャナの耳にしっかりと残る。
(船を、持ち上げる…?そんなことが…いや、本当にこいつなら出来るのかもしれん。……メギドならば…こいつがいれば、もしや…本当に)
クシャナは、幼い頃に父ヴ王に暗殺を図られた。
クシャナの母は、娘を庇って毒酒を煽って心が砕かれ廃人となってしまったのだ。
真犯人はヴ王ではなく、兄達かもしれないが、とにかく父も救いの手を差し伸べてくれなかったのだから同罪だ。
それに、正統王…ヴ王の先代の王の血を引くクシャナを疎ましく思っていたのは、父も同じだろう。
ヴ王は宮廷の権力争いを制する為に、先代王の唯一の娘…つまりクシャナの母を後添えとしたが、政敵を排除し自分の王権を確立させてからは隠れたカリスマを持つ妻と、そして妻が生んだ己の娘を疎ましく思うようになる。
先代王の血を引くというだけでカリスマを持つだけなら、まだヴ王は許したかもしれない。だが、クシャナは成長するにつれ利発さと、器の大きさを示しだした。
ヴ王が止めようと思えば、暗殺を止めることなど容易の筈。
クシャナにとって、ヴ王も兄達も、全員が復讐の対象なのだ。
鍛え上げ、自分を慕い、例え反逆の狼煙を上げてもついてきてくれるだろう最強の第3軍が取り上げられている今のクシャナには、メギドの存在は非常に魅力的に写っていた。
(…或いは、メギドは私の心まで、その力で見透かしているのか…?)
ここでメギドの提案に乗るのは、そのまま反逆の道に突き進む事になるのかもしれない。

クシャナは即答出来なかった。
それを見透かしてメギドは更に言葉を重ねる。
「ここで私如き、小国の王子の妻となれば…お前に虐げられたペジテの人々の溜飲は多少下がるだろう。傍から見れば、大国トルメキアの第４皇女が小国に嫁ぐのは後継者争いからの脱落と没落に他ならない」
「…」
クシャナは黙ってメギドの言葉に耳を傾ける。
「だが実態は、私の超常の力と、この風の谷が密かに持つ古代技術と、そして秘石を得る。トルメキアの間者達には私から情報を渡しておくよ。クシャナは小国の王子の奸計に陥れられ手籠にされて覇気を失い愛に溺れている、と」
貴様っ！と親衛隊がまた言葉を荒げたが、柄に手をかけるまではしない。親衛隊達も、油断させるために敢えて醜聞を巻く事の有意義さは知っている。
クシャナは、ジッと自分を睨み続けているペジテの姫を横目で見てメギドに問う。
「…後ろのラステル姫も納得済みか」
「もちろん」
「フッ、フフ…故郷を滅ぼされたのは数日前。その恨みを忘れられるものか…復讐は人の心に最も深く根付く。ラステル殿は、同じ男の妻という立場になれるのか？私と並んで褥に並べるのか？どうだ、ペジテの姫よ」
クシャナの物言いにラステルの眉は険しく歪む。
しかし「メギド様がそうお望みなら」と、小声ながら強く言い切った。
（…よくもまぁ、この短期間に。ペジテの姫君をこうも手懐けるとは…）
クシャナの、メギドという男への興味がまた強まる。
メギドはラステルに微笑んでから、またクシャナの目を見据えた。
「ラステルもペジテの人々も恨みは忘れない。だが抑えることは出来

る。私ならペジテの人達に恨み以上の喜びを与え、抑えられるだろう…それに、ペジテ襲撃はヴ王の勅命…とてもクシャナには断れない事だと説明してある」
「…お前はどこまで先回りしているのだ。こうなったら、既にトルメキア本国にも、先程の事…既に言ってありそうだな」
「実はその通りなんだ」
「…」
半分、ふざけて言った事が当たっていた。クシャナは絶句する。
「もう、私の洗脳(説得)に応じてくれた間者にさっき言った事…伝えるよう頼んで見送った」
クシャナは思わず膝から力が抜けて崩れそうだった。しかし踏ん張り、そして自分がどういう状況に置かれているのかを忙しく思考しだした。
そして大笑いした。
「…はは、はっはっは…ハッハッハッハッ!そうか…ここに来た時点で私の負けか、メギド」
「そうだ。秘石を求めるあまり、そんな少ない手勢でペジテ残党がいるかもしれないここに来たのが軽率だ」
「飛んで火に入るなんとやら…か。フフ…ヴ王にも負けぬ野心家だ。トルメキアを滅ぼし、風の谷の時代を求めるか。…貴様の妻になるのも手かもしれぬ」
トルメキアが滅びる…それも良いとクシャナは思い始めている。そうすれば、醜い兄達も…ヴ王も滅びる。
母だけは、あのような心に成り果てても助けたいと思うが…。
こうまで先読み合戦で負けては、打つ手は無いとクシャナも理解した。
(超常の力の先読み…全くもって厄介で、恐ろしくも魅力的な技だ。……これも、私がメギドを虜にすれば我が力となるという事!)
どこか悟った、自嘲気味な笑みを浮かべる一方、心で野心の炎が萎えないよう薪を焚べるのも忘れない。
親衛隊がクシャナにすがりつく。

「姫殿下！こ、このような怪しき術を使う男に…本当に嫁ぐのですか!?」
「殿下ともあろう方が、こ、こんな田舎の弱小国の王子などに……！」
「すぐに戻れば、ヴ王陛下にも弁明の機会が……！」
　重装甲の下で顔を青くしているだろう事が容易に想像できる声だ。
　だがクシャナは乾いた微笑みを浮かべるしかない。
「どうやって戻るのだ？見よ」
　腐海の胞子を燃やす為のセラミック製のタンク、火炎放射器を背負った者達の中に、銃を持った者達が紛れて遠巻きに円陣を汲み、構えて狙っている。
「あぁ……！」と親衛隊達が驚いて、マントの中の長銃に手を伸ばそうとした所でクシャナに止められる。
「先程メギドが言っただろう。あ奴の腕の一振りで我々は皆殺しだ。ここで無駄に命を落とす事もあるまい。メギドの結納の品…貰い受けよう」
「し、しかし」
　尚もすがり説得を重ねようとする親衛隊達に、クシャナはピシャリと言う。
「お前達も知っていよう。元々…兄達は私を陥れようとしていた。例え秘石を持ち帰ったとしても…私に未来はない」
「ひ、姫殿下…」
「ならば、ここで奴の甘言に乗って賭けに出るのも悪くないかもしれん。…それに、案ずるな。私は奴に傅く気はない。奴が私に傅くのだ。手籠にするのは私の方だ」
　クシャナは自信たっぷりにそう言い切った。
　敬愛する主君がそう言うならば…と、ようやく親衛隊達も抵抗を諦める。
　抵抗を諦めたクシャナ達を見、メギドが合図すると、直様、待っていた消毒隊が駆け寄ってコルベットとクシャナ達に白いモヤを思い切り掛け始めた。
「…これは？」

一瞬、クシャナは自分達は焼き払われるのではないかと思って身構えてしまった。メギドに尋ねる。
「これは消毒薬だ。これを掛けられた胞子は活動を鈍らせ、根を張る前に寿命で死ぬ。火で燃やすよりも簡単で安全だ」
「そのような物、初めて聞いた……これも、お前が関わっているのだろうな？」
「ああ」
自分の身一つでメギドを買えるなら、案外これは…本当に安い買い物かもしれないとクシャナはほくそ笑む。
（私を抱きたいというなら抱かせてやるさ…。そして、房事で貴様を屈服させれば…貴様と秘石、どちらも私の意のままになる…ククク）
王族で、この美貌で、男だらけの軍の中に身を置いて、それでも齢25にしてクシャナは処女だった。男とのベッドの作法等知らないが、しかし無駄に自信だけはある。
幼い頃、父と兄達の裏切りで母の心を殺されたクシャナは、根底で男への不信感を持っている。男に恋する等有り得なかった。
また、下手に男と肌を重ねれば、性病や妊娠のリスクは常に付きまとう。王家の女として、婚姻前の妊娠は破滅（スキャンダル）だ。兄達が漬け込む隙に他ならない。
しかし肉体は成熟し、女盛りの中にあって、健康な体は溜まるものは溜まってしまう。クシャナが普通の町娘として生まれていたなら、既に結婚もセックスも済ませて子の一人や二人に囲まれていても可笑しくないのだ。
厳しい軍務や訓練の後は、火照った熟れた体を持て余し、夜な夜な自慰で満たす生活を長年続けていたので（オナニーに関する）性技だけは熟達していた。
だから、配下の軍人達の性的欲求に関しても理解しているのだ。
その捌け口になる娼館を都市攻略戦などでは保護もするし、近隣の市街から充分な手当を払い娼婦を陣に招く等…配下が略奪暴行等に暴走しないよう心掛ける事も出来ていた。
娼婦に軽くあしらわれる軍人を何人も見てきたからか…クシャナ

は〝同じ女である自分も、男を閨でコントロール出来て当然〟だし〝（オナニーの）性技に長けた自分は男を屈服させられる〟…そういう思いがあったらしく、それが無駄な自信に繋がっているらしい。
　消毒のモヤに包まれて、クシャナはメギドにようやく頷いた。
「わかった。貴様の妻になってやる。…だが、約束は守れよ？貴様の力も、秘石も私のものだ。…そうだな、まずはその首の秘石を貰おうか」
「フフフ…私の力も秘石も、クシャナが使える権利がある、というだけだよ。使いたかったら私を説得するなり、この首飾りを私から取るなりしないと。一度取られれば、秘石はもうクシャナのものだと認める。私も、一度でも参ったと言えばクシャナに逆らわない。風の谷のジルの子の名に掛けて誓おう」
　クシャナの顔がムッとなる。
「言ったな？」
「ああ。その代わり、お前にも誓って貰おう、クシャナ」
「何をだ」
「参りました、と私に言ったら…身も心も全部私の物」
「フッ…面白い。良いだろう。このクシャナの名にかけて、私も誓おう。……では、首飾りを取るのはいつでも良いのだな？」
「ああ。寝てる時でも良いし、水浴びの時でも良いし……セックスの時でも良い」
「っ！…フン。ならば簡単だな」
　クシャナは己の美しさには一定の自信はあった。肉体も健康で、男が好みそうな大きな胸と尻をしているという自覚もある。
　この美貌を使えば、男などあっという間に手籠に出来る。メギドは今夜にでも自分に傅く事になるのだ。そう確信していた。
「ならば今晩にでも、両方を貰うとしようか。体力には自信があるのでな…数時間後には貴様はへばって、私に参ったと言っている。……秘石も貴様も私の手の中だ」
「ん？今夜？祝言をあげる前に、もう体を許すのか？トルメキアの第４皇女ともあろう御人が」

「この体一つで秘石が手に入るなら安かろうよ…いいからさっさと支度をしろ。貴様の部屋でいいな」
「……そちらがそれで良いなら」
クシャナはニヤリと笑い、メギドもニヤリと笑った。

クシャナ、やられる　★

「あっ！♡っぅ！♡んあっ!?♡ああっ！♡あああああ!!♡もっ、やめ…ろぉぉぉっ！♡」

クシャナが壁に手を付いて巨乳をぶるんっと揺らす。額飾りを付けたままの美貌が悦楽に歪む。額の緑の宝石が、垂れた前髪と一緒に揺れている。

涙に濡れる切れ長の瞳と、八の字に歪んだ細い眉が、クシャナが性感に翻弄されているのを如実に語る。

まだ手足にも鎧を付けているのが、余計に勇ましい普段のクシャナを犯しているようでメギドを興奮させた。

――どちゅんっ！

「っっ!?♡おぉっ!?♡そ、こぉぉっ!?♡ひっ、いいいイィッ!?♡やめっ！♡てぇぇぇ！♡あっ！♡あ〝っ！♡あっ、あっ、んんっ!!♡っっっ！♡あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、〜〜〜〜ッッ!?♡♡」

すっかり子宮口まで蕩かされてしまい、勢いよく突き進んできたペニスが、クシャナの弱点だらけの膣壁をぞりぞり削って新しく開発された大弱点（ポルチオ）に突き刺さる。

数時間抱かれっぱなしで、すっかり腰砕けになったなったムチッとした尻を、男のビンビンになった怒張で膣内から支えられていた。

「クシャナっ！私に参ったと言え！言ってくれ！私だけのモノになれ！クシャナ！愛しているぞ！」

「あっ♡あああああっ♡わ、わらひ…♡わらひ、の…負けだぁっ♡だか、らっ♡もうっ…！♡許して、くれぇぇ♡あっ♡はぁっ♡ひぃぃ♡もう、まいりっ、ましたぁっ♡まいりましたってぇ♡ひっ！♡ぎっ！♡イィっ！♡私、もっ♡愛しているっ！♡メギドぉ！♡」

口の中にメギドの指を突っ込まれ、唇を横に伸ばされながら、クシャナは呂律の回らぬたどたどしい言葉を紡ぐ。

クシャナのベロが唇から垂れて、勇壮な白き魔女とは思えぬ情けない顔をメギドに晒した。

――ぐちゅっ！ばちゅっ！ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ！

「んんんっ！♡んうぅぅっ♡もう、やめっ、ろぉ♡降参したぞっ♡もうっ♡まいったって♡言ったぞぉぉっ、おっ、おっ♡あぁっ！♡あっ♡あ〝あ〝っ!?♡」
「お前は誰のものだ、クシャナ！」
メギドが言いながら腰でのの字を書いてクシャナの膣内を掻き回す。
その度、クシャナは勇ましい美貌をぐしゃぐしゃにして、真っ赤な顔で喘ぎ悶えた。
「ひっ♡いいいいいイィっっ!!♡あっ！♡あああ〜〜〜っっ！♡あ〝あ〝あ〝あ〝っっ!!♡おまえのっ♡ものだぁぁっっ♡わたし、はっ♡あっ、あっ♡メギドだけのぉ、ものっ、だぁッッ！♡♡」
ガクンガクンと腰を跳ねさせて、トルメキアの白き魔女は男に完全敗北を決めていた。

―
――
―――

◆遡ること、数時間◆
湯浴みもせず、クシャナは鎧姿のままメギドの部屋に来ていた。
親衛隊達は、部屋の前ではなく城の一階大広間で待たせてある。
メギドがクシャナを害そうとした時、例え親衛隊が側に控えていても意味はないと、クシャナが「大広間で適当に寛いでおけ」と待機させたのだ。
とはいえ、少しは〝初体験〟での音なり声なりを聞かれたく無いという、微かな乙女心があったのかもしれない。
「鎧をつけたまま男と寝るのか？」
メギドが笑って言うと、クシャナは冷たく笑う。
「トルメキア王家は毒蛇の家だ。寝る時も油断ならんのさ」
ベッドに腰掛け、裸になったメギドが隣のスペースをぽふぽふ叩くと、クシャナは表情を変えぬよう努めながらドッカと腰掛けた。

ギシッとベッドが軋む。
「さて、まずはどうするのだ」
余裕を保った表情で悠然と言うクシャナ。
メギドは黙って背後に回り込むと、クシャナの首筋に鼻を埋めてたっぷり息を吸った。
「〜〜っ」
ゾクリとしたくすぐったさがクシャナを襲う。
(に、臭いを嗅がれるというのは……こんなにも、は、恥ずかしいものだったとは…!)
うなじを男の鼻先が這い、舌でぺろりと味見をされると更なる痺れと悪寒が勇敢な生娘に走った。
「く…そ、そんな所を舐めるなっ!変態か、貴様」
背後の男へ睨みをきかせた瞬間、ネックガードとマントの留め金が床に落ちてガシャリと音を立てる。
「な…!」
(こいつ…い、いつの間に私の鎧を!?)
いったい何時外されたのか分からない。
「お、おい!貴様…少し待たぬか」
やや焦りを見せて、肩に置かれた男の手を窘めようと、ガントレットに包まれた自らの腕を添えた。
「クシャナ、キスをしたことは?」
「む…な、ない。それがどうした」
「このまま流れでクシャナのファーストキスを奪うのはつまらない。よく意識しろ。クシャナの初めての相手は、このメギドだ」
「…くだらん」
冷たく言ってそっぽを向くが、そう言われた事で逆に意識し始めてしまった。
(く…なんでもない事だと思っていたのに…メギドめ。余計な事をし――っ!?)
「――んむぅッ!?」
細い顎を掴まれ、横を向かされて口を塞がれる。

――ちゅ、ちゅる、ちゅっ
「んっ、んんっ、んむ、ぐっ…ぷぁっ、き、貴様…！いきなりな――んんっ！んむぅっ！」
背後からキスをされ、逃れられない。
（こ、これが…キス、か……。く…他人の一部が…私の中に……っ）
これが自分の人生で初の、他者との性的接触なのだ。事前に、クシャナはそう意識させられてしまって、妙な気恥ずかしさを感じて心臓が僅かに高鳴る。
ガラン、とまたクシャナの鎧が床に落ちた。
「んっ、んん…んちゅ…ちゅ…、ん……ぷぁっ、ふぅ…ん……」
メギドと口が離れ、クシャナの唇とメギドの唇が唾液の糸で繋がる。
クシャナの頬は少し赤い。
「んぅ?!」
男の手が背後からクシャナの胸を揉む。
誰かの手で形を変える乳房を、クシャナは不思議な心持ちで、どこか他人事のように眺める。
他人の体温で大きな乳房が温かい。温もりに安心出来てしまう。
（こいつ…またっ！いつの間に私の鎧を剥いだのだ……クソッ……ん……ふっ、う……温かい。…んっ、じ、自分でするのとは…また、違う感覚が…）
胴部の鎧は全部剥がれて、ベッドの横に転がっている。
中の白いドレスが剥き出しになり、クシャナの女の体の線が浮き彫りとなった。
胸の、大きな女の象徴が男の手で好きに揉まれている。
――むにゅ、むにゅう、むにゅ、さわさわさわ、すりすりすり、むにゅ、むにゅ…
「…っ、……ん…んっ、……っ、…う……」
トルメキアの全ての男性が望んだと言っても過言ではない、クシャナの鎧の下に隠された巨乳を揉みしだくという大望。
それが今、風の谷などという小国の、怪しい術を使う怪しい男の手

によって果たされてしまった。
　気付けば、またいつの間にかメギドはクシャナを膝に抱っこする形に持ち込んでいる。
（…っ。まただ…私が、全く気付かぬ内に…ん…うっ…また体勢が変えられている…。私が、それだけ意識が乱されているとでもいうのか…！）
「ちゅ……ん……ん、むぅ……ん……ちゅ、ちゅっ…じゅる……ちゅ……んん……んっ、ふぁ…ふぅ、ふぅ、ふぅ…」
　メギドの膝の間にすっぽりとクシャナの肉付きの良い尻が収まっていて、背後からは口付けと乳揉みの断続的な嵐。
　クシャナの鼻息が、長いキスのせいもあって荒くなった。だが、息苦しさだけが理由で荒くなっているわけではない。
　くすぐったさをより強くしたような…ドロドロと熱くジリジリと痺れる刺激が、ベロの先から奥へ、そしてそのまま喉の奥まで降りていく。
（鈍くて…重い痺れが……ん……喉を、伝う…な、なんだ、これは……）
　胸を優しく揉まれている。
　触り方は変化を繰り返し、クシャナを飽きさせない。
　根本から絞り上げる、まるで乳搾りのような動きをされると、クシャナの巨乳の先端は切ない痺れを持つ。
　――むにゅ、もみ、もみ、
　――ぴくん、ぴくっ
　揉まれる度、クシャナの腰が少し跳ねてくねった。
「んっ、ん、ん…ん…ふっ、んちゅ…、んっ、ちゅぅ…んっ、ちゅっ、ちゅ…んは…んっ、っ、っ…いっ、ん…」
（これが、キス……。男の手で、私の胸が……こ、こんなに、揉まれて……く、う……背中も、尻も……メギドと、密着して…）
　人肌の温もりが、薄いドレスと下着を通ってクシャナの肌に染みてくる。
　クシャナは、その暖かさが心地よいと思い始めてしまっていた。
（っ！い、いかん…このままでは…な、なんとか、私が主導権を――）

「――っ！ひっ!?いっ…、っ、あ！」
乳首をぐにぐにと摘まれて、その瞬間、クシャナは顎を少し仰け反った。
ずっと乳首を触れないように、乳房をやわやわと揉まれてもどかしい痺れが溜まっていた。そのもどかしさが、乳首をメギドに触られた瞬間に鋭く散って体中に駆け巡る。
「っ、んっ、ん、んっ、んんぅ、んっ、うっ、うっ、んっ、…ぅ、っ」
――さすさすさす
メギドの指がクシャナの乳首の表面を擦る。
クシャナは口を結んで声を堪えるが、艶めかしさが混じる息は漏れて隠せない。
――くにゅう、くにゅっ、さすさすさす
「うっ、んっ、んっ、んっ、ンッ、ンッ、んんんんぅっ、…や、めろ…」
メギドの指が乳輪と思しき膨らみを摘み、乳首の先端を穿るように擦る。その指の動きに合わせてクシャナの肩が揺れた。
（自分で、触るのと…こうも違うのか…っ、んっ）
メギドが、背後からクシャナの揺れる肩に顎を乗せて、耳に囁くように言う。
「まだ乳首が顔を出さないな…これはひょっとして…」
「あっ！」
肌触りの良い高級白ドレスの襟を掴み、広げて下に摺り下ろすと、ぶるんっとクシャナの乳房が溢れた。下着ごとズリ落ちてしまったらしい。いきなりきめ細やかな美麗な肌の乳房が剥き出しになってしまう。
咄嗟にクシャナは腕で隠したが、すぐにメギドに腕を掴まれて隠した巨乳の先端が男の目に晒される。
クシャナの顔は首まで紅くなっていた。
「…やはり、弄っても中々手応えがないと思った。陥没乳首か。トルメキアの勇者にして男共を恐れさせる白き魔女殿の卑猥な巨乳に、まさかこんなスケベな乳首を隠し持っていたとは」

「う、うるさいっ！」
この乳首が一般的でない事はクシャナも、侍女ら会話から察していた。
トラウマとまでいかないが、だから男に肌を晒すのを嫌ったというのもあるかもしれない。
「私は褒めているんだ、クシャナ」
「なに!?こ、こんな…胸を持つ女、どうせおぞましいと思っているのだろう！離せ！」
両手首を掴まれていながらクシャナは暴れる。
そんなクシャナを見てメギドは微笑み、そしてまたクシャナの耳元に口を近づけた。
フッと息を吹きかければ、それだけでクシャナの抵抗は弱まる。
「ひぅっ」
クシャナの耳をベロで舐め、キスをするように耳に舌を入れる。
――ぐちゅぐちゅぐちゅぅ、ぐぽっ、ぷちゅっ、れろっ、れろぉ、ぐちゅっ
「ひぁっ、あっ！ひっ！はぁっ、あっ、あぁ～～～っ、ひっ、くす、ぐったいぃ、から、やめっ、ろぉっ！」
クシャナの頭の中に直接、卑猥な粘液音が響くようだ。
耳の穴を愛撫されるという初めての感覚に、クシャナは大いに戸惑う。
クシャナの背がググッとしなっていき、白い肌は紅潮して汗だくになっていた。
――ぐちゅぅ、ぐちゅっ、ぐちゅぐちゅぐちゅ……じゅぼっ
メギドは耳の愛撫を中断し、またクシャナに囁く。
「おぞましいと思いこんでいるその陥没乳首は、男の欲望を刺激するとてもスケベで卑猥な…淫乱な乳首だ。引っ込み思案で、ムッツリスケベな可愛い乳首だよ」
露わになった、たわわな果実。その先端の薄紅色の乳輪を擦り、割れ目に浅く指を入れる。
「ふっ、くぅ…」

（…か、かわいい…？）
秘かなコンプレックスだった女の部位を褒められ、クシャナの中の鎧が一枚剥げる。
「っっ！ぅあっ!?あっ！っ、やめ…ろっ！あっ、あぅ、あ〝っ、あ〝ぁ…んっ、んっ、んっ、んぅ…っ！」
乳輪の割れ目を穿られ、乳房を絞られ、クシャナの胸を襲うビリビリを先端へと集められる。
――むにゅぅぅぅ、むにゅっ、くりくりくり、さすさすさす
まるでマンコを抉るペニスのように指が乳輪を抉り、その中に隠れた楚々とした乳首の先端をカリカリカリと刺激する。
「っっ、ふぁぁ、あっ、あっ、あっ、あぁぁぁ～～～っ、あっ、ふぁぁ…っ」
「埋もれているのが嫌なら勃起させてあげなきゃな。ほら、もうすぐ恥ずかしがり屋が出てきそうだ」
「っあ…、わ、私の……ん、んぁ……ぁ…乳首、が……くぅ……クソっ…お前なんかに、見られてしまうとは…」
クシャナの巨乳の先端が、少しだけ顔を出す。
自分でオナニーする時は、いつもここまでが勃起乳首の限界だ。
いつも埋もれて隠れている乳首が他人の手でここまで追い込まれたのは初の事。つまり人生で初めて、乳首を他人に見せてしまった瞬間でもあった。
――ぐにゅっ、ぐにゅぅぅっ、カリカリカリカリ
「あっ、くぅぅ…！うっ、あっ、やめっ、あっ、あっ、あっ」
乳輪を摘まれ、乳首の先端を指の先で柔く引っ掻かれると、クシャナは眉を八の字にしながら少し顎を持ち上げる。
「普段隠れてる分、敏感でエロい乳首だ」
「言う、なぁ…っ！お、おのれ…き、さま…は…んっ、ふぁ、あっ、…わ、わたっ、し…を、辱めるような、こと、ばかり…っ、んぅぅ、ふぅ、ふぁ」
悶えるクシャナは最高のごちそうだ。
世の男全てがそう思うだろう。
だからこうしてベッドの上で彼女がイジメられてしまっても、それ

は仕方がない事なのだ。
――カリカリカリカリ…
「うっ、んっ、んっ、んっ、ふぅっ、ぅぅ、っ、んっ！っっ！ふぅ、ふぅっ、んっ！んっ！」
クシャナが指を咥え、赤い顔で声を我慢する。
乳首の表面をカリカリされる度に、クシャナは仰け反り、腰をビクつかせてむっちりとした尻肉をスカートの内側で揺らす。
その揺れがメギドの股間を刺激し、ただでさえクシャナの痴態で滾るのに、既に男のイチモツはズボンの中で怒髪天を突きそうであった。
（この、硬いのは…！うっ、うぅ…私の尻に、擦れて…びくびくと…している…）
「っ、あぁ、あっ、あぁ！あ〝っ、あ〝っあ〝っあ〝っ！あ〝あ〝っ！」
――ぴくっ、ぴくっ、ぴくぅっ、ピィんっ
執拗に乳首の先端を爪先で穿られ、強めに乳輪を潰された時、とうとうクシャナの陥没乳首は勃起しきって完全にその姿を曝け出した。
「あっ…そ、そんな…！これは…わ、私の…乳首が、こんなに…？……あ、あぁ…な、なんと…」
自分で見ても、初フル勃起の乳首の姿は卑猥そのものだった。
ニヤッと笑うメギドはさらなる追い打ちを、白き魔女にかける。
「…クシャナ…お前は、いつも自分で触っているな？」
「っ！な、なにを…バカなっ」
今、クシャナの肩が跳ねたのは、快楽のせいだけではない。
メギドはまたニヤリとした。
「図星か」
「ち、違う…っ、戯言を言うなっ」
「どこもかしこも敏感で全身性感帯じゃないか。しかも…このエロ過ぎる膨らんだ乳輪（パフィーニップル）と乳首は自分で開発したのでなければ言い訳できないだろう」
ピンッと、指で巨乳の先端を弾かれると、クシャナの背がしなって嬌声が漏れた。

「ひぅっ、そ、んな…あっ、んっ、んっ、わけ…ないっ！んっ、んっ！やめ、ろ…っ、んっ、あっ！さっきから…ずっと、そ…こっ、ばか…りいっ！」

――さすさすさす、シコシコシコシコ

乳首の表面を抉るように擦り、芯を持って固くなりだした乳首を挟んで、まるで陰茎を扱くように大きめの乳首を優しく扱く。

「っぉ！♡うっ、ぐっ…！い、いィ…っ！やめろっ！指を…ぉっ、とめ、よ…っ！っ！ぅ、ぅあっ！あ〝っ、あ〝っ、あ〝っ、ああっ」

「オナニーでいつも弄っているからこんなドスケベな乳首になるんだ……そうだな、これは…結構小さい頃からやっている感じだ。１０代半ばからもう、オナニーに病みつきだったんじゃないか？」

言いながらメギドが乳首を指で押して、大きく柔らかな乳肉に乳首を埋没させて、また陥没乳首に戻そうというかのようだ。ギクンっとクシャナの腰が跳ねた。

（なっ!?なんで…！あっ♡なんでバレて…!?んんっ♡ふっ♡あっ…ダメっ♡くそぉ…、こ、こんな、やつにィ…！♡）

「やぁっ♡やめろぉッ！は、初めてなんだっ♡そ、そんなになった乳首を、触るのは…初めてなのだっ！ああっ！♡あ〝っ♡あ〝っ！♡」

「初めて外に出た童貞メス乳首だ。…可愛いぞ、クシャナ。最高に可愛い」

――ぐにゅくにゅくにゅくにゅ、シコシコシコシコ、カリカリカリ、シコシコシコ

（か、かわいいっ!?♡わ、わたしが…しろき、まじょと、恐れられる…わたしがぁ、かわ、いいだとぉ!?♡）

「っっ!?♡っ！♡あ〝っ！♡あ〝あ〝！♡あ〝っあ〝っあ〝あ〝っ！♡♡」

クシャナの、未だガントレットが装着された腕が背後のメギドの首に絡みついて髪を掴む。

もう片方の腕はメギドの脇腹に回されて、しっかりと男の抱きついていた。

肩越しにクシャナの豊満な体を見下ろしたメギドは、クシャナが腰

を捩って太ももを擦り合わせるのを見て、もう我慢が出来なかった。
「クシャナ…嘘だろう？高慢で、姫騎士で…っ！なんだこの天然のドスケベ存在は…！」
「っ♡だ、だまれぇ！♡っ♡う、あ〟っ♡あ〟♡あ〟♡わ、わたし…は！♡ドスケベではっ♡ないイイっ！♡」
彼とて焦がれ続けた極上の美女を目の前にして、しかも数々のクシャナの秘密を暴露して興奮しているのだ。
「許せんっ！」
「っ！きゃっ!?」
急に持ち上げられ、思わずクシャナは女の声を出した。
そしてベッドに倒されると、具足の付いた脚をそのまま割り開かれる。
「っ！よ、よせっ！そこは…！」
白いスカートを捲くれば、太ももの付け根が淫らな液で湿っているのが見ただけで分かった。
スカートを捲くった拍子に、むわっと女の匂いも漂う。クシャナが発情しているのだ。
メギドはスカートに頭を突っ込み、ズボンを引き毟ると具足まで脱がし、辛うじて露わになったクシャナの下着にむしゃぶりついた。
「なっ!?やっ！やめよっ!!っっ!?♡ひっ!?♡」
自慰ではとても味わえない感覚。
熱くヌメるベロが、愛液で湿る薄い陰毛を掻き分けて、自分の指しか通った事のない割れ目を舐めあげる。
「あ〟!?♡あ〟っ！♡んんんんっ！～～～～～っっ!?♡」
（舐められているっ！♡こ、こんなとこっ!?♡舐める、もの…なのかぁ!?♡あっ?!♡っんぁぁぁっ!?♡ダメだっ！だめっ、だめっ、ダメだっ♡こんなの…っ♡自分でするのと…違いすぎるっっ♡♡）
――じゅぶっ、じゅぶぅっ、じゅるるるっ、じゅぞっ
メギドの頭を両手で抑え、クシャナは脚をつっぱらせる。ガシャン、と具足が鳴った。
割れ目も、クリトリスも、尿道まで舐められ貪られてしまった第４

皇女。
「うあっ！♡ああ♡あっ♡あぁ～～っ、あっ、あっ、～～～っ♡あんっ♡あ゛っ、んっ♡舐める、なぁ♡そんな、とこ…っ！♡」
「クシャナっ！」
「ふぁ…♡な、なんだ…」
スカートから頭をがばりと出して、メギドは真っ直ぐにクシャナの蕩けた目を見た。
「愛している！」
「っ！♡」
――キュン♡
「ば、バカものっ…こ、こんな時に…なにを…♡」
クシャナの胸がときめいた。
体は散々の執拗な愛撫で発情しきっていて、そこに真っ直ぐな熱い目で愛を叫ばれては、さすがのトルメキアの白き魔女も封じた筈の乙女心の封印が解けそうであった。
メギドはずいっと顔をクシャナに近づけて、鼻先が付く距離で燃える瞳でまた言った。
「クシャナ…！ずっと、愛していた！」
「なっ！なにを…言うのだ、貴様っ♡私と貴様は…初対面で…い、今…無理矢理…私は……私は♡辱めを…っ」
「クシャナの処女…俺にくれ！」
告白だ。これは、クシャナが生まれて初めてされる、心底からの愛の告白だった。
そう理解した時、肉体から蕩かされていたクシャナは、心まで蕩けた。
クシャナの処女陰唇が下着の中でピクリとうねって、とろりと粘度の高い白濁液を涎のように垂らして、それは下着をぐっしょりと濡らした。
クシャナから立ち昇る女の香りが強くなった気がした。
「…ど、どうせ…抵抗など、できん♡す、好きにするがいい…♡」
――くぱぁ♡

具足が邪魔でズボンは全部脱げない。
太ももは閉じられたままだが、クシャナは尻側から回り込ませた己の指で、乙女の融けた秘所を割り開いてメギドに差し出した。
「…！クシャナ！」
「んん…！♡」
メギドのオスの怒張が、じゅるうっとクシャナの処女門を擦り上げる。
「き、きさまは…童貞ではないのだろう？お、落ち着かぬか…」
「そうは言っても、お前がここまで可愛いとは…予想以上で…興奮し過ぎてしまう」
またクシャナの胸が高鳴った。
「ふ、ふふ…何やら、貴様…雰囲気が変わったな。そちらが素か」
「…ま、まぁな」
紅潮した顔に、絹のような金髪を汗で貼り付けながらクシャナは微笑んだ。
メギドの頬に手を添える。
「お互い、王家に生まれるというのは…面倒なものだな、メギド」
「…クシャナ！」
「あっ♡こ、こらっ」
クシャナを強く抱きしめ、溶け合いたいと言わんばかりに肌を密着させ、そしてもう一度クシャナの処女の割れ目にペニスを添える。
――むちゅ…ぐにゅ…
「んっ…♡みゃ、脈打っているな…ふふっ…そんなに、私に興奮しているか？」
「当たり前だ…。……お前だって、こんなに濡れて…処女なのに簡単に先っぽが入る。…自分で開発し過ぎじゃないか？」
「う、うるさい……。フン…それに、それこそ、あ、当たり前だろう。お前が…メギドが、あんなに…愛する、から…♡」
額の緑石を揺らして、クシャナが少しだけそっぽを向いた。
恥ずかしいらしい。
「っ！く…いちいち可愛い奴だ……いくぞ、クシャナ！」

「……あぁ…来い。この白き魔女の処女、お前にくれてやろう…」
メギドが腰を入れる。
――ぐぶっ、ぶぶっ、ぶちゅうっ、ぐ、ぐぼっ、ぐちゅうううう……ぐぢゅんっっ♡
「んっっ♡ぐうううっ♡」
クシャナの顎が反り、手をメギドの背に回して食い込ませる。
狭いながらも濡れて解れた処女膣を穿ち、メギドの男根がクシャナの処女膜を突き破った。
男も女も、息が荒い。
「痛いか？」
「っ♡だ、誰かさんのせいで…私の処女膜はとっくに陥落していたようで、な……♡痛みは、ない♡」
「…クシャナ！」
「っっ!!♡んっ、あっ！♡あっ！♡あああっ♡」
――ぐちゅっ！ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！
辛抱たまらず、メギドは腰を動かしまくった。
「く…体温が、高いのか!?クシャナの中…なんて熱いんだ！」
「はぁ♡はぁ♡はぁ♡…そ、それは…んんっ♡ほ、褒めて、っ♡いるのかっ♡」
「もちろんだ！」
――ぐぼっ！ぱんっ！ぐちゅっ！ぱんっ！ぐぼっ！ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！
脱げきれぬズボンのせいで、クシャナの太ももは相変わらずの閉じ気味。
しかもクシャナは、オナニーで膣をある程度開発していたとはいえ処女だ。
狭く締め付ける、熱い襞肉に、あれだけナウシカやラステルを泣かせたベッド番長のメギドが呻く。
「はぁ！はぁ！クシャナ…！愛している！」
「っっ♡そ、そうか…♡」
ずっと繋がっていたい。そう思いつつ、一度モツをズルリ…と抜い

たメギドは、クシャナをひっくり返して、ムチッとした尻を上げさせた。
「お、おい…このような格好…♡私にさせようとはっ――あっ!?♡」
クシャナのズボンを破く。
これでようやく、思い切りクシャナの太ももを思い切り開くことが出来るようになった。
「メギドっ、貴様…このズボンはトルメキアの最高級の――んんっ!?♡んっ、んっ、あっ!♡ひっ、あっ……♡」
――じゅちゅ…じゅっ、ちゅぶっ
獣の交尾の格好となって、尻を高々と掲げるクシャナ。
彼女の無防備な女の花園に、再び鼻息荒いケダモノが踏み入ろうとヨダレを垂らして狙っている。
（…っ♡こんなの、女が…敵うわけがないではないか…っ♡）
――ぐぼっ!ぐちゅんっ!
「っ!はっ、あああっ!♡」
巨乳を揺らし、屹立した乳首をベッドに擦らせてクシャナは喘ぐ。
処女膜を失ってから、二度目の挿入。既にクシャナは、脳が焼き切れそうな快楽に屈しそうだった。
愛している、愛している、と覆いかぶさってきたオスは耳元で連呼する。
初対面であるはずなのに、このオスはずっと前から自分を愛していたと言うし、それに今までの態度にはかなり着飾ったものがあったらしい。
超常の力を持つが故に、常人には理解できぬナニかがあるのだろうし、それに小国とはいえ王族。
それを考えると、メギドもある意味で孤独だったのかもしれぬ、とクシャナは思う。
――ぱんっ、ぐぼっ、ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ!
「あっ!♡あっ!♡あ゛っ!♡あっ、あっあっあっあああああっ!♡」
（私と、こいつは…あっ♡似たもの、同士…やも…♡しれぬ…っ♡んっうううう♡）

今、確かにクシャナは愛を感じていた。
こうまで熱烈にオスに求められるのが心地良いとは。幸福だとは。
クシャナは初めて、女としての充足を味わっている。
オスを迎え入れる腰の動きが、いつの間にかメギドと息が合って、激しく打ち付け合う。
「クシャナっ！俺の子を生んでくれ！俺のものになってくれ！」
「っ！♡参ったとは…っ♡ん、ふぅ…ぅ♡言わぬっ♡が…っ、し、仕方、あるまいっ♡あっ、あっ、あっ♡んっ！♡こうなっては、もう、女は、男に…♡抵抗できぬっ♡孕ませたければ…っ、ぅ、っ、か、勝手に、膣内（なか）に吐き出せっ！♡」
「くそ…参ったと言え！俺のものになれ！クシャナ！」
――ぐっぼぉぉ！♡ぐちゅっ！ぱんっぱんっぱんっぱんっ！
「あああっ♡あっ、あんっ♡あ〝っ♡あ〝っ♡う、生んでやるっ♡だがっ…わたしはっ♡お前のものに…ならぬ♡ひ、秘石、と…貴様の、おっ♡力ぁ…♡わらひの、もの…にぃっ♡ひんっ♡」
部屋に充満する男女の獣が如き嬌声。
むせ返る性臭。この部屋に入れば、例え未精通の少年だろうが初潮の来ていない少女だろうが、発情しそうな程の淫卑がここには満ちていた。
「クシャナ…！出すぞっ！」
――ぐっじゅぅぅぅっ！ばちゅんっ！ばちゅんっ！ばちゅんっ！
「だせっ！♡わ、わたしの…おっ♡子宮の処女も、くれてやるっ！♡♡」
――びゅるるるるるるるるっるるるるうるるるるるっるうっ!!!
「っっっっっ!!!!♡♡あっ…！あっ♡あああ!?♡あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、っっっっっっっ!!!!!♡♡♡♡♡」
シーツが千切れそうな程に握りしめ、オスに捧げるように尻を掲げて、トルメキアの誰も想像出来ない喘ぎ声とメス顔を晒してクシャナはイッた。

――びゅーーーっびゅっびゅっ！びゅっ！びゅるっ！
「んっ！♡はっ！♡っっ！♡～～～～～～っっ！♡ふぁっ♡あっ♡んっ♡ふ、ぅ…んん♡んはぁ～～♡ふぁ……♡」
長い長い射精に、クシャナの子宮はいっぱいになって、女になったばかりのマンコから逆流しそうな勢いだった。
「はぁ、はぁ、クシャナ…」
「んっ……メギド…♡」
――ずるんっ…ごボォ、ごぼっ…ぶぶっ、ぶちゅ……
ずるりと抜かれたペニスには、クシャナが分泌した本気汁が絡み、逆流した精液と混じってシーツに落ちる。
クシャナの、ヒクヒクとした割れ目からも大量の淫液が漏れて垂れる。
（…お、終わった……♡参ったとは、言わなかった…ぞ）
初セックスを終え、降参宣言もしていないのだから秘石は自分のモノだ。
クシャナはそう思ったが、メギドも〝参りました〟とは言っていないし、何より一発では満足しない。
ガシッとクシャナの尻が掴まれた。
「…え？ま、まさか…お、おまえ…やめっ」
「クシャナっ!!お前がっ！参ったと言うまでやり続ける！」
「う、うそ…あっ!?♡あああああっ！♡やめよ！メ、メギドぉ!?♡んっ、んぁっ!?♡あああああ～～～～～～っっ!!♡」
――ばちゅっ！ばちゅっ！ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！

――
――
――

◆数時間後…◆
こうして冒頭の愛の営みに続く。
もはや夜明けは近い頃合い……しかし、まだこの男女は愛し合って

いたのだ。
「あっ！♡っぅ！♡んあっ!?♡ああっ！♡あああああ!!♡もっ、やめ…ろぉぉぉっ！♡」
クシャナが壁に手を付いて巨乳をぶるんっと揺らす。額飾りを付けたままの美貌が悦楽に歪む。額の緑の宝石が、垂れた前髪と一緒に揺れている。
涙に濡れる切れ長の瞳と、八の字に歪んだ細い眉が、クシャナが性感に翻弄されているのを如実に語る。
まだ手足にも鎧を付けているのが、余計に勇ましい普段のクシャナを犯しているようでメギドを興奮させた。
――どちゅんっ！
「っっ!?♡おぉっ!?♡そ、こぉぉっ!?♡ひっ、いいいイィッ!?♡やめっ！♡てぇぇぇ！♡あっ！♡あ゛っ！♡あっ、あっ、んんっ!!♡っっっ！♡あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、〜〜〜〜ッッ!?♡♡」
すっかり子宮口まで蕩かされてしまい、勢いよく突き進んできたペニスが、クシャナの弱点だらけの膣壁をぞりぞり削って新しく開発された大弱点（ポルチオ）に突き刺さる。
数時間抱かれっぱなしで、すっかり腰砕けになったなったムチッとした尻を、男のビンビンになった怒張で膣内から支えられていた。
「クシャナっ！私に参ったと言え！言ってくれ！私だけのモノになれ！クシャナ！愛しているぞ！」
「あっ♡あああああっ♡わ、わらひ…♡わらひ、の…負けだぁっ♡だから、らっ♡もうっ…！♡許して、くれぇぇ♡あっ♡はぁっ♡ひぃぃ♡もう、まいりっ、ましたぁっ♡まいりましたってぇ♡ひっ！♡ぎっ！♡イィっ！♡私、もっ♡愛しているっ！♡メギドぉ！♡」
口の中にメギドの指を突っ込まれ、唇を横に伸ばされながら、クシャナは呂律の回らぬたどたどしい言葉を紡ぐ。
涙目のクシャナのベロが僅かに唇から垂れて、勇壮な白き魔女とは思えぬ情けない顔をメギドに晒した。
――ぐちゅっ！ばちゅっ！ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ！
「んんんっ！♡んうぅぅっ♡もぅ、やめっ、ろぉ♡降参したぞっ♡も

うっ♡まいったって♡言ったぞおおっ、おっ、おっ♡あぁっ！♡あっ♡あ〝あ〝っ!?♡」
「お前は誰のものだ、クシャナ！」
メギドが言いながら腰でのの字を書いてクシャナの膣内を掻き回す。
その度、クシャナは勇ましい美貌をぐしゃぐしゃにして、真っ赤な顔で喘ぎ悶えた。
「ひっ♡いいいいイィっっ!!♡あっ！♡あああ〜〜〜っっ！♡あ〝あ〝あ〝あ〝っっ!!♡おまえのっ♡ものだぁぁっっ♡わたし、はっ♡あっ、あっ♡メギドだけのぉ、ものっ、だぁッッ！♡♡」
ガクンガクンと腰を跳ねさせて、トルメキアの白き魔女は男に完全敗北を決めていた。
こうしてクシャナは〝参りました〟宣言をしてしまい、子宮にもたらふくザーメンを飲まされてしまうのだった。
一番に孕ますつもりだったクシャナが相手であるので、メギドも勿論、精液の成分操作などせず孕ませ機能１００％のザーメンを見舞うのは当たり前だ。
――びゅるるるるるるるるるるるぅっっ!!♡
「ンはあアァっ!?♡あ〝あ〝あ〝っっ!!♡あっ！♡イクっ、イクイクイクっ！♡あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝〜〜〜〜〜〜っっっっっ!!!!!♡♡♡」
衰えぬ、熱い粘液を胎の奥深くに感じながら、クシャナは尻を高々と突き上げて絶頂した。
本日何度目か分からぬ膣内射精。クシャナは、己が確実に妊娠させられてしまったと、幸福に満ちた、満足な惨めさと敗北感を感じつつ、意識をブツリと落としたのだった。

親衛隊の脳破壊　の後　三人よれば姦しい　★（微エロ）

1階大広間で、一応の歓待で食事も出されつつ、毒に警戒したりもしながら彼ら親衛隊は寝ずに一晩を過ごした。

今頃、上階で彼らの敬愛する美しき白き魔女は、今日会ったばかりの田舎王子に…トルメキア全男性が夢見た肌を晒している頃だろう。

悶々と、そわそわと、イライラと、落ち着かぬ長い夜。

少しぐらい上の様子を探りたいが、階段にも大広間に繋がる幾つかの廊下の陰にも、屈強な城オジ達がいる。遠巻きに親衛隊達を見守っていた。動けない。

クシャナの身を案じて、乱暴されていないかの確認という大義名分で耳を澄ませて、よしんば情事の声など聞こえないものかなァ…と思ったりもせず、純粋に忠義心と心配から聞き耳を立てたりしたが…シーンと静まり返って物音一つ聞こえない。

（いったい上はどうなっているんだ…）

（姫殿下は……、くぅ…しょ、処女までお使いになって…あの男を上手く籠絡できただろうか…う、うぅ…姫殿下）

親衛隊達にとっては、拷問のような長い夜。

時が淡々と流れていき…明け方が近くなった頃。今まで物音一つ聞こえなかった上階から突然、音が響いた。

「――っ！♡～～～～っ！わたしの――――だぁ！♡だから――――っっ！♡あ゛っ――――あああ～～～～～～っっ！♡」

途切れ途切れに、ぶつ切りの声が微かに聞こえる。

女の声。

軍人たる彼らが、娼館でも聞いたことのないような、蕩けた淫卑な女の嬌声。

ガシャンッと親衛隊の一人が思わず腰を浮かせた。

そして恐る恐る、ゆっくりと座ったまま固まっていた同僚へバケツ頭を向けた。

「い、いまのは…ははっ……ひ、姫殿下に…に、似てた、か？」
「…」
「…」
６人の親衛隊達は皆固まっていた。
何とか、一人が震える声で返事をする。
「バカだな…今のは…きっと、この城で…誰かが逢引でも……しているんだ」
その言葉に勇気づけられ、また一人、また一人と硬直から立ち直って、震えた笑い声で会話が始まった。
「ははは。そうだとも。姫殿下が…あ、あんな…色っぽい声……」
「…い、色っぽかったな」
「うむ」
「……姫殿下に、似ていた…な」
「……うむ」
「今頃…！あ、あの生意気な田舎者を！姫殿下は脚で踏んでペットのように躾けているだろうな！そういう御方だ！」
「ああ！そうとも！下賤な男など簡単にあしらってしまわれる方だ！ひょっとしたら…姫殿下の事だ。あのいけ好かん王子のモツでも踏みつけて、情けなく吐き出させているかもな！」
「あ、有り得るな！ははは、そうとも。姫殿下に踏まれたり、手でされたりで情けなく射精して、もしかしたら姫殿下の神聖な乙女の園に門前払い食らっているかもな！ハハハッ！」
そんなバカ話をして、無理にでも明るい雰囲気にしていったが、
「――いいいいイィっ――――っ！♡あああ――――あ〝あ〝っ――まえのっ♡ものだぁぁっ――――たし、はっ♡あっ、あっ♡メギドだけのぉ、ものっ――――」
またも、女の〝致しているさなかの声〟が飛び飛びに聞こえて来て、親衛隊達は動悸がおかしな事になってきた。
皆、耳を澄ませてしまう。
そうすると、ギシッギシッギシッギシッと、静かながら激し

いリズムの軋みが聞こえてくる。
「…っ!!」
「うぅっ!ひ、姫殿下ぁ…!」
バケツ頭の覗き穴から液体が溢れる者もいる。涙が溢れていた。
耳を塞ぎたくなるような、クシャナらしき面影がある淫らな喘ぎ声をついつい聞いてしまうのは、親衛隊である以前に彼らも健全な男だからか。悲しい男の性であった。
そんな声と軋みが漏れ聞こえる事、数十分後。
「…音が、止んだ…」
げっそりとした声で、親衛隊の一人が言った。
それから暫く…彼らは無言で、饗された朝飯をボソボソと口に運ぶ。
もう誰も雑談などしなかった。
また1時間程経ったろうか。
朝日が完全に登り、城の中は女達が忙しく動き回りだして、外からも高らかに響くトンカチの音や農耕機械の音…子供達が走り回る和やかな生活雑多音が耳に飛び込んできた。
(……なんて、平和なんだ……)
王都トリスよりも、それらの音はどこか活気に満ちているように親衛隊には聞こえる。
そんな中…ガシャッガシャッガシャッと階段を降りる鎧の音が聞こえた。
親衛隊達はハッとなる。
「姫殿下の足音だ!」
「クシャナ様っ!」
「殿下っ!」
全員、背筋を伸ばして、いつものように不敵な笑みを浮かべている筈の敬愛する白き魔女を出迎える。
そう…不敵に、自信たっぷりに薄く笑っている白き魔女の顔が見れる…筈だ。
——ガシャッガシャッガシャッ…

セラミック装甲の軍靴の音高らかに、クシャナが親衛隊達の元に帰ってきた。
いつもの、重厚な鎧とマントに身を包んだクシャナが彼らの前にいた。
しかし…。
「姫…殿下…？」
「信じて送り出した姫殿下がっっっっ！」
「……」
翌朝、親衛隊達はこの世の終わりを見た。
クシャナの前だというのに、手にした剣も長銃も、思わず床に落として立ち尽くしてしまう程だ。
その場で崩れ、四つん這いになって魂が抜ける者もいた。
「お、遅くなって、スマヌ……皆も、……んっ、ぁ……お、おぃ…やめよ……へ、兵らに、気付かれる…っ♡」
ピッタリと、クシャナの身を包むマントは、その下が盛り上がって何かが蠢いているようだった。
そしてクシャナの身を包むマントは、その下が盛り上がって何かが蠢いているようだった。
風の谷の王子の方へ顔だけを向け、紅潮した頬で、潤んだ瞳で、小声で彼に何かを言っている。その声色は、強く勇ましいいつもの声ではなく、甘えたような色香溢れるもの。
あんな顔も声も、どんな古参の親衛隊だろうが見たことが無かった。
昨日までのクシャナならば、絶対に、誰にも見せることは無かった顔。
「…姫殿下…姫殿下……姫殿下が……」
「信じて送り出した姫殿下が」
「……」
親衛隊達はガクガクと揺れながら何とか立ち上がると、力が抜けきってしまった手で何とか敬礼した。
クシャナが親衛隊に視線を戻し、何かに耐えるように薄く唇を噛みながら、赤い頬で口を開く。

「…んっ…ごほんっ……み、みなも…た、大義…で、あった……。その…っ、すまぬが、…っ…わ、わたしは……ん…私は、秘石奪取の任に……し、しっぱい……ひぅ…」

クシャナのマントの下が、ごそごそと蠢く。

マントの下で、胸のあたりだったり腰のあたりだったりが、もぞもぞ蠢く。

――くちゅ…

何やら水音が聞こえて気がした。

親衛隊達は血涙を溢れさせそうな勢いであった。

クシャナの、いつもならばとても力強い鋭い瞳が潤んでいる。

血涙を流しそうになりつつも、親衛隊達は股間にも血が集ってきてしまうのだ。

鎧の下で股間が痛いくらいに勃起していた。

「はっ……ん……任務に、失敗……し、て……して、は…いないのだ、が……っ…今後は、こ、この男を連れて……っ♡あっ♡……戦場に、戻って……もどってぇぇっ…♡」

荒い呼吸で声も艶かしく震えるクシャナが、何故か慌てて急に兜のフェイスガードを下ろし、

「っっ！♡～～～～～っっっっっ!!!!!!♡♡♡」

ぶるるっと痙攣し、その途端にクシャナが何かに躓くようによろけた。ただ立って親衛隊に話しかけているだけなのにだ。

ひどく近い距離で隣に立っていたメギドが、すかさずクシャナを支える。

メギドの指がぬらりと濡れて光を反射していたような気がしたのは、きっと親衛隊の気のせいだろう。

「大丈夫か、クシャナ？体調でも悪いのか」

メギドがクシャナの心配をするが、どこか白々しいものを感じる。

親衛隊達の股間はかつてない熱を湛え、股装甲を突き破りそうな勢いで勃起してしまう。触ってもいないのに滾りに滾って射精してしまっている者もいた。

しかし、敬愛する主君の手前、微動だにせず敬礼を崩さないのだ。

「っだ…だいじょうぶ、だ……はぁ、はっ、はっ、はぁ…♡……ん……メ、メギド…後で、お、覚えて、いろよ……っ♡」
ヨロリと立ったクシャナは、今度は比較的落ち着いて言葉を続けた。
もうマントの内には、奇妙に蠢く何かはいなさそうだ。
「ふぅ…ふぅ…ん……ごほんっ…とにかく、メギドを伴い私は予定通りペジテに帰る。秘石は…その…こやつに預けておく事にした。よいな！」
「「ハッ」」
「よし……ならば、とりあえずコルベットに戻りいつでも出られるようにしておけ。何かあったらまた呼ぶ。それまで船で待機せよ」
「…クシャナ殿下は？」
「私は……もう少し、メギドと今後について…打ち合わせを行う」
「…」
「……」
「……」
親衛隊達から妙な間が漂う。
「……分かったか!?」
短く「はっ！」と返事をし、クシャナの号令に合わせて彼らは駆け足で船に戻っていく。
親衛隊達の腰が妙に引けていたり、「アッ、鎧ノ隙間ニ…イテテテッ」と小さく言っていたのは気のせいだろう。
親衛隊を見送ったクシャナ。
ジロッとメギドを見る。
「怒った？」
「怒っている」
ひょい、と白き魔女のフェイスガードを勝手に上げて、中のご尊顔を拝む。
トルメキア第４皇女にこんな勝手な事をして、クシャナの怒りを買わずに済むのはメギドだけだろう。
美しい顔の頬はやや紅く、そして少し困ったような…それでいて潤

んだ瞳でメギドを睨むのだ。
「…」
思わずメギドは、黙ったままクシャナの顔に見惚れる。
「…貴様、外には声も音も漏れないようにしていると言ったではないか！な、なのに…あ奴らの、あの反応…！き、きっと…聞かれていた！う、うぅ…こ、この私の…あ、あんな声を…！」
「……超常の力で防音はしたんだ。だけど…クシャナに夢中になり過ぎたのと、クシャナとやり過ぎて疲れたので、ちょっと弱くなったかもしれない。最後の方とか」
ごめん、頭を下げたメギドの頭を両手で持ち上げて、面を上げさせる。こうして面と面で向き合うと、少しだけメギドが高い。
クシャナの眉が険しく曲がった。
「結局、お前が猿のように私を求めるからではないか…？全く…。……お前以外に、私の……その……気持ち良くなる時の、声とか顔を…晒したくないのだ」
クシャナの頬の赤みが強くなって、そして拗ねたようにそっぽを向いた。
「さっきフェイスガードを下げたのも？」
「……お前以外に見せる気はない」
メギドは平静を装いつつ、内心で、感動とも、萌え上がるポカポカとも言える沸き立つ感情に襲われている。
「可愛い…」
そしてつい言葉に漏れる。
「……そ、そうか」
頬の赤みを更に強くしながら、今度は逆方向にまたそっぽを向くクシャナ。
ここに親衛隊が居なくて良かったと言える。
クシャナの恥じ的な意味でも、そして親衛隊達の精神衛生的な意味でも。
ごほんっ、と咳払いをし、クシャナがメギドに向き合う。
「それで…私に紹介したい者とは誰だ。余り時間はないのだ。手早く

頼む」
「とりあえず…側室の紹介を…」
「貴様…婚儀を上げる前に、もう側室か」
ジト…と睨む彼女の視線がやや痛い。
付き合って下さい、と告白してＯＫを貰ったらすぐに浮気相手を紹介されたようなものだ。
もっとも、今の時代と、彼ら王家育ちの価値観を加味すると、そういった事も常識の範疇ではある。
だからすぐにクシャナも「わかった」と納得した。多少、つっけんどんではあったが。

――

そして、クシャナは今…つい十数分前まで、初めて出来た愛する異性と濃厚に愛し合っていた現場に戻っていた。
少々そわそわしているようだ。
（…さ、さっきまで…私は…ここで……メギドとあんな事を…！うぅ）
窓は開けられ換気しているし、メギド印の怪しげなアイテム『ふぁぶりーず』なる物も振りまいたが、まだそういう匂いがかなり感じられる。
そこに、
――コンコン
部屋の戸を叩く音。
メギドが入室を促すと、扉を開けて二人の女がそこに立っていた。
「…失礼します、お兄様」
「お邪魔致します…メギド様」
ナウシカとラステルであった。
ナウシカが素早く視線だけで部屋を確認し、そして鼻をスンッと鳴らす。

「…お兄様……その人と…？」
「……」
ラステルも俯き加減に頬を染めている。
ナウシカもラステルも、この濃厚な香りが情事の際の男と女の体液の匂いだと知っている。
メギド以外の男の液の匂いは知らぬし、知りたいとも思わないが、この匂いは精液の匂いに間違いない。
二人の美姫が散々嗅ぎ、掛けられ、胎内に注がれたものだ。
ナウシカも、ラステルのように頬を赤らめるが俯いたりなどしない。
兄を見、そして兄のベッドにゆるりと腰掛け、まるでこの部屋の主にように堂々と寛ぐ甲冑姿の美女の瞳を、キッと見た。
「トルメキアの、クシャナ…様」
クシャナは笑った。
「フッ…そのような目で見るな。まるでオモチャを取り上げられた童のようだ」
「お兄様はオモチャではないわ。私の…最愛の人です」
むぅ、とクシャナが唸る。そしてナウシカの目を黙って見返した。
その目は、兄妹故の家族愛というだけでは済まない熱を持っているように、クシャナには思える。
「……やれやれ、メギド。ナウシカのお前を見る目……一人の男を見る目だ。貴様…ラステルだけでなく、実妹にも既に手を出していたな？」
ははは、とメギドは乾いた笑いを浮かべた。
笑って誤魔化したな？とクシャナはそれをすぐに見破った。色に溺れていない時のクシャナはとても明敏なのだ。
鼻で笑いつつ、クシャナはナウシカを見据えて言う。
「まぁいいだろう。古今東西、王家の婚姻は退廃が付き物…母子、姉、妹…近親結婚など珍しくもない」
あっさりとお許しが出た。
メギドは、もう少し拗れると思っていたから、これには少し拍子抜

けである。
　鎧をガシャリと鳴らし、クシャナは脚を組み替えて少女二人を冷ややかに見つめる。
「改めて名乗っておく……私は、トルメキアの第４皇女、クシャナ。…そなたらの名を聞こう」
「風の谷のナウシカ」
「ペジテのラステル」
　ナウシカの、クシャナを見る目も穏やかではない。
　そしてラステルのそれはナウシカ以上だ。ヴ王の命によるものだとはいえ、故郷を滅ぼした実行犯であり、真犯人の実娘が目の前にいるのだから当然だろう。
　しかしクシャナはさらりとその視線を流して、直属の部下に言うように…まるで命令を下すように二人に口を開く。
「さて…私達の生まれを鑑みても、私が正室という事で異論は無いと思うが……一応、お前達の意見も聞いておこう」
　堂々とした態度であった。
　生まれついての女王の貫禄とでいうものが、クシャナからは溢れていた。
　しかし、ナウシカもまた生まれついての偉才を持った身。
　メギドという兄がいなければ、それこそ聖女となって世界の全てを背負って走り回っていたであろう傑物だ。
　堂々たる王女クシャナを、一波の波紋も無い波風立たぬ水面のように迎え撃つ。
「正室か側室かは役割の違い。異論はありません…あなたに正室(それ)はお任せします。大事なのは愛ですから」
　ピクッとクシャナの片瞼が動く。
「フフフ…愛か。確かに、な。……ならば、やはり私が正室で問題は無いという事だ」
　今度はナウシカとラステルの眉が一瞬動く。
　ラステルが無表情で言う。
「ナウシカさんの仰る通り…私も異論ありません。正室は政治的な向

きも強く、奥の事も整えなくてはならない…クシャナ殿にぴったりかと存じます。お仕事で昼も忙しいでしょうし…夜の事は、若い私達に任せて…クシャナ殿はゆっくりお休み下さい。年が年ですから」
部屋の中の温度は数度下がったかもしれない。
「若い…？」
クシャナの呟きにナウシカとラステルは同時に頷いた。
「ええ、そうですね。私達の方が…だいぶ若い」
「クシャナ殿も、一人で毎夜の褥はお辛いでしょうから…年も年ですし。だから、メギド様に私達も付いていきます。メギド様は絶倫ですから」
言われたクシャナの瞳は氷のようだ。
不敵な笑みも、いつもよりも酷薄なもののように見える。
「付いてきても構わぬが、軍に参じる以上、軍司令官たる我が命は絶対。女だろうと容赦せぬ。…死ぬぞ？貴公達…。それでも構わぬのか？」
「お兄様と離れる方が、死よりも辛い。行きます」
「私も…メギド様に抱かれたその時から、この命…メギド様と共にあります」
チッ、という舌打ちが聞こえた。
クシャナがあからさまに二人の少女へしたものだ。
〝抜け駆けはさせない〟
そういう強い意志が、三人の女の間でぶつかり火花が散っているのだ。
三人の女は、顔面の筋肉だけでニコリと笑顔を向けあった。